
2009年度(第4回) 札幌学院大学
FACULTY DEVELOPMENT 報告書

2010年6月

札幌学院大学

目 次

巻頭言

「札幌学院大学 FD 活動報告書」創刊号の刊行によせて
学長 奥谷 浩一

1. 全学 FD 活動の記録	1
1) 第 1 回 FD 研究会 (2009 年 11 月 9 日) 「学生の意欲を引き出す具体的方策を考える」	
2) 第 2 回 FD 研究会 (2010 年 2 月 19 日) 「ICT を活用した授業改善に関するフォーラムの開催」	
3) 第 3 回 FD 研究会 (2010 年 3 月 12 日) 「KIT ポートフォリオシステム及び修学基礎の実務運用・成果等について」 (総合教育センター FD 研修会)	
2. 学部学科の取り組み	67
1) 経営学部経営学科・会計ファイナンス学科	
2) 経済学部経済学科	
3) 人文学部英語英米文学科	
4) 人文学部こども発達学科	
5) 法学部法律学科	
6) 社会情報学部社会情報学科	
7) 総合教育センター	
3. 2008 年度授業評価アンケートの分析	102
4. FD に関する研究会・研修会参加報告	120
1) 大学教育学会第 31 回大会 (2009 年 6 月 6 日、7 日)	
2) 第 59 回東北・北海道地区大学 一般教育研究会参加報告 (2009 年 9 月 3 日、4 日)	
3) 大学教育学会 2009 年度課題研究集会 (2009 年 9 月 3 日、4 日)	
5. 関係資料	126
1) FD 推進センターの設置について (全学運営会議提案文書)	
2) 札幌学院大学 FD センター規程	
3) 北海道地区 FD・SD 推進協議会規約	

「札幌学院大学 FD 活動報告書」創刊号の刊行によせて

学長 奥谷浩一

この度『札幌学院大学 FD 活動報告書』創刊号がいよいよ刊行の運びとなりました。このことに心から慶賀申し上げますとともに、この報告書の刊行に関係された教職員の皆様のご奮闘に敬意を表します。

正直に申して、これまで札幌学院大学がFD活動の面で全学的な取り組みを行って実績をあげていたとは言い難く、このことは数年前の大学評価等においてつとに指摘されていたところでした。本学においてもこれまでそれぞれの学部でそれなりの取り組みを行ってはいたのですが、全体として見れば散発的であり、これを全学的な取り組みとするところまでは必ずしも十分には至ってはおりませんでした。このことの反省から、昨年度、前教務部長であり現副学長の石川千温先生を中心に、全学的なFDセンターを立ち上げることになり、昨年度末にその第一歩が踏み出されました。それぞれの学部学科で行っているFD活動にかんしてまず情報を共有し、この活動が全学的に目に見えるようにし、そのうえでこうした活動をFDセンターが支援しうる体制にしようというのが、札幌学院大学のFD活動がめざすところであり、今回の報告書もこうした基本的な考え方に支えられています。

現在、我が国の私立大学はいわゆるユニバーサル・アクセス時代を迎えています。このような時代に最も必要とされるのは、これまでのように、大学の講義についてこられる学生だけを相手にしていればいいというのではなくて、その反対に、受け入れたすべての学生にたいしてできるだけ丁寧な教育を施して、教育の質を高め、彼らにいわゆる「学士力」を付けて社会に送り出すという姿勢です。要するに、受け入れた一人ひとりの学生の実情に応じてどれだけ丁寧な教育を展開することができるのか、彼らの学力および人間力を高めて彼らを社会に送り出すことができるかが大学に問われています。こうした社会的要請に応えるためには、やはりどうしても、大学側が受け入れた学生が内容をよく理解できる講義、学生たちを引き付け、彼らが面白いと思わせる講義を工夫する必要があります。大学の教員は、私を含めてですが、これまであまりにもこうした教育方法、知識を伝授する技術の工夫を行うという必要に迫られるということが少なすぎたと思います。FD活動の根底には、まさしくこうした工夫を教員同士が切磋琢磨して行うという必要性があります。したがって、ユニバーサル・アクセスの時代においては、こうした意味でFD活動を活発に行い、教育の質を高めるということが大学のステイタスを打ち出すとともに、大学生生き残りのひとつの戦略とならざるをえません。

以上のような意味で、本学のFDがますます活発に、また内容豊かに発展するように祈念するとともに、そのためのひとつのきっかけとして今回の報告書が大いに活用されることを心から祈っています。

1. 全学FD活動の記録

1) 第1回FD研究会

「学生の意欲を引き出す具体的方策を考える」

(2009年11月9日)

2009年度 FD活動記録

組 織	FD委員会	取組番号	1 / 2
FD活動の名称	学生の意欲を引き出す具体的方策を考える		
開催日時	2009年11月9日		
開催場所	G館5階 特別会議室		
参加人数	20名 (非常勤講師1名含)		
添付資料の有無	(有) 無		
概 要	<p>1. 授業評価アンケートの分析 石川副学長がパワーポイント資料を使って、2008年度の授業評価アンケートの分析結果を報告した。</p> <p>2. 授業映像を観ながらのディスカッション 授業評価アンケートで評価が高かった舩田弘子教員の授業をビデオ撮影し、その映像資料を観ながらディスカッションを行なった。 当該授業の到達目標を学生に提示する方法、板書、話し方等について分かり易い授業にはどのような特長があるのかを参加者で確認した。 非常勤講師にも呼びかけて実施した。</p>		
成 果	<p>評価の高い教員の授業風景を観ることで、課題提示の仕方、講義の進め方、板書の仕方、教壇での動き、講師の目線、発話の様子とリズム、講義中の中のとおり方、といった当該教員の具体的な講義方法、更にはそのような方法を採用する理由について知ることができた。</p> <p>リアクションペーパーの活用方法、私語への対処の仕方などについて、有効な方法を参加者がお互いに披露しあい共有することができた。</p>		

※ 取り組みが複数ある場合は「取組番号」に1/1、1/2のように記入してください。

※ 提出期日 2010年5月20日(金)

※ 提出先 教務課長(内線3210)

 札幌学院大学
は大学基準に
適合しているとの
認定を受けています

2009年度
札幌学院大学

FD研究会

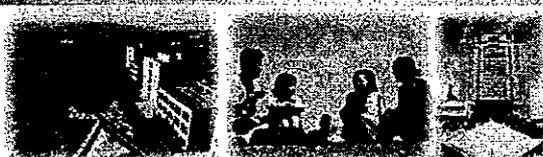
学生の意欲を引き出す 具体的方策を考える

1. はじめに

2. 2009年度授業評価アンケート集計結果について
石川千温

3. 「社会心理学」の授業方法について
— 講義ビデオからの気づき —
舛田弘子

2009年度前期授業評価 アンケートの集計結果から



教務部長
石川千温

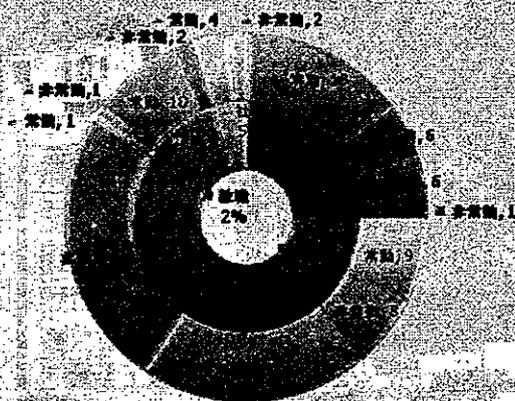
札幌学院大学

内容

- 履修者数100人以上の講義をピックアップ
- 学部毎に常勤・非常勤別の評価レダーチャート进行分析
- 評価項目間の関連性进行分析
- 一つの改善方策の提言

対象科目

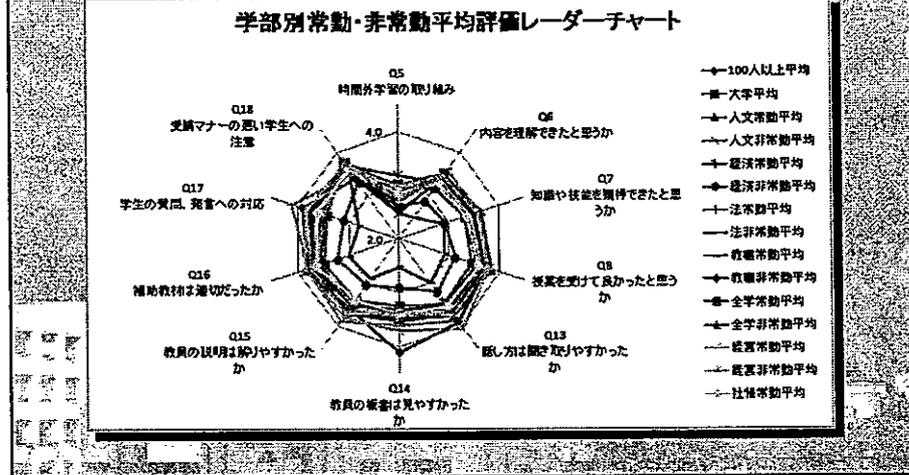
- 履修者数100人以上の科目
 - 調査対象科目469科目中：123科目 約26%



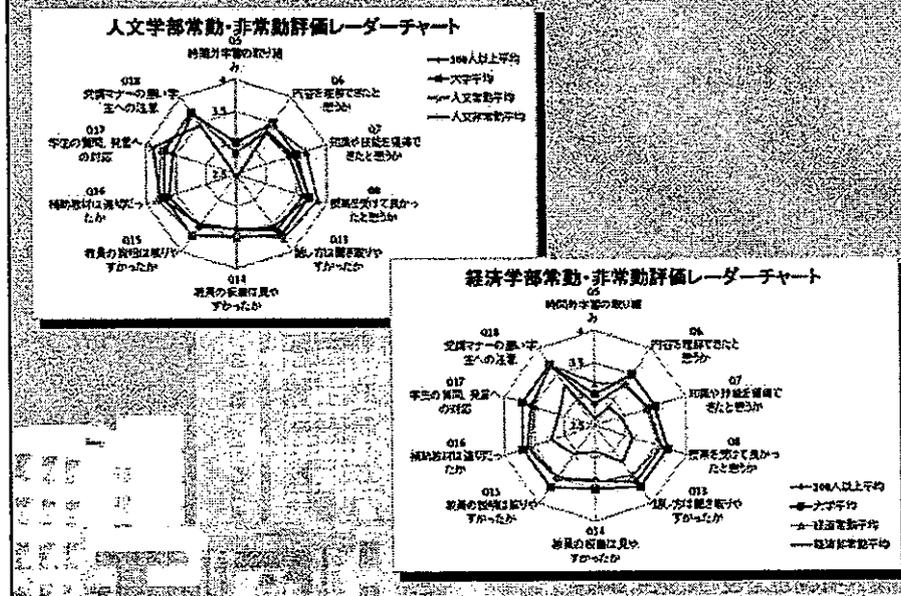
対象科目123科目の内訳

学部別常勤・非常勤の評価点の平均

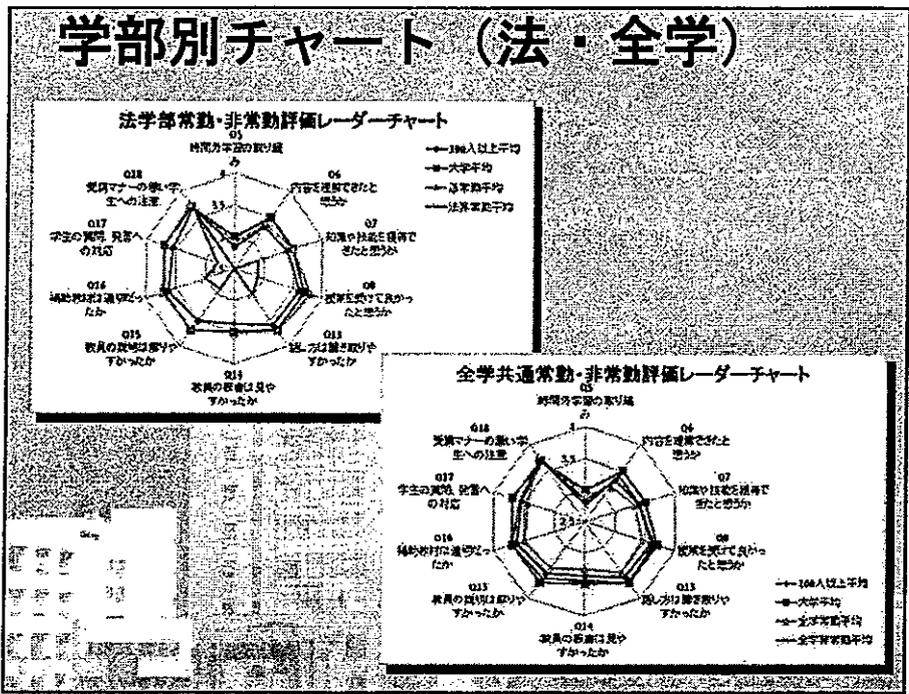
- どの学部もQ5の学生自身の時間外学習の取り組みは総じて低い



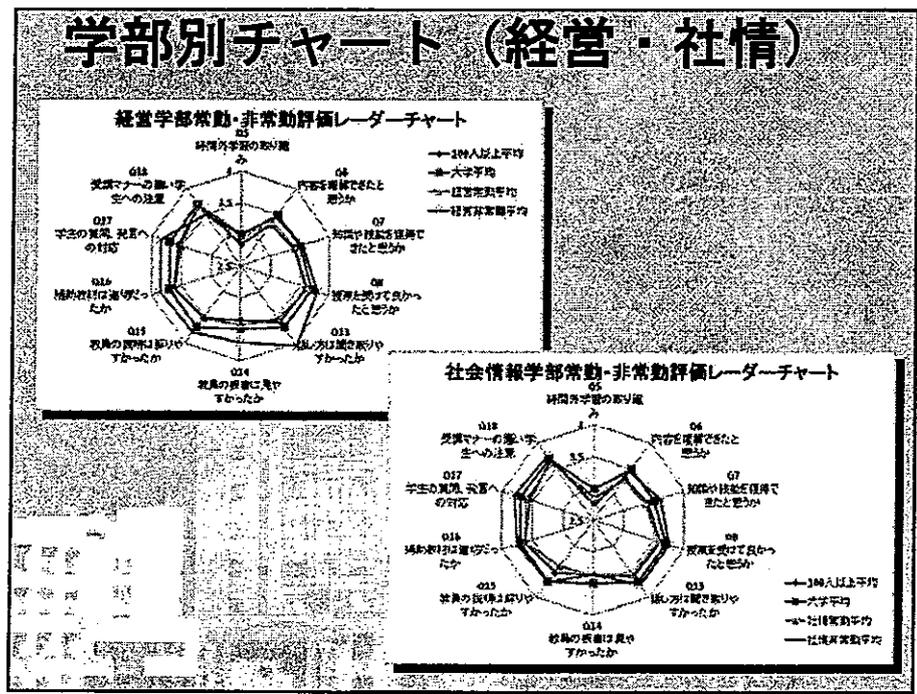
学部別チャート (人文・経済)



学部別チャート (法・全学)

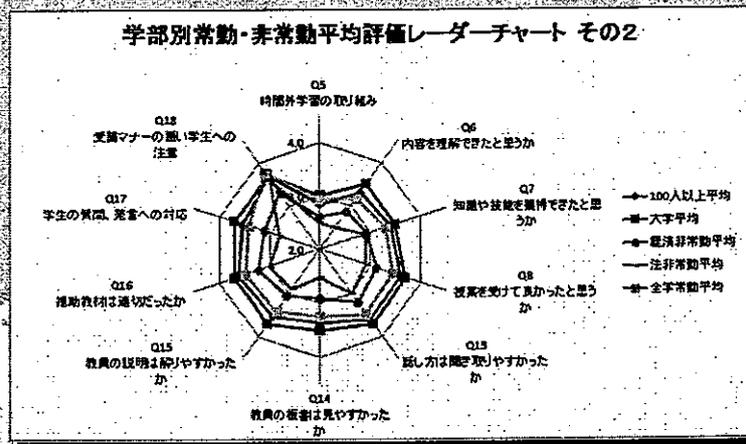


学部別チャート (経営・社情)



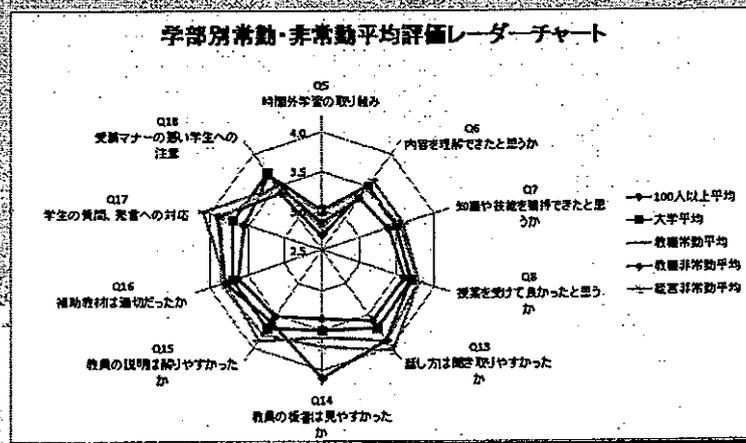
100人平均より低い種別を抽出

- 経済非常勤、法学非常勤、全学常勤
- 板書、話し方の評価点が低い



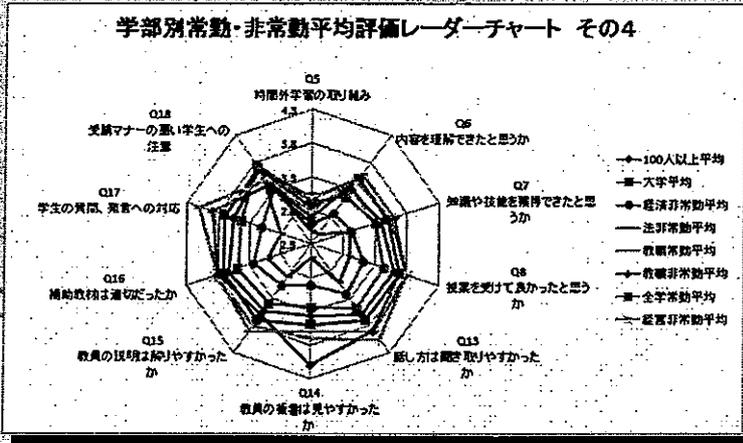
100人平均より高い種別を抽出

- 教職常勤、教職非常勤、経営非常勤
- 板書、話し方、質問への対応の評価点が高い



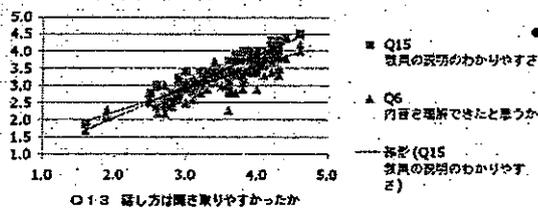
両者（高低評価）の比較

- 板書・話し方が明暗を分ける
- その他の評価は板書・話し方に依存か



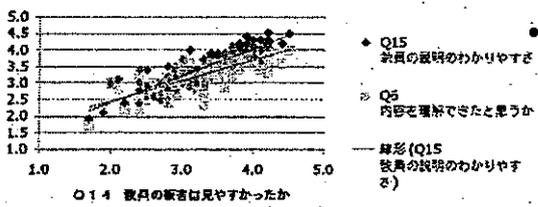
話し方と板書の評価と他の項目の評価

各設問の評価点数のQ13との関係



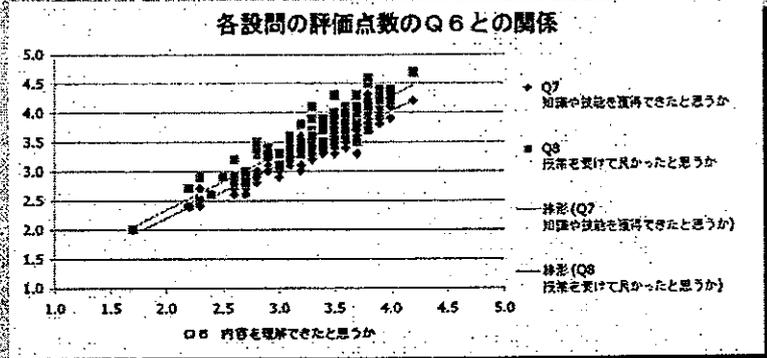
話し方の評価点が高いと、Q15説明のわかりやすさ、Q6内容の理解度とも高い傾向

各設問の評価点数のQ14との関係



板書の評価点が高いと、Q15説明のわかりやすさ、Q6内容の理解度とも高い傾向

理解度の評価と授業満足度等評価



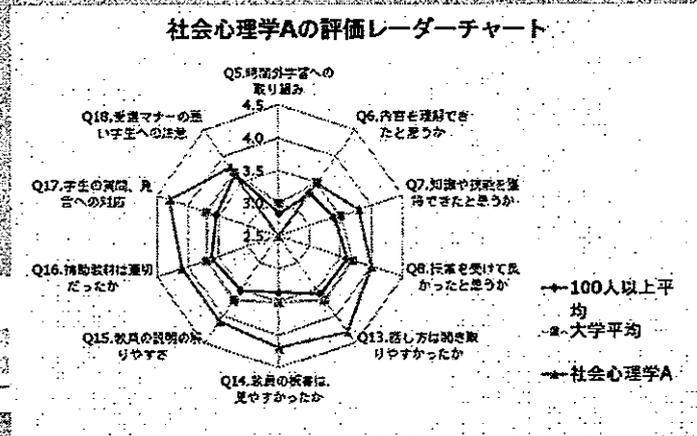
- 当然のことながら、内容を理解できたと思えば、Q7知識や技能の獲得、Q8授業を受けて良かった の評価点が高い

まとめと提言

- **まとめ**
 - 板書、話し方の良し悪しが授業のわかりやすさ、理解度、満足度に影響があるらしい
 - 話し方をすぐに改善するのは難しい
- **提言**
 - 板書の改善に心がける
 - 字の大きさの目安を全教室に掲示
 - できるだけきれいに（なぐり書きはせず楷書で書く）
 - 書いたものの重要性を強調する

授業実践報告

- 社会心理学A担当 舛田弘子 先生（人間科学）
- 100人平均を大幅に上回る評価項目が多い
- アンケート回収率が高い



社会心理学B（11/2、3時限） の講義の授業参観の感想

- オーソドックスな講義形態
 - E401教室、100名程度
 - リアクションペーパーの採用
 - レジユメの配布
 - 板書
 - 板書の量が多い
 - 字が丁寧
 - 図を描きながらの説明

授業での注目点

- 授業の進行のコントロール
 - 授業開始時のアジェンダ
 - ナビゲーション
 - 途中でのまとめ
 - 次週予告
 - 学生の様子
- 板書
 - 板書における図示と色分け
 - 色分け板書
 - アンダーライン
- 説明の方法
 - 前回の話の振り返りとリアクションペーパーへの回答
 - レジューメの音読
 - 言葉、語句の説明
 - 過去の経験談

第1回FD研究会「学生の意欲を引き出す具体的方策を考える」(2009年11月9日)

【報告】

〈舛田先生〉

よろしくお願ひします。自分の授業ビデオを観て、何か、お恥づかしい限りで申し訳ありませんが、それでは、とりあえずこの授業運営について話をさせていただきます。

◆アジェンダ

今日お話ししたい事は三点あります。

一つには、社会心理学Aの授業の進め方はどういうものかという事に関して概略をお話します。

二つ目に、私自身が授業を作る際にどんな事に気をつけているのかという事についてお話を致します。

三つ目に、受講学生に言われるクレームや要望と、それに関して私がどういう回答を持っているかという事と、最後に学生が褒めてくれることに関して私はどういう感想を持っているかという事に関してお話をさせていただきますと思います。

◆授業の進め方について

まず第一点の授業の進め方なのですが、先ほど司会者がオーソドックスな淡々とした授業形態、と言って頂いたのですが、全くその通りだと思ひます。今回は、司会者のようなパワーポイントと違ってシンプルなパワーポイントを使って喋っていますが、普段はパソコンを使わずに、レジメと資料だけで授業を行っています。

レジメは、先ほどA4という風にご紹介頂いたのですが、通常はA3サイズを使っています。レジメとしてその日の中身に関して片方だけに印刷して、反対のページは白紙にしています。レジメは、学生が好きのように使えればよいと思ひますが、このようにしてやると、私が説明している中身のどこに関連して自分がノートとっているのかというのを非常にわかりやすくなるのではないかと。これは後からも出てきますが、そういうレジメの作り方をここ数年しています。

資料は必要に応じて出しているという感じですが、時折、図表や写真などは、資料提示機で提示しています。パワーポイントは使ったこと無いです。パワーポイントって言うのは、色々使うと便利なのかもしれないのですが、どうも何か私自身が上手く使いこなせないのと、しっくりこないもので、そういうハイテクな物は使わずにきました。進め方としては、先ほどからありましたレジメに沿って説明して、あと必要に応じてというか、ものすごい量の板書を致します。テキストは使いません。参考文献等は随時紹介するという形です。

●リアクションペーパーについての取組み

最後に10分くらいの時間を取って、リアクションペーパーに何か必ず書けと言ひます。何も無くてもいいから、と言うのではなくて、質問とか意見とか感想とか、何か必ず書け。というのは、学生はどうも文章を気楽に書くのが苦手な様な気がします。なので、自分が書けること、書きやすい事に関して、書かせる練習をさせたいな、って言

う風に思ひますので、とにかく何にもないっていう事はあり得ないはずですので、「ここが面白かった」でもつまらなかつたでも、「教室が暑かつた」でももう何でもいいので、とにかく書け。但し書いたものに関しては、必ず私は目を通して、それは場合によっては評価の対象にしますよ、って事は言ひます。

●出席の対応

それから、出席は必ずとります。リアクションペーパーを出して貰うと一緒にカードリーダーで確認をしています。実際は終わる間際に入ってきてカードリーダーだけ通して、そういう心配も、そういう不埒者も無きにしも非ず、ですが、まあその辺はちょっと、しょうがないかなという風に、一応出席を促すのは大事なかなと思ひますのでとります、という風にしてやっています。

ここまでの、授業の全体の流れです。

◆授業の際の留意点

二つ目の授業を作る際に気を付けていることですが、授業でも何でもそうだと思うのですが、一時間の流れみたいなもの、ある程度ちゃんと作りたいという事は常に考えるようにしています。

●授業のストーリー作りと俯瞰的な見方

例えば今日は何をやるんだっていうことの中で、例えば言葉の定義がここのところはまず今日は抑えて貰いたい事であるということであつたり、あるいは実験の例なんかを理解して貰いたいっていうようなことであつたりっていうような事が色々あるのですが、やっぱり、流れとかストーリーみたいなものが無いとちゃんと理解するのが難しいのかなと思ひるので、まず流れをつくるような授業プランというものを考える様にはしています。

先ほどの全体像をまずお話をしてから始めていた、ということ司会者の方から指摘して頂きましたけれど、これはですね、実は私、前任校に居ました時に、非常勤で盲学校の学生さん達を相手にして講義をやる事が、さっきの専門学校の金髪の学生の多い例とは別な意味で、私の教師経験の中で非常に大きかつた。

というのは、弱視の学生もいるけれど、全盲の学生もいる訳ですよ。そうすると、例えばプリントとかには頼れない訳ですよ。しかも、ただ平板に喋っていたのでは、一体授業で何が行われているのか、今自分はどこにいるのか、という見取り図が全然わからない、という事をその学生さん達にすごく教えてもらったんですね。なので、どういふところに今、見取り図、全体を鳥瞰をした場合にどういふところに我々はいふのか、というようにどこを出来るだけ言語化するようにしています。はっきりと。これは、その生徒さん達に教えてもらったという風に思っています。

それは別に盲学校の学生さん達だけではなくて、本学の学生にとっても大事な事だろうなって言う風に思ひますので、そういうような形にはするように気を付けています。

●用語の定義

次に、用語の定義っていうところですが、これは、別の領域でも同じだと思うのですが、日常的な用語と、学問の上での用語っていうのは違って、ちょっとした学生の勘違いで理解が進まないって事を繰り返し経験しているものですから、これはビシッとやっておかなければならない事は、意識しています。

例えばパーソナリティっていう、心理学だと人格とか性格っていう事にあたる言葉があるのですが、下手をすると学生はパーソナリティってラジオかなんかで喋る人だと思うのですよね。で、パーソナリティってすごく明るいイメージがあったのに何でこんな真面目な話なのですか、なんて質問が来たりして、「えっ何で一体そういう事になるんだ」、と思ってよくよく聞いたら、ラジオの事と勘違いしていた、なんて事がありますので、そういう日常的な思い込みみたいなものにどう左右されるのかっていう事は私は常に気を付けなきゃいけないなっていう風に思っています。この辺なんかは割と注意をしてやっているつもりであります。

●事例の提示

それから事例ですが、これは非常にこだわっている所で、やっぱり抽象的な話だけされても学生は分からないと思うので、じゃあそれは、どういう日常的な事例と結びつくのか、例えば、今のパーソナリティの例もそうですよね、ただ定義などを明示するとか言われても、まあそりゃそうだよねって話になるのですが、例えばこういう事があるんだよっていうのをちょっと言ってあげると非常に分かりやすくなったような感じを受けます。実際分かっているのかどうか難しいと思うのですが、少しはあると思うので、出来るだけ日常的なものに、もちろん私がやっている領域がそういうことを取り入れやすいって事もあると思うのですが、取り入れるようにしています。

あとは、社会心理学っていう領域に特有なのかどうか分からないのですが、例えばですね、皆さんもご存知かどうか、吊り橋実験なんていうのがあります、アローンアンドなんて人がやったのですが、吊り橋を渡った後、ドキドキしている時に会った異性に好意を抱きやすいつついうように単純化されているような実験例があるのです。だけれど、それは本当はそんな単純なものじゃないんだけど、なんか怖い思いをしている、ドキドキしている時に会うと好きになっちゃうんだって、みたいな形で学生は何となく聞いて覚えてしまう。しかし、実際は研究っていうのはそんなアバウトなものじゃなくて、もっと地道なものの上にあることだから、出来るだけ例っていうのを、世間に普及している上澄みだけではなくて、実はこういう問題意識で、こういう方向で、と言うところを知って欲しいなっていうところがあるので、ここは意識的にやるようにしています。ここまでが、二つ目です。

◆受講生からのクレームや意見について

●話し方について

で、三つ目ですが、よく受講生に怒られるのですが、もっとゆっくり話して下さいって、これは今も喋っていて早いと思う位なので、申し訳ありません。

これは、私、一番悩んでいます。どうしたらゆっくりになるかなあと思って、本当に話すのですが、さきほど司会者もおっしゃっていたように話し方の癖というのはなかなか難しいですね。

なので、繰り返しをします。確認をします。それと、出来るだけ学生の様子を見て、あーちょっとまだ書いているからあんまりまだ喋っちゃダメかなって事を、頑張ってプレーキかけるようにしますが、緊張したりすると、いつもすごく早くなってしまふ、これは本当にすごい悩みです。

●板書について

あと、それから私が黒板のパワーユーザーである事に関して書いてある、言ってくるのがこういうことです。黒板を消すのが早い、もっと書いておけ、黒板の字が小さくて見えにくい、これは大分改善された事もあるのですが、相変わらず言ってくる。

あと、もっと濃く書け、特に色チョーク、あと板書書き過ぎだ、っていうのは言われます。これは確かに私も書き過ぎなのかなーとか、そういうことは思うのですが、でも全部印刷して渡したら、あの人たちがただボーっとしているだけで、3講目のお昼終わったあとの時間なので、睡魔にとられるだろうな、っていう風にも思うし、やっぱりこう、だからここも悩んでいるところではあります。

●私語の注意

あとそれから私語の注意ですね。

司会者が授業に来てくださった時は、実に静かだったのですよ。今日の授業はもう少しうるさかったです。私は先ほど専門学校で授業をしていた経験があるって事も言いましたけれども、もうなんていうかジャングルの中で授業しているみたいだったのです。だからこう、ウーンっていう感じの、森の中みたいな響きがウーンと常に聞こえてくるような環境で、そういう中で、うるさいっていうよりは、授業で私のほうを向かせてやりたいっていう願いがあります。まだ青かったのも、強かったものでも、注意しないで出来るだけ面白い教材、面白い教材で言うことを考えたなっていうところがあるのです。なので、札学の学生は天使みたいな、ジャングルと比べると天使みたいなものなので、私は殆ど気にならないのですよ。

ところが、学生は話している、自分は一生懸命ノートをとっている中で、ボソボソとでも話されるとやっぱりすごく気になると。だけれど、そういうのは例えば私が気にならないからって注意しないと、なんで注意してくれないんだってなるし、逆に前の方で、私の方にすごく、こう聞こえてくるのを、ちょっとそこうるさいんだけど、と言うと、なんであっちを注意しないで、前のほうでちょっとだけ喋った人を注意するんですかって言われるのですが、これはどうしたらいいのでしょうか。

これは私の感覚と学生の感覚がずいぶん、特に大きい教室では違うので、一体全体どうしたらいいのかと。しかも注意すると、皆さんもそうだと思いますが、思考が分断されるじゃないですか。一生懸命喋っているのに、こっちは、考えて。それも嫌なのです。でもやっぱり静かな環境っていうのは作んなきゃいけないですよ。一体どうしたらいいんだらうって、ここも結構悩みます。

●レジュメ

あとそれからレジュメですね。先ほど言いましたレジュメの事なのですが、レジュメは割と賛否両論なところがあり、片側があいているのが大変いいといってくる学生と、こんなムダじゃないか、大きすぎるって言う学生が毎年必ずいます。

若干賛成者が多いので、これでいこうかなって思っていますが、自分でノート作れる学生にとってはちょっと邪魔臭いレジュメなのかな、って思います。ただ、ノー

トを作るのがなかなか難しいとか、先ほど言ったように、レジュメの中身と板書を上手く関連づける事が難しい学生にとっては、これはこれで利点があるのではないかなという風に思っています。

それから、同じくレジュメに関して、これは授業の進め方ともかかわって、その日の分を配布して、前の週や翌週に続かない、つまり一回読みきりの講義にしてくれていう、意見があります。司会者が来て下さった時の授業も前の週からの引き続きでレジュメはこうです、って言うような事を言って、今日も、その続きである今日も、これは来週も続くからまた持ってきてね、って言うような感じだったのですが、これは、一回読みきりの方がやっぱりいいんでしょうかね。それは学生の我儘ですが、講義ってやっぱりこう、上手く進まないっていうか、思い通りには上手く進まないこともあるという事もあるので、これも悩むところですよ。

●好評な意見

次に、学生が褒めてくれる事、話し方がはっきりしていて聞きやすい、と言う様な事なのですが、これも良くわかんないのですよね。それから、板書の字が読みやすい、先ほど司会者が言って下さったので、ああ、そうなのか、と少し自信が持てましたが、これも、司会者達が来て下さったにもかかわらず、漢字がわからず、間違った漢字を書いてしまって、学生がリアクションペーパーで、先生正しくはこうです、って指摘してくれて、というような恥をさらしているの、そういう事があるので、申し訳ないなという風に思います。

あと、例を褒めてくれるのはまあちょっと嬉しいかなという風に思いますが、得てして例ばかりを覚えているんですよね。本質的に何を覚えていて欲しかったと言う様な事をなかなか覚えていてくれないな、というのもあるのが、ちょっと悩みですが、まあ実際私も学生の時、先生が話した面白い例は覚えているよ、というようなものだよな、と思っていますが、それもまあ仕方がないのかな、って思います。

●リアクションペーパーからの反省

それからリアクションペーパーですが、リアクションペーパーは先ほど言いました様に毎回書かせているのですが、これに関して、文書でQ&Aという形にして毎回配布するようにしています。

これは、私にとっては、先ほど書かせる練習も入っているんだという風に言いましたけれど、講義の内容を学生がどう捉えたかということを理解するには本当に助かっています。つまり、何人の学生が、ここ分からない、分からないって言ってきたのは、自分でもやっぱり説明が上手くいってなかったな、という風に思うところであったり、あとそれから、ちょっと曖昧な言い方しちゃったな、って言うところをうちの学生は意識しているのかしていないのかわかりませんが、ズバツと質問してくれたりするんです。

個々の部分について、ちょっと良く分からなかった、ああ、それはやっぱり私の教え方の説明の仕方がまずかったのだと思う事で、それは、いわゆる教育評価って言うような事を皆さんお聞きになったことがあると思うのですが、授業の後での学習者の反応って言うのは、やっぱり教員が参考にして次の授業をより良くする為に使えるものであるという風に考えることが出来ると思うのです。どういう回答がきたか、という事によって、これはやはり学生がこ

んな風に誤解してしまったのだとか、これは大変よく分かってくれたんだとか、これは面白がってくれたんだなという情報がのすごく沢山あるな、という風に思っています。

二、三年位前になるのですが、リアクションペーパー方式への回答方式にするか、もっと学生個別にした方がいいのではないかって思った時期があったんですね。その時にコミュニケーションカードという風に名付けまして、一人一人にカード方式にして、毎回学生が書いたものに、私が赤ペンでリアクション、返事を書いてやって、それを学生との往復書簡じゃないですが、往復するみたいな事を、200人位の授業でやった事もあります。

ただ、それはあまり効果を得る事が出来なかった。つまり、頑張って手を入れてやった割には、書ける学生はどんどん書けるようになっていくのですが、書けない学生にも動機づけになっていくかな、って思っていたのですが、惨憺たる結果になりました。しかも試験の成績にほとんど反映されなかったんですね。

だからちょっとそれは頑張りが過ぎたかなと思ひまして、だったらリアクションペーパーでお返しするという程度でいいのかなという風に思って、その方式は辞めたという経過があります。ただ学生はやっぱりこうまで取り上げられると非常に喜ぶので、学生が何を考えているかっていうのをこっちがちゃんと受け止めているのだからという事を示す事にはなっているのかなという風には思います。ただ、残念ながら試験の成績に反映されるかどうかと言うのは微妙なので、ちょっとそこは今後の課題だな、という風に思っています。先ほど時間外学習のところ、非常に引っかけたところですが、確かに私、何もしてなかったの、少しやらせてみようかな、と思ひました。

【質疑応答】

<司会者>

どうもありがとうございます。

今、プレゼンを聞いただけでもやはり、わかり易い授業をされているって言う事が本当によくわかったような気がしますが、それでは、まだ時間20分ほどありますので、私が前半で説明した授業評価アンケートや舛田先生の教育実践に対する質問を頂ければと思います。

<質問A リアクションペーパーと試験の成績の関係について>

実際のところ、リアクションペーパーのところの話で、舛田先生が、試験の成績とリアクションペーパーの取組みの関連が不明だという風におっしゃっていたと思うのですが、私もリアクションペーパーをずっと続けていまして、確かに試験の成績と連動しない部分がかなりあるのですが、ただ、私は、それは逆にいい事だと思って、学生を多様に評価する素材として考えれば積極的な位置づけになるかな、と思います。ただ試験の成績が悪くてもリアクションペーパーのところできっちり書いてきたりとか、そのところで知恵を絞っているな、という評価をする形は、それなりに意味があると考えています。

<舛田先生>

それは先生おっしゃるとおりだと思っています。一応リアクションペーパーも、どれだけ頑張って書いたかって言

う事は平常点っていう事でカウントするようにはしていません。試験の成績とどうして連動しないのかなっていうのを私なりに考えてみますと、やっぱりリアクションペーパーは、学生が自分の土俵に引っ張りこめるって言うのですか、自分の書きたいことを書くんだったら結構書けるんだと思うのではないかと。だけれど、試験の場合、こちらに要求されている事に沿って書かなきゃならないって言うのが、多分苦手で、そこが上手くいかない学生がいるのかな、なんていう風に思っています。

ただ、先生がおっしゃるように、多様な評価って言う事からすると、そういう自由に色々感想を申し述べられるというのも大変貴重な事だと思うので、評価には取り入れるようにはしています。ありがとうございます。

<司会者>

今回、先ほど100人以上の履修者がいる授業で、評価の高かった先生は、各学部で一人二人いるという話をしましたけれども、詳しくは見ていないのですが、リアクションペーパーを積極的に採用されている先生が、割と100人以上の授業での評価が高いという傾向があるのではないかと印象を持っています。ただこれは、きちんとした分析した訳ではないので、やっぱりこういうリアクションペーパーで学生の色々な反応をひろって、次の授業に反映させるとか、そういった工夫をされている先生はそれなりに評価が高いということが言えますね。

<質問B 定期試験の学生の受講態度>

定期試験の試験監督で補助監督をやりますよね。毎回経験するのですが、人文系の補助監督の場合に感じる事なんですが、学生は必ず時間前に着席しているんですよ。一人二人ね、出入りする事はあるけれど、それも、一旦座っていて、なんかの用事で戻ってくるっていう程度で、非常に試験がやり易い、終わったあと清々しいですね。非常に幸せな気分です。ところが、旧商学部とか、今も商学部ありますが、その試験監督するとですね、もうズルズラダラダラと、チャイムが鳴っても遅れて入ってくる訳ですよ。試験問題も配れないような状態。そういう違いの学生を、どうやっていったらいいのかなって、思うのです。

僕はどちらかというと厳しくしているのです。試験は時間遅れたらもう入れないから、ということまで言ったりするんですね。さっき先生はそれでも遅れてきたりとか、あるいは私語があったりとかで、苦勞もされていると話されていたのですが。僕は質の違う学生って言うっていいのかな、同じように対応出来るのかな、どう考えたらいいでしょうね。

<質問C 授業時の着席位置>

それに関係するんですが、先ほどの映像で、かなり学生が前から後ろの方へ均等に座っていたじゃないですか。あれは座席指定なくて、ああいう風に、割とばらけて着席しているのですか。うちだと後ろにワッとかたまってしまうって、前だけ空いているっていう感じなので、なんか随分均等に座っているなって思って、あれはどういう風に指示しているんですか？

<舛田先生>

いえ、なにもしていません。前の方、少ないですよ。ポツンポツンと前に座っている学生勿論いますが、

<司会者>

今回、実は舛田先生に話を持っていった時に、舛田先生は非常に評価が高かったんですよっていう話をした時に、

舛田先生が、第一声に言われたのは、これは学生がいいからっていう話をされました。つまり、社会心理学の履修学生は臨床か、

<舛田先生>

臨床、人間、子癆

<司会者>

これらの学生がほとんど。

<舛田先生>

あとは、社会情報から結構来ている、あと商学部とかもポツポツと。

<司会者>

第一声がそれだったんですね。ですから、評価が高いのは私の力ではなくて、いい学生が集まっているっていうことが原因じゃないですかっていうことです。ある意味、質問者Bの方がおっしゃられるように、私も商学部とか、試験監督をやると、チャイムがなってもまだ入室してくるし、二回日のチャイムギリギリで入ってくる者もいる。そういう学生をいっぱい目にしているとですね、これは学生の違いによって評価が違うのだという風にも考えられるのですが、先ほど私が最初に見せた、例えば経営学部でも非常勤の先生でも評価が高かったりする、というのもあるので、必ずしも、学生だけとは限らないのかなと思います。教員の姿勢というか、そういった部分も反映しているのかな、とは思いますが。これは多分、経営学部や経済学部の先生方、同じような悩みを持っておられるのでは、という感じもするんですが、先生どうですか？

<質問D 授業の流れを作る必要性>

舛田先生の話、参考になりました。

こういう流れを作るっていうの、私いつも考えていて、それは同じだな、と。作り方なのですが、レジュメを提示して、それで最後にリアクションペーパーでしめると、それはいいかな、って思う。

私は教材提示機を利用しているのだけれども、何故かという、板書すると、後ろを向かざるを得ないので、とたんに学生がガーッと話し出すので、教材提示機だといつも対峙できますので。ただ、本当に早口になったり、定義の仕方、スピードがあがっていくし、何故かと言うと、ノルマを自分が達成しようと、どうしてもあわててしまう。その時最近考えるのは、出来るだけ学生の顔を見て、遅い人に合わせるっていうかね、努力はしている。

パワーポイントはやめたほうがいい、というのは私も実感しているんですがね。暗くして眠ってください、というのをあえて、学生に暗示しているところがあるので、出来れば明るくして、目を見て、そして話す時には、私語をしている特定の学生に対して話を進めるようにしていたのですが、私、特定の学生に対して、君、うるさいよ、名前言って、Aさんって名前言うよ、名前言って叱るのはまずいんじゃないですか、先生、って、そういうことがありました。私、注意の仕方まで注意された、非常に珍しい経験を持っています。

授業の流れっていうのは大事だと思いますね。私も早口で、講義早くして、学生に毎回書かれてきますが、黒板に書くときだけ書かせている、書いて消すと、もう一度再現してくれって言われた、学生にね、あそこ何て書いてあるのですかって言われた。それ言われても困ると、そうするとパワーポイントだったら、あ、こうですねって見せられるので、便利かなって思っているんですが、そういう理由

があつてただ、先生の方は板書でやっておられて、ちょっと消すのが早いとか言う事を言われていたんで、もしかして、組み合わせると面白いかな、って感じたので、大変参考になりました。ありがとうございました。

<司会者>

私は他大学のFD研究会に参加した時に、マイクの使い方、ハンディマイクは使うなって言われました。やっぱりピンマイクで話したほうが、一定の音量で必ず伝わると。ハンディマイクは、腕の動きによって学生がのすごく聞きにくくなる、と言う事を言われましたが、私は未だにハンディマイクを離せません。

<舛田先生>

でも私はピンマイク使っていたらハンディマイクにしてくれて言われたよ。やっぱり付ける所にもよる、着る服にもよるのではないのでしょうか。

<司会者>

まあそうですね。私もピンマイクを付けると、どうも声を通らないような感じがして、なんか使いにくいのと、慣れみたいところが多分あると思います。

あと、板書の良さって言うのはもう一つあると思います。いろんな大学の先生と話していると、パワーポイントは、一つのスライドに殆どの内容が提示されてしまっていて、そうすると提示スピードが学生の書くスピードと明らかに差がありすぎるのが問題だと言われたことがあります。やっぱり、早すぎて、学生が感じる隔絶間とか、疎外感とか、もう付いていけないという部分もあるのではないかと。やっぱり板書の良さって言うのは残す事にあるんだと、聞いたことがあります。

<質問D レジュメについて>

1ページに各行数を48行から60行にあげたんです。その前は35行だったのだけれど、字が詰まりますから、1ページに書く量、48にしても多いので、60位にして三行位にして、それでやってはいたのですがね。

<質問E その他>

あと、文字をもっと濃く書いてくれ、とかね。それは、黒板とチョークが悪いんですよ。チョークも質の悪い、固まっていないチョークだからね、濃く書けないんですよ。

<質問C>

でも舛田先生の板書の字は濃かったよね、確か。

<質問E>

情報大学はすごいですよ。黒板は書きやすいし、チョークの密度が濃いて言うかね、書くとき綺麗に書ける。うちの駄目ですよ、今のチョークはね、ガサガサしている。書いていると。

<質問C>

あんな風にならないよね。

<司会者>

教務事務部長さん、どうですか？

<教務事務部長>

うちのチョークは身体にいいチョークに変えたんですよ。

<質問E>

身体にいいんじゃないかと、安いチョークに変えたんだよ。

<質問C>

そうかねー

<質問D>

確かにね

<司会者>

ホワイトボードは本当に使いにくいですよ。ホワイトボードは本当に板書するには不都合とか、あれぐらい使いにくいのは無いと思う。授業評価が悪い要因は、もしかしたら、そういうところもあるかも知れない。

<質問E>

僕はパワーポイント使うからね、前のほうは暗くするんだけれど、黒板のど真ん中とかね、あんなと場所にスクリーンを置くパワーポイントなんて、いまは無い。普通は、両サイドですよ。そうしたら、提示機もパワーポイントも両方使える訳だし、黒板にも書ける訳だし、真ん中に電気がつくようにするとか、あれはつけた当初は珍しいからいいのかも知れないけれど、元々どうしてあんなと真ん中につけたんでしょうかね。

<司会者>

他に何か、ありますでしょうか？

<質問F>

採用されて一年目の人間ですが、ご意見伺ってですね、舛田先生のリアクションペーパーの件で、私も後期科目でやっています。そこで毎週リアクションペーパーっていうのを書かせて、そこでは、学生に一回目の授業で言ったのは、今から言う三つのことのどれか一つは必ずかいてくれ、という風に言っています。一つは質問、もう一つは感想、どっちも無い場合は今日の授業のまとめを書くと僕は言っています。そうしないと、リアクションペーパー、折角のリアクションペーパーなのに何も書かないで名前だけ書いて出してくる学生が去年は10名程度おりました。こちらとしても非常に寂しいので、何かかいてくれ、その時にまとめでもいいから、まとめちゃうことで、学生にその授業の内容の定着を図ればいいのか、って思って試はっております。いかがでしょうか。

それから今座席の話が出てきたのですが、僕はB201という160名程度入る教室を今年使っているのですが、今年講義をやって四年目になるのですが、やはり一番後ろから埋まってきます。僕の授業も、なので、後ろ三列は座るな、と僕は言います。今年は、試験的に。

<質問E>

それはどうです？

<質問F>

後ろ三列は座るなと、指示すると素直に利いてくれます。理由を言えば問題ありません。理由も非常に些細なものですが、あんまり後ろから固まられると僕が寂しいから前へ来い、と言う風に言うと聞いてくれます。但し、遅刻して遅れて入ってきた人が、毎回2~3名いるのですが、あえて注意はしないのですが、後ろ三列座るな、って言う一番後ろに固まらなくて済むんですがそういう場合は必ず後ろから四列目に埋まって行きます。一応指示すれば納得しているかどうかはわからないのですが、聞いてくれるかな、っていうのはあるのですが、以上です。

<司会者>

舛田先生、リアクションペーパーの内容です。今、先生が今日の感想か、質問か、まとめをかくっていう、ある程度パターン決めて書かせるって言う事されているようですが、

先生はとにかく何でもいいっていう方針ですか。

<舛田先生>

前期の社会心理学AとBっていうのは受講者がだいたいかぶっているもんですから、最初にBからとった人もいると思うのですが、そういう学生はわずかなので、まず前期の社会心理学Aの始まったときには何を、こういうことを書きなさいっていうのを、最初の何回かは板書して、学籍番号と氏名とそれからこういう事っていうのを一応指示します。で、このうちの必ず一つは書いて出してねっていうような事の中に、質問、意見、感想、要望っていうようなことと、ちょっと書きづらいかな、と最初の方は思ったりもするので、今日新しくどんな事に気付いたりわかったりしたか、みたいな事は一応例にあげてみたりする事もあります。

ただちょっと最近それをあんまりやっていなかったのでもしかなると、ただ何となく、になっちゃったかもしれない、ちょっとそこは今何って、ああそうだったと思っ出したので、少し気を付けたいと思います。ありがとうございます。

<司会者 私語の対応>

さっきの舛田先生の話の中で、私語の注意っていうことがありましたよね。

あれは実は私も同じ様に感じていて、自分で授業を進行していると、それを止めたくないという思いがあって、注意をしないで済ましてしまうという場合があります。ただ注意をしないことが学生にとっては非常に気になる部分で、先ほど舛田先生が言われたように、私語を自分の近くでされると非常に嫌だとかになるわけです。以前、全学教務の取組みで、〇先生が、一昨年ですか、ビデオを撮って頂くのに協力して頂いて、その後のご自身の感想で初めて気が付いた事があるとおっしゃっていて、それは何かっていうと、後ろの方にビデオカメラを置いて撮っていると、後ろのほうの席からの私語がかなりビデオに入っていると、だけれど、壇上にいる自分には全然その私語が聞こえていない、ということなんです。大教室になればなるほど、じつはその、距離感といいますか、全体の状況がわかっていないっていう部分があるのではないかっていうことです。

その辺は、舛田先生は出切るだけ流れを止めないように、という事をおっしゃられたので、あの授業を見る限りではそんなに問題は無いのかなと、思うのですが、他の先生でどうでしょうか？

<質問E 私語の対応>

いや、まったく同じですよ。だから、僕が思うにね、ちゃんと話をしている、回りの私語を聞きたくなくて、ちゃんと聴きたい人は前に来い、と言った方が僕はいいと思う。話す人だけは後ろに、後ろで話していると、教壇にいると全く気が付かない。話している素振りもわからない。だから僕は分けちゃっていいと思う。聞きたくないのは後ろでやってればいい訳だから、

<質問F 私語の対応>

ご紹介いただいた通りですが、一教室に150人くらいは実際に入っている様な授業だったので、ちょっと後ろのほうざわついていてもわからないのですね。それからちょっと気を付けるようにしました。

以前から僕は私語に関しては、私語はいけないよって予め言う事にしています。

理由としては、こちらから伝達する情報が、ノイズによって妨げられるから私語は駄目なんだ、とまず原則を言っ

ておいて、但し、許される場合がある。こういう大人数の授業の時は、教師が一方的に話しているの、聞き逃しとか教師のミスとかがあり得るんだ、それに関しては、授業に関しては、隣の人と今のおかしいんじゃないか？とか、馬鹿言っていない？というような位は許すよ、だからすこしザワワとしていても即座に注意はしない。但し、延々と私語をやっている場合には、しばし僕は講義を中断します。それに気が付いてください。それでもやめない場合は出てって貰いますっていう風にしていきます。だから、私語があるなって聞いたら僕は授業の進行はそのままにして、喋るのははやめるんですよ。

で、5秒位すると気が付く子は気が付いて、喋っている子達が浮かび上がってくる状態になるので、そこで進行をまとめてから、ちょっとそこやめてくれるとか、いいですかっていう風にして始める、という風にしていきます。

で、このやり方にメリットがあるのは、そこうるさいぞっていう形であからさまに怒る姿勢で、あるいは口調で言うと、叱られた子じゃない子が、口調でもって不快感をあらわにするって言う例を何回か僕は昔から聞いているので、私語のときに怒る口調じゃなくて、そこいいですか、とか授業の内容ですか、とか、そういう風に進む事で私語を抑えるということは、かなりやっていますし、割と効果的だという風に学生からは聞いています。

<司会者>

どうでしょうか、他に何か？

<質問E リアクションペーパーの内容>

先ほどのリアクションペーパーの所ですが、よく講演会なんかみてみると、最後必ずその、いわゆる感想文かなんか出させるでしょ。後ろでいつも座ってみていると、学生は初めに配られたレジュメとかで、先に書きちゃうのですよ。そしてあたかも終わったら聞いていない。そして好き勝手な事やっている。中には聞いている人もいるけれども、だから、授業と同じことが僕は大人数だと起きている可能性があると思う。

だから、それはどうしたらいいのか、私語も一緒だと思うよ。

<質問F>

それはおっしゃるとおりで、そういう事態が僕もおきるな、と僕も思っています。

僕は舛田先生よりも多分、資料の数が多いですね。A4でいったら、多い時は6ページ分位になってしまいますので、授業内容は基本的にはそれを見ればわかる、という形にはなっています。

それは実は後でポータルに掲載して欠席した人のメリットを考えて作っている、という事と、あと聴覚障害学生に対してやっぱりそれなりにきちんとした情報保証をしようという意図が少しでもあるのですが、そうすると、配られたら、今日はこれをやるというのがわかるのでリアクションペーパー書けちゃうのですが、予め学生には僕の場合は携帯で全部リアクションペーパー出して貰っていますので、全員分を無記名ですが次の授業の時に返しています。そうすると、資料だけみて書いたな、というのがあからさまに学生の目にも明らかかなのですね。

で、何番と何番と何番のペーパーは、これは資料だけでも書けるよね、と言って、こういうのは僕は0点にするから、リアクションペーパーを採点式の対象にしていますので、これは0点にするから、君達がやらなきゃいけない事

は、O先生に対して、俺は授業を聞いているんだぞ、ていう風な中身のリアクションを書きなよ、ていう風に言っていますね。

それをやったらそれなりのものが返ってくる。

あと、携帯でやりますから、デジタルデータになるので、文字数カウントとか非常に楽ですから、200字以上は書きなさい、という風にしてやっています。一応200字を基準にして、それ以上書いていれば一応フルな点つけます。それ以下だと減点しますよ、という風にはしていますので、それなりに返ってくるかな、で、書く動機付けにもなってくるかな、とも思います。

<司会者>

今、O先生が紹介された仕組みはですね、電算機センターの協力のもとに、今O先生に試行的に試して頂いていますので、授業の中で携帯を入れる、というところに抵抗がないのであれば、今後、ある意味他の先生方にも使って頂ける可能性が出てきますので、是非、O先生、去年一度発表して頂いたのですが、今年度もまたもう一回FD研究会みたいなのをやってですね、少しみんなで情報共有できればいいのかな、と思っております。

では、ちょうど時間になりましたので、第一回目のFD研究会としては、まあ、そこそこ面白い方向性が見えたかな、という気がしますので、今日のご協力頂いた舛田先生にもう一度拍手をもって、感謝申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。それではこれで終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

1. 全学 FD 活動の記録

2) 第2回FD研究会

「ICT を活用した授業改善に関するフォーラムの開催」

(2010 年 2 月 19 日)

2009年度 FD活動記録

組 織	FDセンター・電子計算機センター	取組番号	2/2
FD活動の名称	ICTを活用した授業改善とキャリア形成支援		
開催日時	2010年2月19日(金)		
開催場所	B102教室		
参加人数	24名		
添付資料の有無	有 無		
概 要	<p>酪農学園大学の遠藤大二教授から、ICTを活用した学生支援のユニークな取組について報告があった。同大学では、学生が就職活動の際に自分の強みをしっかりとアピールすることができるよう、ウェブ上に自らの成長や活動の履歴を残し将来について真剣に考えることを促すシステムを開発した。</p> <p>社会情報学部の大國教授は、学生が携帯電話を使って発信する意見や質問を取りまとめ、これにコメントを返す授業を実践している。大人数講義であっても、携帯電話を使うことで効率的に双方向型の授業を実現している。また、情報処理課の三川氏から、携帯電話の発言を瞬時にスクリーンに投影するシステムの試作品について紹介があった。</p> <p>社会情報学部の森田ゼミ生、三浦雄哉君(4年)からは授業でアンケートを求めると瞬時にその回答がモニターに表示される「リアルタイムアンケート集計システム」について報告があった。また同じく森田ゼミ生の原正樹君(4年)からは、学生の理解度を適正に評価する自動出題システムである「プログラミング学習用 e-learning システム」について報告があった。いずれも実際の授業で試用し、教育効果が実証されたシステムである。</p>		
成 果	<p>参加者は学生ひとり一人の学びの固有性や学びの段階に応じて学習支援が必要であることについて理解を深めた。またそのための手段として ICT を効果的に利用できることについて理解を深めることができた。</p> <p>学生の報告については、参加した教職員から「学生の視点で実践的方法を検討している点が素晴らしい」、「広く応用の可能性があると感じた」といった感想が寄せられた。</p>		

※ 取り組みが複数ある場合は「取組番号」に1/1、1/2のように記入してください。

※ 提出期日 2010年5月20日(金)

※ 提出先 教務課長(内線3210)

2009年度FDフォーラムの開催

概要は、本学ホームページの「新着お知らせ」にて広報しています（次ページ）。

教職員と学生、あわせて24名の参加がありました。アンケート結果は以下のとおりで、発表内容が「参考になった」と回答した割合は、全体平均で81.8%となっています。運営に関する貴重な意見も寄せられました。なお、開催後、「講義中の自由な発言を可能にするシステム」を2010年度の講義で試用してみたいという申し出が2名の教員から寄せられています。

アンケート結果(回答数:11)

キャリア形成を支援するeポートフォリオの構築(酪農学園大学 獣医学部 教授 遠藤 大二氏)	
参考になった:81.8%	<input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習履歴をシステムティックに蓄積し、自ら表現する(学び、整理し、考え、表現し、理解してもらう)プロセスが可能になるのであろうと思う。非常に興味深い。 ・ 自分のデータを集約する場として e-ポートフォリオが積極的に活用できると思いました。 ・ キャリア形成の本質をついている。学生にこのコンセプトを理解させることがプロジェクト成功の重要な鍵になると考える。 	
携帯電話を活用した双方向型授業の実践(社会情報学部 大國 充彦氏)	
参考になった:90.9%	<input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生を授業に集中させ、また翌週相互に確認指せるという取り組みは学生の理解力向上に大きく寄与できるように思えた。 ・ 講義レスポンスと追加資料の作り方が参考になった。良いコメントに対する対応も参考になった。 ・ 授業に出席せず、パスワードと資料だけでやり過ごそうとする学生の行動様式が明らかになり、それに対する対応を検討されているという事例は興味深かった。 	
講義中の自由な発言を可能にするシステムのプロトタイプ紹介(情報処理課 三川 豊章氏)	
参考になった:63.6%	<input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 投稿者の認証(本人保証)をどうするか? ・ 教員からのコメント表示も出来そうなので面白いと思う。 ・ 講義中での学生の発言の受け止め方の参考になった。 ・ 何をねらいにしているのか分からない。ただのチャット? ・ 「サイレントな議論」という発想はとてもおもしろい。 	
リアルタイムアンケート集計システムの開発とその運用(三浦 雄哉氏)	
参考になった:90.9%	<input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生の視点で学生の理解度向上に寄与できる方式を検討している点がすばらしいと感じた。 ・ 適宜のフィードバックが大きな学習成果を引き出すことを示した、優れた研究だと感心した。 	
プログラミング学習用 e-learning システムの開発とその運用(原 正樹氏)	
参考になった:81.8%	<input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生目線が十分生かされており、また着目点も大変興味深いと思う。 ・ 概念的な理解に関する学習課題についても応用可能性があると感じた。 	
双方向対話型教育支援システム (LENON for Mutual Understanding)	
参考になった:81.8%	<input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 小型端末を使つての「どこでも出来る」と言う点がとても面白いと思いました。自分の参考にもなります。 ・ シンプル、イージー。良いと思うんだけど、あとはコストですね。 ・ 使っていて楽しくなります。 	
今回のFDフォーラム全体について	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 色々な考えに触れ、話を聞くことは新たな視点で教育を考えることに極めて有効と思うのですが、教員の参加者が少なく大変残念でした。「学生が分かっていない」ことを分かっていないんでしょね。 ・ スケジュールがきつい様に感ずる(内容は良かった)。実りあるフォーラムにするには質問、議論の時間を確保したプログラムでやるべきだと思う。 ・ 内容は良かったですがもう少し時間を取ってやった方がよかった気がします。とてもおもしろいテーマが多かったです。 ・ 教員の参加を呼びかけるべき。 	

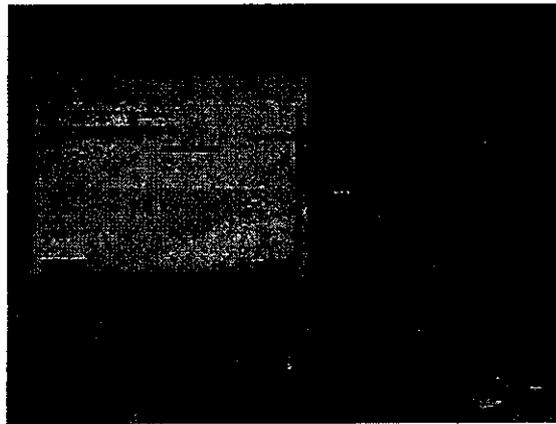
参考になった どちらでもない 参考にならなかった

情報コミュニケーション技術(ICT)を活用した授業改善について考える

学生の学習意欲を刺激し、授業の理解度を高めるため、コンピュータやインターネットなどの情報コミュニケーション技術(ICT)の利用が有効とされています。その可能性と課題を考えるため、教職員を対象とした学内フォーラムを開催しました(2010年2月19日)。

他大学の事例に学ぶ

酪農学園大学の遠藤大二教授から、ICTを活用した学生支援のユニークな取組について報告がありました。
同大学では、学生が就職活動の際に自分の強みをしっかりとアピールすることができるよう、ウェブ上に自らの成長や活動の履歴を残し将来について真剣に考えることを促すシステムを開発しました。



本学における実践

社会情報学部の大國教授は、学生が携帯電話を使って発信する意見や質問を取りまとめ、これにコメントを返す授業を実践しています。大人教講義であっても、携帯電話を使うことで効率的に双方向型の授業を実現しています。また、情報処理課の三川氏から、携帯電話の発言を瞬時にスクリーンに投影するシステムの試作品について紹介がありました。

学生の研究成果報告

社会情報学部の森田ゼミ生、三浦雄哉君(4年)からは授業でアンケートを求めると瞬時にその回答がモニターに表示される「リアルタイムアンケート集計システム」について報告がありました。また同じく森田ゼミ生の原正樹君(4年)からは、学生の理解度を適正に評価する自動出題システムである「プログラミング学習用 e-learning システム」について報告がありました。いずれも実際の授業で試用し、教育効果が実証されたシステムです。参加した教職員からは「学生の視点で実践的方法を検討している点が素晴らしい」、「広く応用の可能性があると感じた」といった感想が寄せられました。彼らは森田ゼミで「授業改善のための ICT システムの開発と運用」をテーマに研究を行なってきました。

参加者は学生ひとり一人の学びの固有性やその段階に応じて学習を支援する ICT の効果と更なる可能性について、また、その運用にあたって解決すべき課題についても理解を深めることができました。

主催: 札幌学院大学 FD センター/札幌学院大学電子計算機センター
協力: 酪農学園大学「大学教育・学生支援推進事業」学生支援推進プログラ

ICTを活用した授業改善とキャリア形成支援

- ▶▶ 開催日 2010年2月19日(金) 「ポートフォリオ」や「携帯電話」といったツールの実践的な活用事例に学びながら、学生の主体的な学びやキャリア形成を支援するための ICT(情報コミュニケーション技術)の意義について理解を深め、その導入と実践にあたって解決すべき課題を認識することを目的とします。
- ▶▶ 時間 13:00~15:30
- ▶▶ 会場 B102教室

テーマに関心のある教職員の方ならどなたでもご参加いただけます。事前の申し込みは不要です。

FDセンター長、電子計算機センター長

プログラム

他大学の事例に学ぶ

キャリア形成を支援するeポートフォリオの構築

酪農学園大学 獣医学部 教授 遠藤 大二氏

遠藤先生は、平成21年度「大学教育・学生支援推進事業」学生支援推進プログラムに採択された「eポートフォリオを活用した食・農型就職支援の展開」の推進者です。eポートフォリオシステム「Mahara(マハラ)」を利用し、キャリア形成支援システムを構築されています。

本学における実践事例

携帯電話を活用した双方向型授業の実践

社会情報学部 大國 充彦氏

専用のeラーニングシステムを使わず、学生の携帯電話やパソコンから、電子メールを利用して「質問書」を集約し、これを学生にフィードバックすることによって教育効果を高める実践です。

情報処理課 三川 豊章氏

授業中に学生が携帯電話から自由に発言を行い、これが即時にプロジェクトに表示されることによって、授業への参加意欲を高めることを目的としたシステムのプロトタイプのご紹介です。

学生の研究成果報告

授業改善のためのICTシステムの開発とその運用

社会情報学部森田ゼミから2つの卒業研究の成果を発表していただきます

1. リアルタイムアンケート集計システムの開発とその運用 (三浦 雄哉氏)

講義中に教員が提示した設問について、該当する選択肢を選択させ、その集計結果を即時表示するというシステムです。現状に合わせて、一つのスクリーン、一つの教員用PCを用いて、ワンタッチで回答開始と終了そして結果表示ができる操作性を目指しています。具体的な用途としては、適当な問題を出して正解率から理解度を把握する、あるいは、何らかのテーマに関する学生の意見分布をその場で集約する、といったものを想定しています。いずれも、学生の理解度や関心の所在といった情報を把握し、それを講義展開に活用することを意図しています。

2. プログラミング学習用 e-learning システムの開発とその運用 (原 正樹氏)

プログラミング学習の理解度を確認するテストを、Web上で行うシステムです。自動採点や学習履歴の保持などは、センターが用意しているTIESでも実現可能と思いますが、同じテーマの問題を違った角度から問う類似問題をランダムに出題させる、という機能の実現を目指しているので、自作のプログラミングを試みました。毎回アクセスする度に、違った(しかし類似した)問題が出題されることで、繰り返す毎に理解度が向上する、という学習環境を実現できないか、という点をねらいに置いています。

授業改善ツールの紹介

双方向対話型教育支援システム (LENON for Mutual Understanding)

IC化された学生証と無線型のICリーダ端末を用意することで、教育成果をリアルタイムにデジタル化し、教育効果を高めるツールの製品紹介です。

第5回(2008年)e-Learning大賞奨励賞受賞(株式会社寺田電機製作所)

主催:札幌学院大学FDセンター/札幌学院大学電子計算機センター

協力:酪農学園大学「大学教育・学生支援推進事業」学生支援推進プログラム

(問合せ先:電子計算機センター)

キャリア形成を支援するeポートフォリオの構築

札幌学院大学 2009年度FDフォーラム

協力 酪農学園大学「大学教育・学生支援推進事業」学生支援推進プログラム

2010年2月19日 酪農学園大学 遠藤大二

講演の概要

1. 酪農学園大学 学生支援推進プログラムの概要
 2. 良い就職は、学生と企業のマッチング
 3. 学生が自分の能力を示すためのポートフォリオ
 4. 酪農学園大学 学生支援推進プログラムが目指す就職活動
-
1. 酪農学園大学 学生支援推進プログラムの概要
 - 1) 大学時代に学んだことこそ、就活での最大のセールスポイントであるというコンセプトで、大学での「学び」を集約する場を提供する。
 - 2) 繰り返し履歴書を作る訓練を低学年から始める。→履歴書は就活ツールよりも自分誌だという発想
 - ①. 転職時の職務履歴書がヒント
 - ②. 転職が当たり前の地域・業界では、良い履歴書を作るために働くという考え方も
 - ③. 日本人にとって最も辛いのは、自分をほめること
 - 3) 自分を見るためには、自分の足跡を繰り返し見ること。
 - ①. 成績
 - ②. 資格
 - ③. 体験
 - ④. 友達とのコミュニケーション
- 結構学べて人脈を作れる人材かも？
2. 良い就職は、学生と企業のマッチング
 - 1) 適職とは何か
 - ①. 企業側からの視点
 - a 企業内で求められている能力人材を採用できる
 - b 給与水準が企業にとっての適切な水準に抑えられる
 - ②. 学生側の視点
 - a 自分のやりたい仕事をやらせてもらえる(やりがい)
 - b 収入金額・待遇が自分の要望と合致する
 - ③. 企業は学生の能力を求めている。学生は仕事のやりがいを求めている
 - 2) 適職を求める就活を考えてみる
 - ①. 企業は学生の能力を求め、学生はやりがいを求めている
 - ②. 就職活動では逆転して提示することにより適職を探せる、
 - a 学生が能力を
 - b 企業がやりがいを

3) 学生が良い就職に出会うための5ステップ

- ①. 自分が働く上での「希望する仕事内容」を考える
- ②. 自分の能力を考える
- ③. 仕事内容が希望と合う企業を探す
- ④. ③の企業から自分の能力を求める企業を探す
- ⑤. 自分の能力を証明できる資料と説明を準備する

eポートフォリオを活用可能な領域

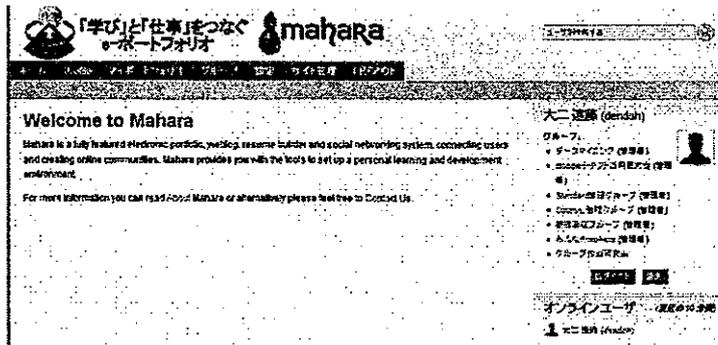
3. 学生が自分の能力を示すためのeポートフォリオ

1) ポートフォリオの語源

- ①. 「紙挟み」
- ②. 建築家の作品ファイル
- ③. 芸術家・グラフィックデザイナーの作品ファイル

2) eポートフォリオの概要

- ①. ログイン後の画面



②. 個人のスペース



a ビュー

- ファイル
- 文章
- 画像

遠藤の研究スタイル

遠藤が、研究スタイルの原点としているクリエイター

An Image



筒内道彦

2

来歴・人物【編集】

滋賀県敦賀市生まれ。東京は美千店。福島県立安積高等学校、東京芸術大学美術学部デザイン・情報学科。1998年フリーランス。その後設立し、2003年に事務所、ショップ、ギャラリーを兼ねる見とロックを設立。

2007年5月22日、女優の堀北真希と結婚してることが報じられた。

2008年4月より、トップランナーの5代目MCとしてレギュラー出演。

『旅行ライター』の執筆内容は、ほとんど。

CM【編集】

- FUJIFILM【Photois】
- 美生堂【uno お笑い 歴人52人CM】
- 株式会社【ハイチュウ】
- 美生堂【uno デオドラントスプレー】
- 東京メトロ
- PONSOL【キレートレモン】

出版物【編集】

- 『月刊 見とロック』(2005年創刊)
- 『月刊 見とロック』01(11月号)
- 『見とロック 筒内道彦の21世紀位等』(集文社)

b タグ

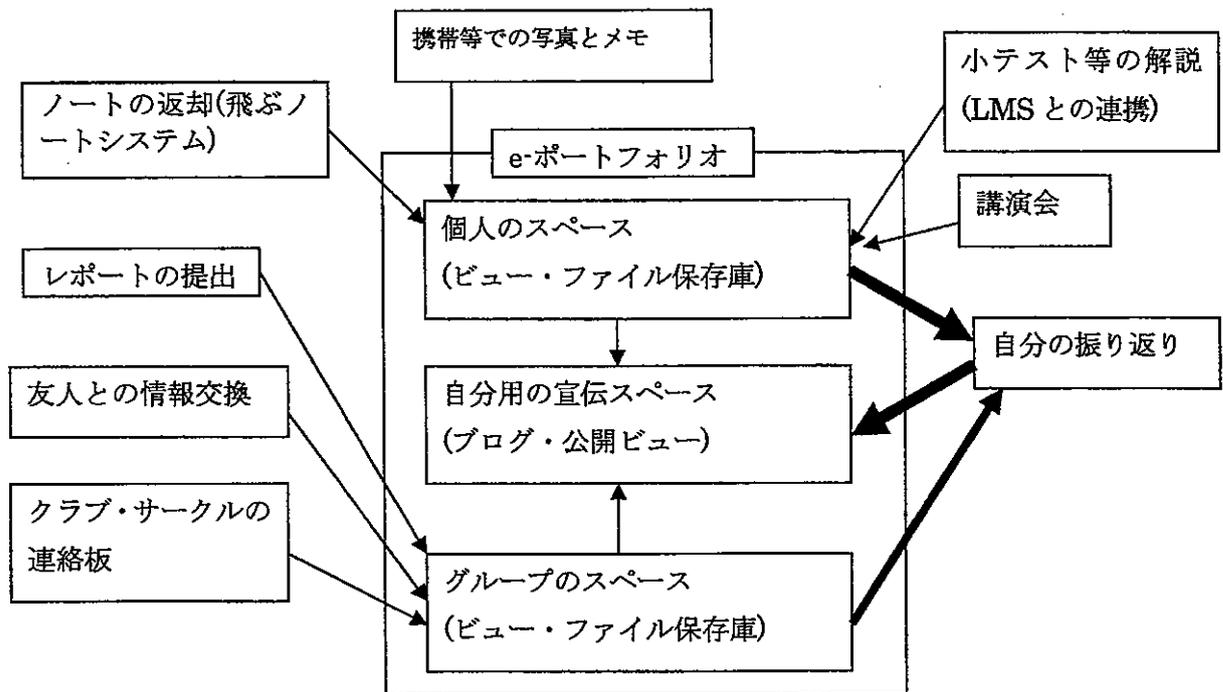
- ビューのタグが集合したもの
- 頻度に応じて大きさが変わる

③. グループのスペース

The screenshot shows the Mahara website interface. At the top, there is a navigation bar with links for Home, Profile, My Portfolio, Groups, Settings, Site Management, and Logout. Below this, there is a header for the 'moodle小テスト活用研究会' group. The main content area displays a 'Group View' with a title 'グループビュー' and a subtitle 'タイトルなし'. There are two main sections: '小テストの作り方' (How to make small tests) and 'グループビュー' (Group view). Each section has a 'View details' button and a 'View this group' button. The right sidebar shows the group's profile, including a list of members and roles: 'チーフ・マネージング (管理者)', 'moodle小テスト活用研究会 (管理者)', 'Standard管理グループ (管理者)', 'Course 管理グループ (管理者)', '事務局 (管理者)', 'みんなのmahara (管理者)', and 'グループ作成研究会'. At the bottom, there is an 'Online Users' section showing '大ニ道彦 (dendoh)' is online for 10 minutes.

- a ファイル
- b 文章
- c 画像

3) e ポートフォリオの使い方



4) eポートフォリオでポートフォリオを作る

①. 自分の記録から、能力や個性を示すモノを選び出す

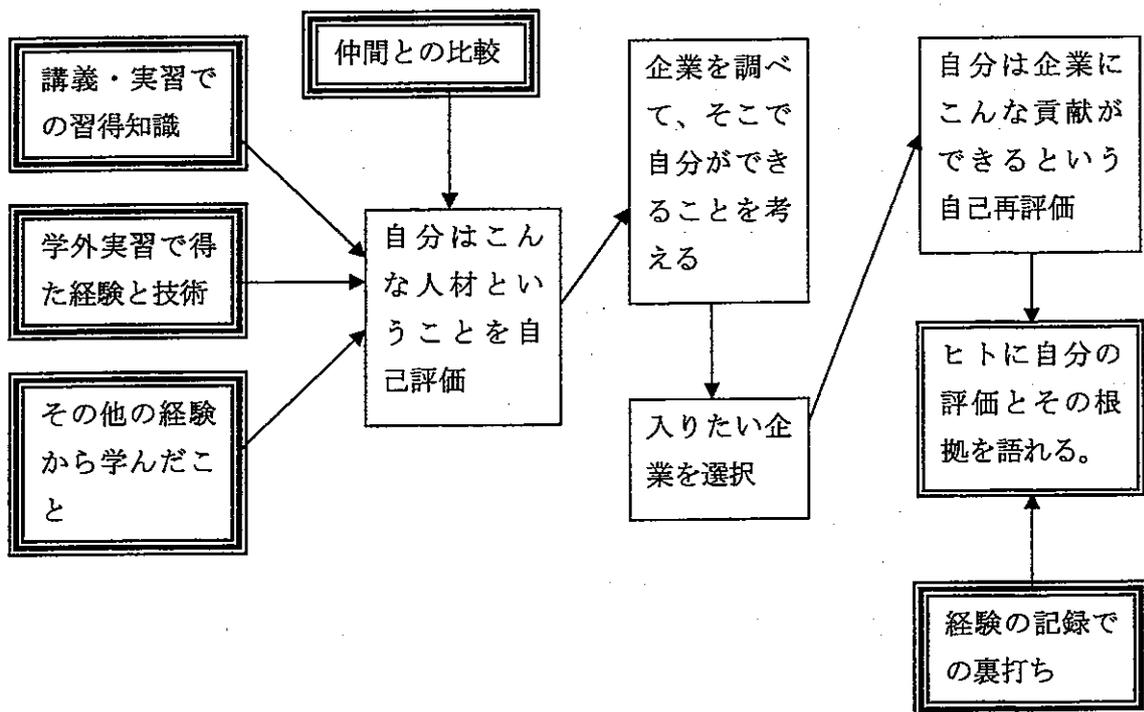
- a 基礎学力を示す成績
- b 特定領域の能力を示す資格
- c 問題解決能力を示す卒業研究・セミナーで取り組んだ課題
- d コミュニケーション能力を示す友達の広がり
 - 大学の友人との活動
 - 教室コンパで後輩を集める能力
 - 実習先での先輩や現場のヒトとの関係
 - 講演会で質問した先生からの返事

②. 記録を関連づけて、自分がやりたい仕事についての能力を構成してみる(カフェチェーン店の社員を想定してみる)。

- a コーヒーの品質を評価する際に必要な能力
 - 国際経済
 - 語学
 - 食品製造実習
- b ヒトを使ってお店を盛り上げる能力
 - ゼミテーマで適切なテーマ設定で皆の興味を持続できた
 - コンパでの幹事能力
 - バイト先でパートの責任者になった
- c 経理能力
 - 会計学での優良成績
 - 簿記2級
 - ITパスポート資格

- ③. 集めた記録で、「示せる能力の自分」を作ってみる
 - a コーヒー豆の選定能力があって、バイトさんと一緒にお店を活気付けることができ、収益の点でもお店を適切にコントロールできる。
- ④. もう一度、「能力を示したい自分」の証拠となる記録を並べなおしてみる
 - a 記録の構成は一般的に評価を得られそうか友人や就職支援担当者に意見を求める
 - b 弱いところがあれば、「記録」を補強するためのモノを学んだり体験したりする
 - 講義・演習などの選択科目を習得する
 - 現場実習に行く
 - 作品を作る
- ⑤. 自分の能力を生かせる企業を考えてみる
 - a 企業ごとのスタンスの違いを調べる
 - 全店禁煙でゆったりくつろげるスターバックス
 - 喫煙可で回転率のドトールコーヒー
 - 親しみとくつろぎのタリーズコーヒー
 - b 自分の活動がもっとも生きる企業を考える
- ⑥. 選んだ企業に合った自分の能力を最大に示せる「記録」を並べなおしてみる
- ⑦. その「示せる自分」をエントリーシート、履歴書と面接に生かす

4. 酪農学園大学 学生支援推進プログラムが目指す就職活動
最高のポートフォリオを作るための自分磨き



携帯電話を活用した双方向型授業の実践
-学生アンケートの結果より-

札幌学院大学社会情報学部 大國 充彦

※学生へのアナウンス（毎回の授業資料の末尾に掲載）

メールを用いた授業実践：「レスポンスシート」の提出について

1. 実施要領

送信先アドレス	syakai2009@sgu.ac.jp	送信後、受信確認メールが送られてくる。
「件名」もしくは「Sub」	自分の学籍番号（半角文字）	集約の際に学籍番号でソートするために必要。
メール本文	1) 自分の氏名 2) パスワード 3) レスポンスの内容	パスワードは毎回異なる

本日 1/26 のパスワード：〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇と〇〇〇〇〇

(ア) 9/29 の授業から実施。携帯の準備ができなかった場合には、手書きで提出してもよいので、用紙を受け取ること。

(イ) 携帯もしくは学内無線 LAN 接続可能なノート PC を持参。

2. フィードバック

(ア) 次回の授業でフィードバックを行う。

(イ) 送信してくれたレスポンスを資料として配付する。

(ウ) したがって、他者に読まれることを前提とした文章をレスポンスとして書く必要がある。

3. 「レスポンス」の送信期限時刻について

(ア) 授業時間に「レスポンス」を書ききることができない場合、当日の午後 10 時までには送信してもよいことにします。

(イ) その場合の手続きは 2 段階に分かれます。

手続き	締切時刻	内容
① 第 1 報	授業終了時刻 14:40	3)のレスポンスの内容以外
② 第 2 報	授業当日の 22:00	全て

4. 受信確認メールについて

(ア) 受信確認メールを受け取っていない場合には、大國のメールアドレスにその旨を連絡する。

(イ) 大國のアドレス : ohkuni@earth.sgu.ac.jp

(ウ) 受信確認メールが届かなくても、センターではレスポンスを受け取っている場合がある。

(エ) 受信確認メールのシステム上、受信したメールに 1 日 1 回だけ自動返信することになっている。そのため、複数回送信した際には、1 回分しか受信確認メールが帰って来ないことになる。

5. 添付ファイルについて

(ア) センターでの作業に手間かかってしまうので、「レスポンス」はメール本文に記載し、添付ファイルでの提出はしないようにして下さい。

携帯電話を活用した双方向型授業の実践 -学生アンケートの結果より-

札幌学院大学社会情報学部 大関 充彦

- 双方向型授業のねらい
- 対象授業の概要
- アンケート結果の単純集計
- 自由記述回答の概要
- 問題点と今後の課題

1002/19

双方向型授業の実践

1

双方向型授業のねらい

- 「学生のわからなさ」をわかる
 - 授業に対する反応・疑問・質問
- 学生へのフィードバック
 - 「わからない」箇所を追加解説
 - 授業内容からの発展・展開
 - 前回授業の復習効果
 - より良いレスポンスのサンプル
- デジタル・データのメリット
 - レスポンス資料作成の簡便さ

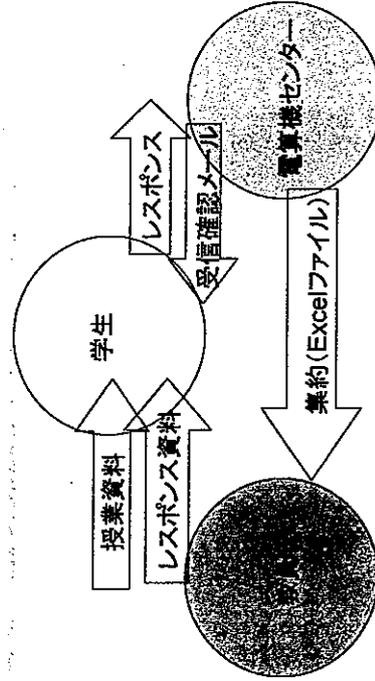
1002/19

双方向型授業の実践

2

対象授業の概要

双方向型授業の進め方



1002/19

双方向型授業の実践

3

対象授業の概要 実施した授業科目の概要

	配当学年	履修登録者数	学科別内訳
現代社会論 (前期火曜2講)	4年次	70名	商27, 法2, 社情41
メディア リテラシー論 (後期水曜4講)	1年次	130名	商76, 法4, 英4, 随2 社情44
社会情報学I (後期火曜3講)	2年次	166名	商59, 人1, 法1, 経1 社情104

1002/19

双方向型授業の実践

4

アンケート結果の単純集計1/4
携帯で作成

Q1 あなたは「レスポンスシート」の作成をどれくらい携帯で行いましたか。

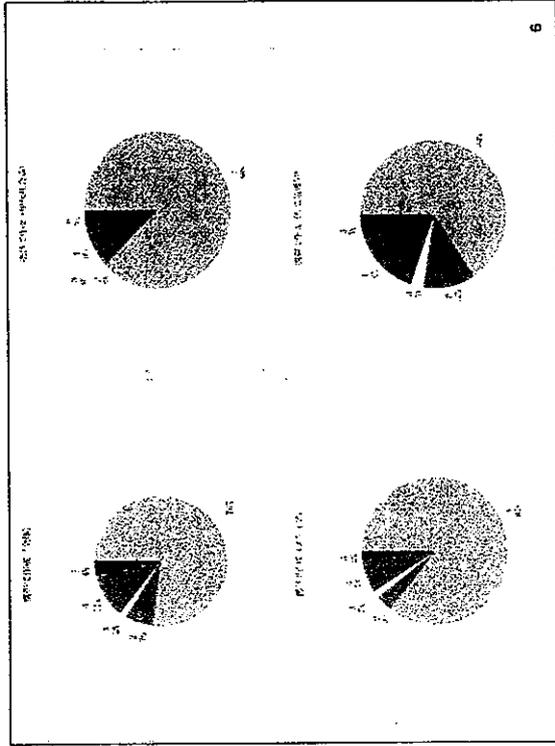
- ① すべて携帯で作成した
- ② パソコンで作成したことが1-2回ある
- ③ 半分はパソコンで作成した
- ④ パソコンで作成する方が多かった
- ⑤ すべてパソコンで作成した

N=164(全体), 33(現), 55(メディア), 76(社情)

1002/19

双方向型授業の実践

5



6

アンケート結果の単純集計2/4
時間内作成

Q2 あなたは「レスポンスシート」の作成を授業時間内に行いましたか。

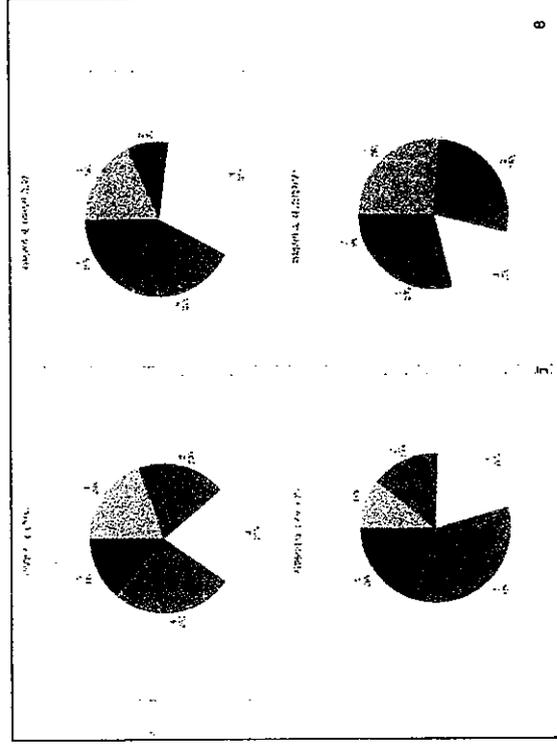
- ① すべて授業時間内に作成した
- ② 1-2回は授業時間後に作成した
- ③ 半分くらは授業時間後に作成した
- ④ 授業時間後に作成する方が多かった
- ⑤ すべて授業時間後に作成した

N=164(全体), 33(現代), 55(メディア), 76(社情)

1002/19

双方向型授業の実践

7



5

8

アンケート結果の単純集計3/4
手書きとの比較

Q3 「レスポンスシート」を作成する際、手書きで作成することと比較して、あなたはどのように感じましたか。

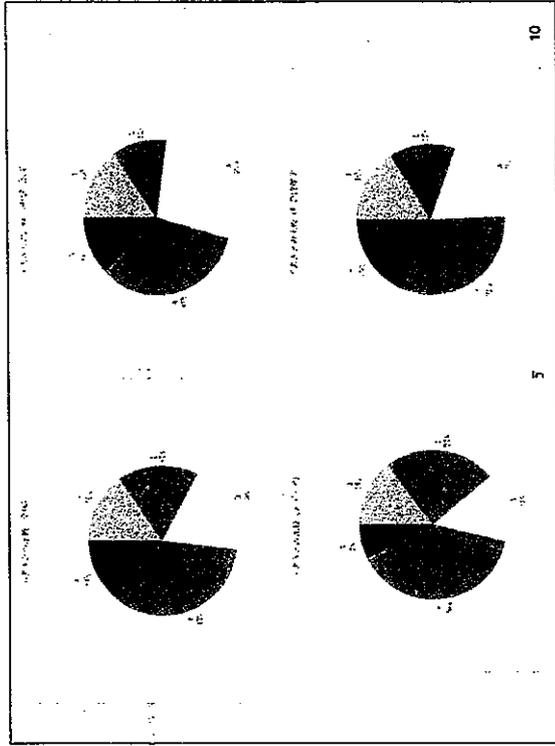
- ① 携帯の文字入力は苦手だ
- ② 携帯でも何とか作成することができた
- ③ 手書きでも携帯でもあまり違いはない
- ④ 携帯で作成の方が手書きより楽だと感じる
- ⑤ パソコンで作成しているので、手書きよりも楽だと感じる

N=162(全体), 33(現代), 54(メディア), 75(社情)

10/02/19

双方向型授業の実践

9



10

アンケート結果の単純集計4/4
文字数

Q4 あなたが書いた「レスポンスシート」の文字数についていかがですか。

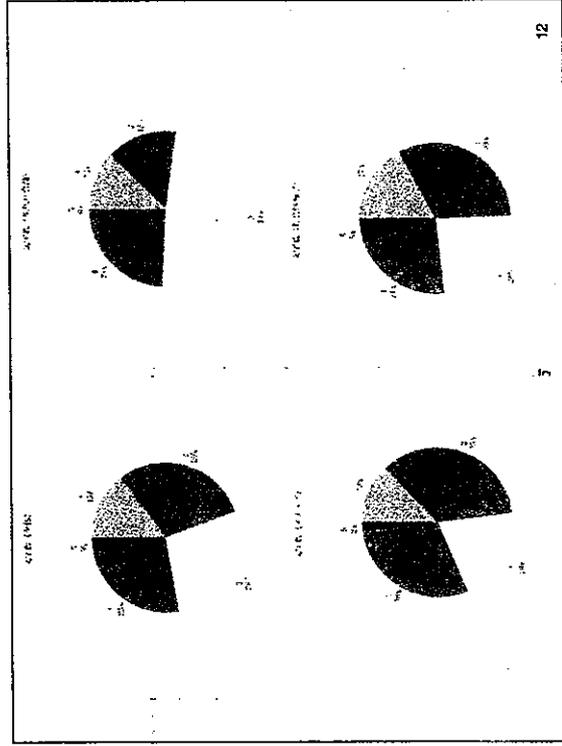
- ① 毎回十分な文字数を書くことができた
- ② だいたい満足のいく文字数を書くことができた
- ③ 特に問題は感じなかった
- ④ もう少し文字数を多くして書きたいと思うことがあった
- ⑤ もっとたくさん書きたかった

N=162(全体), 33(現代), 54(メディア), 75(社情)

10/02/19

双方向型授業の実践

11



12

自由記述回答の概要

- 問題点
 - 授業終了後の送信を忘れる
 - 携帯での入力のもどかしさ
 - 公平性への懸念
 - 受信確認への要求
 - 授業中に携帯・PCを扱うことへの違和感
- 評価点
 - 他の学生の反応を知ることができる

10/02/19

双方向型授業の実践

13

問題点と今後の課題

- 双方向型授業のねらいをより周知する
- 技術的側面が前景に出すぎらいがある
 - 受信確認メールが届かない
 - 送信したレスポンスの文字化け
- 運営方法の改善に力点を置きすぎる
 - 公平性の確保
 - レスポンス送信時刻の設定
- 複数授業で行う際の弊害もある

10/02/19

双方向型授業の実践

14

ICTを活用した授業改善とキャリア形成支援

2010年2月19日

携帯電話を活用した双方向型授業の実践

—学生アンケートの結果より—

札幌学院大学社会情報学部 大園 充彦

- 双方向型授業のねらい
- 対象授業の概要
- アンケート結果の単純集計
- 自由記述回答の概要
- 問題点と今後の課題

10/02/19

双方向型授業の実践

15

このレスポンス資料は、前回受信したすべてのレスポンスを字数の多い順に掲載しています。送信したのに自分のレスポンスが掲載されていない場合には大國のアドレス ohkuni@earth.sgu.ac.jp まで連絡をください。

01 第三回目の社会情報学では、最初にレポート提出の条件について説明された。今回のレポートは具体例を用いて書くことが条件であり、年月日は当然で、どこでどのように起きた具体例であるかを記述する必要がある。そして、大学のレポートは高校の「調べ学習」とは違い、ただ資料調査で集めてまとめるだけでは完成しないということが説明された。資料調査後が大学のレポートの本質であると解説され、そのためには、より掘り下げて、テーマについて各自「なにが問題か、なぜ問題か」について考える必要があると再確認できた。レポートは制作者のオリジナリティがあって始めて評価されるものである。今回は授業内容を変更してまで、レポートについて非常に厳しく、有意義な講義が行われた。著作権違反や大学の授業料を損するという話は印象的だ。加えて、当日提出予定のレポートについて学生に注意を促しただけではなく、締め切りを延ばして改善の余地を与えた点は素晴らしい。他の講義ではここまで厳しく添削はされないが、本来はこれが普通であると考えべきだ。札幌学院大学の学生は非常に受動的で明確な目標を持たずに学習している印象を受けるが、それが大学のレベルを下げている原因のすべてではないと考える。学院の経営陣や講師が良き学生を社会に送り出すという教育機関としての責務を放棄した結果も少なからず影響したと考える。大学生は自ら学ぶために大学に来ていることが前提だが、だからといって単位の安売りをして良い理由にはならない。東京大学などの一流大学には自ら学ぶ意識の高い学生が揃っているので、博識な教授を揃えれば各自向上できる環境にある。札幌学院大学の場合、とりあえず単位を、とりあえず学位をの意識で大学生活を送っている生徒がほとんどだ。こんな学生に形式的に講義をして、楽に単位を取らせて大学レベルで向上がみられるだろうか。それを「学生の意識が足りない」の一言で片付ける大学側には危機感という言葉はないのだろうか。

02 今回の授業のポイントは大國さんが当初用意していた内容とは異なるものかもしれないが、今回のポイントは私たちの現在正しいと思って提出しているレポートが全くレポートとして成り立っていないという点であると判断した。大学に入学してから様々な講義で多数のレポートを提出していたが、出された課題を忠実にこなせていない事に気付いた。私は四年生なのですが、なぜ四年生にもなってレポートの基礎的なものが出来ていなかったのか。そもそも大國さんの言うように採点する人が諦めているという前提が無ければ私は四年生になること自体が不可能だったのかもしれない。このような状況になってしまった原因も同じところにあ

ると気付きました。適当に楽なレポートを作成し、提出する→そのレポートの内容でも単位が取得出来る→自分のダメなレポートに自信を持ってしまう→他の講義のレポートでも同じ様に作成→単位取得→自信を持つ。という悪循環になってしまっていると感じた。上記の点をふまえて今回の講義を聞いていると今回の講義はとても自分にとっての特効薬になった。大学生として出来て当たり前の事を四年生の後期で出来てない事に気付いた。これは大國さんが他の教員が諦めてた問題に立ち向かってくれたおかげだと感じた。私より後輩の人達はまだ時間があるので今からでもレポートの在り方、大学で学ぶべきものを今回の講義を通して見直すべきだと思う。

03 今回の講義では、シラバスに沿った話ではなく、大学での学びについての内容であった。講義での初めてのレポート課題は、本来なら今日の18時までに提出しなければならないものであった。しかし、レポートの書き方、内容が大学生らしいものではなく、ある程度の条件があるにもかかわらず、その条件でさえ守られていない。事実をきちんと調べ、それがどういう内容のものなのか、そして、なぜそれが問題なのかという内容がきちんと書けていないものが多かった。私も、レポートは出すだけ出せば、内容は簡素であっても提出したということは見てもらえて単位はもらえる、という考えであった。それは、とても甘い考えだったと思う。入学当時からひとつひとつの単語の意味をきちんと教えてくれずに、講義を進めていく先生たちを見て自己満足に講義をやっている、と思っていた。もちろん納得の出来るやり方ではない講義もある。しかし、講義ではすべてを伝えてはくれない、ということが当たり前であり、自分自身で何とかする力を身につけなければならないということを聞いて、その通りだと思った。私は先生の話も聞いていても講義内容のほとんどが分からないままであり、プリントを何回見ても分からないことが多い。だからこそ、内容が分からないからと言って、うやむやにするのではなく、この講義が終わる時にはきちんと内容を理解できるようになりたいと思った。

04 今回の講義はレポート課題の提出方法の解説がほとんどで、授業は少なかったが、その中で少し気になったことがあったのでそれについて書き、それを今回のレスポンスシートとする。気になったことは、デジタルを使った人間のコミュニケーションについてだ。まず一つ目が、携帯電話がもたらす人間関係の変化についてだ。携帯電話が登場してから若者の人間関係は希薄になったと主張する本もあれば、逆に濃密になったという意見の両方を耳にする。筆者は間違いなく濃密になったと思う。初対面の人と少し仲良くなり、気が合いそうならメールアドレスを聞く。気が合いそうに無い人には聞かないが、それについて人間関係が選択的になり、結果、希薄になると主張する人も居るが、それは違うと思う。ポジティブに考えると、沢山の人間関係を友達と持ち、

その中からその時の状況にあった相手を見つけてコミュニケーションをとると言える。実際、筆者も服を買いに行くなら誰々、アニメイトに行くときは誰々と、友達を選択して約束をする。そのためには携帯電話が必須である。近頃は、友達紹介によりメールで知り合い、交際に至るというのも聞く。付き合いたい異性を引き合わせてその場のノリで交際、という側面が少なからず感じられるが、どんなツールでも使う人間次第ということだろう。

05 今回のレポートのポイントは「サイバー社会」「ひとつ」「具体例」「記述」の4つの条件である。このレポートで私の書いた内容と4つの条件を照らし合わせてみるとほとんど条件を満たしていないと感じた。他の講義でもレポートは書くことがあるが講義内でレポートの条件を解説していただいたことはあまりない。今回の解説でレポートの書き方を再度見直す機会ができたと思う。言われないと気付かないというのは少し情けないようにも感じてしまう。資料調査とは情報を選択、まとめる、写すということ。これは「調べ学習」であり、ここまでの調査は高校までのやり方である。大学のレポートで求められていることは「何が問題なのか」「なぜそれが問題なのか」という部分まで掘り下げることである。そこに方向性、持続性が加わり、作成者のオリジナリティになるということだ。生モノをレポートにする。レポートを書く際、引用のルールがあるが私は今回引用は一切しなかった。そのため参考文献等はない。これは私の記憶にある事件を具体例にしたためである。しかし引用をしないということは「調べ学習」すらしていないということに気づいた。自分ではまじめに書き(以下、文字化けのため解説不能)

06 今日はレスポンスシートの解説に始まり、レポートの基本的な書き方や大学生としての基本を学びました。先生のおっしゃっていたことは当たり前のことで、基礎の基礎が出来ていない人が多く、自分自身も反省すべき点がたくさんありました。情報ネットワークにおけるシステムダウンは、人々の生活にも支障をきたします。授業であった「銀行のオンラインシステム」・「航空会社のオンラインシステム」・「JRのオンラインシステム」などは、日常生活の中で重要な役割を果たしており、このシステムがダウンすることによる障害は大きいものがあります。授業で取り上げられたATMの話は祖母にしてみました。祖母は、やはりATMは使いにくいと言っていました。やり方を銀行員に教えて貰いながら振り込みをしたらしいのですが、確認ボタンの位置が見当たらなかったり、タッチパネルを押すのに一苦労したりと困ったそうです。なにより、すべてが機械化していてスピーディー(流れがとても速い)ということに頭もついていかず大変だったと話してくれました。若者にとっては非常に便利だが、すべての人に便利であるとは言えないということが祖母と話してみても改めてわかりました。

07 大学で身につけることは、「どうにもならないことを自分でなんとかする力」と定義されていましたが、確かにその通りだと思

います。実際今、自分が取り組んでいる講義の内容が、必ずしも役に立つとは限らなく、何のためにやっているのかわからなくなる時もあります。先生のおっしゃったことは全ての講義、共通して言えることで、その能力はこれからの私の人生で非常に役に立つと思います。しかし、これらを身につけなければ大学に通う意味はないとおっしゃっていましたが、その様なことだけではなく私は思います。大学卒業という就職活動に有利なものを得られる上、就職時にも優遇される場合があると言えます。実際にもそれを目的とした学生が多数居るのではないかと思います。私は大学での学び方を考える時、何通りもの、人それぞれの目的があって良いと思います。しかし、誰でも共通して言えることは、偉業を成し遂げた教授や友達の意見を聞けたり、交換出来る場である大学を貴重に大事に経験していくことは、未熟な私の器を大きくし、視野を広げていけるチャンスであることは間違いないと思います。

08 第三回社会情報学の講義を受けて、自分の大学に対する考え方の間違いの一つ、「レポート」に関して気付いた。以前まで私は、大学は「単位を取る場所。」つまり「レポート」はその単位を取得する上での乗り越える壁の一つ。出席や受講態度やテストなどと一緒。ただそれだけだと思っていた。現に、コピペもしたことがある。そして、それでも単位を取得することができていたわけである。しかし、今回この授業を受講した上で考えると、高い授業料を自ら捨てているということを深く感じた。参考文献を書くということは、偉いことではなく当たり前のことなのである。興味ないことに関して記述することは確かに大変かもしれないが、例えていうならば、一度も食べたことのないものを最初からマズイと決めつけるというのは根拠のない予測でしかない。と、同じように興味をもとうとしたり調べたりしてその事柄について知ろうとしていないのに自分は興味ない決めつけて、まともに記述しないのはおかしな話である。今回の授業をもとにスタートラインにつくことができたのではないと思う。

09 第一回レポートにおける重要な構成はひとつ・具体例・記述・説明の4つからなっている。レポートを書くにあたり、まず行わなければならないのが資料調査である。これらは「調べ学習」の延長上にあるが、大きな違いは問題点を明確にすることだ。それによって問題点や原因・要因を見つけることで具体例を発見し記述することができるため、初期の資料調査は極めて重要であると言える。また、掘り下げの方向性や掘り下げの深度によってレポート作成者のオリジナリティを確立させることができる。ただし、資料調査の後に引用する際は十分に注意する必要がある。参考文献リストを明示したり引用元や引用方法を明示することは、私たちが社会情報を学ぶ上で当然のように守らなければならないマナーなのである。今回のレポートの書き方は非常に参考になった。なぜなら、これらの4つの文章構成は就職活動で何度か実践して

きたからだ。自己PRやエントリーシートへの記入において、4つの要素を考えながら文章の構成を作ると大いに役に立てることが出来そうだ。

10 社会情報学の基礎である資料収集についての言及が行われた。先生は私たち学生に対して、ある程度資料を収集することが可能であると考えていただいていたが、多数の学生が行えていないため先生からのアドバイスといえる、注意文が送られるという結果になった。私自身もこのような結果になり自分のレポートが注意文通り出来ているかと心配になった。続いて新しい所に関しては1980年代にテレビ電話が発売されたが価格が高く、あまり売れてはいなかったという点について。大学はどうにもならないものを自分で何とかする力を身につけると述べられていた。大学の授業は出席しなくてもテストやレポートを完全な評価基準とするものも少なくなく、自分自身の学習意欲とその日の体調により出欠をコントロールできるため、先生の話には私とても共感できる。なにより約15コマの間に先生が集めた知識を伝えられるとは考えられない。そのため今回のレポートで行われた情報収集は自ら実演するという点で大きな収穫を得れたと思う。

11 今日の講義は予定を変更して大学での学び方について。前半はレポート作成上の注意について話をした。私は今までのレポートの書き方が間違っていたと思いました。今までは自分の考えで書ければいいと思っていたし、自分に興味のない内容の時だけ参考文献を使えばいいと思っていました。それは、先生も言われていましたが、「教師はめんどくさいからどうでもいいレポートでも点数がもらえる」から私はそれで今までレポートを作成しましたし、これでいいのだと思っていたのもあります。レスポンスも自分の書いたのが掲載されていないのはそれほどひどい内容の文章だったと自覚しています。今日の内容を聞いて私はたくさんの資料を参考にし、問題点を探して具体的例を記述することだと改めて理解したつもりです。これからのレポートについては、新しく作るつもりで励もうと思います。また、大学で何を身につけるかについては、私は人とのコミュニケーション能力を向上させたいと思っています。

12 本日の講義の内容は、大学での学び方だった。大学の講義は小学校、中学校、高校、とは授業のスタイルが違い、より学ぶ意識がないと意味のあるものにはならない。レポート一つにしてもしっかりレポートルールを守らなければならない。そして大國先生が講義で述べていたように単位を取るだけで良いという気持ちでは高い授業料をドブに捨ててやるようだと思って思った。自分のためだけではなく、大半の学生が親に授業料を出してもらっていると思うので、改めて学生は考え直す必要がある。私を受けてるゼミの先生が以前、「大学は高校とは違い大人と大人の付き合い」とおっしゃっていた。私もその言葉に共感した。受け身のままで全く自分の身にならない。そして大國先生が「どうにもならない

いものを自分で何とかする力を身につける」という言葉が心に響いた。私は、現在その力が身につけていない。なので卒業するとき大学に入学した意味を残すために残りの大学生活で身につけて行きたい。

13 今日の講義は主にレポートを作成する上での注意事項と、大学での学びだった。レポートを作成するには必ず、自分が論じたことを明確にするために参考文献を用いる。しかし、参考文献を記述しなければ無断引用となり、著作権の侵害となる。最近では、webで検索すれば自分が書きたい事柄が載っているページが見つかり、簡単に引用ができる環境になっている。しかし、webページから無断引用して、先生がおっしゃっていた「学生が使わないような語句」が含まれていたら、アンド検索で無断引用だということがわかってしまう。無断引用は文章を構成する力が身につかず、レポートを作成するからには自分の意見を主張して、ズルをせず作成しようと思った。大学での学びについては、「大学はどうにもならないものを、自分で何とかする力を身につける」という先生の言葉が印象に残った。大学は教科書を使わずに、社会に出てから通用する能力を高めていく場であると感じた。

14 今回の講義はレポート作成についてが主だった。情報を選択しまとめたり写すことは高校の調べ学習レベルである。大学のレポートは資料調査を徹底的にすることは前提でありいくつかの資料を参考にし、そこからさらに掘り下げていき何が問題なのか、なぜそれが問題なのかを調べたり考えたりするオリジナリティーが必要である。参考文献や資料がないということは独り言と同じことであり、わからないことを調べていないため良いレポートにはならない。コピーは引用ルールを守っていないため著作権法違反である。したがってルールを守る必要がある。引用のルールは「引用部分の明示や参照指示(作成主体、発行年など)今回の講義はレポートの作成について特に厳しく説明されていた。自分も改善するべきところがあるのでより良いレポートを作成するためにも上記のことに気を付けレポートを作成しようと思った。

15 今回はレポート作成上の注意というレジュメを主として授業が進行していきました。レポートは自分の思考を形にし作成することまた引用は2割を越えないようにするという注意事項を聞きました。そして社会情報学は一回、一回の授業を単発に考えず連続した講義として学んでいくようにということでしたのでそのような認識の元これからの社会情報学を受講していきたいと思いません。私以外の学生によるレスポンスシートによって社会情報学の構成原理への考えが深まりました。また大学という所は自分が困った時に解決し何とかする力を得る場所でわからない所があれば資料で調べ自分で学ぶことが大切であること、[知ろうと思う心]、[学ぼうと思う心]が大事であること、棚からボタモチ消費主義ではないいけないことを改めて学びました。これからの大学生活はそのような気持ちで学んでいきたいと思いません。

16 今日レポートを作成するにあたっての注意で資料調査について話しながら自分がどのように作成してもらいたいのかを説明しました。レポートを作成する途中で聞きながら進めたが、参考文献が3つしかなく引用も適当だった。説明を受けたことで訂正しながら作成しました。もう少し内容を細かく資料調査し文献を5つ以上にしたり、コピーや著作権違反とならないこと、二割が引用でオリジナリティのあるレポートを作るようにと先生はきちんと向き合う姿勢を期待していた。理解したけど600字前後にまとめるのが難しいです。でも「掘り下げの方向性」、「持続性」が評価されるので良い評価が出来るように努力していきたいと思います。授業は高校までとは違い、自分でなんとかする力を身に付けるよう努力しなければならない。そのためにもこの講義は大変深い内容であることがわかりました。

17 今回の抗議では携帯電話の普及を事例としてそれをメダ的な視点から見えていった。現代の携帯電話はただ電話するだけのものではなく、音楽を聞いたりカメラで写真を撮ったりテレビを見たり様々な目的で使われている。この携帯電話というメディアは従来では区分しづらいメディア特性が多い。相手とコミュニケーションをとる場合も従来の家族や勤務先という社会的文脈ではなく、特定の個人にアクセスできるのも特性の1つだ。こうして1つのメディアが個人のものとなって利用できるのは非常に便利ではあるが、それに依存しすぎてしまったり悪用されてしまったり起きている事件が後を絶たない。なのでもっと携帯電話の防犯セキュリティシステムを改善していけばこのような犯罪は少なくなり、携帯電話を1つのメディアとしてより有効活用できるのではないかなと思う。

18 今日の講義は、まず最初からレポートの内容についてもう一度確認した。また、先生のおっしゃったレポートの注意点についてかなり授業料をドブに捨ててしまっているのだと思いました。よいレポートとは情報の生ものの集まりであり海であると言う言葉は理解しやすかった。講義の中で大学の存在意義とは、「どうにもならないものを自分で何とかする力を身につける。」と聞いて、私が今まで高校までやってきた授業の受け方とは180度変わり、さわりだけ聞いてそこから自分でたくさんの知識の枝をのばしていかなければならないと思った。大学が4年間なのは3年間は自分で学ばないといけないことを念頭においていなかったために今の私たちのような状態になるのだ。それを打開するには少しずつ自分から進んで勉強しなければならないと思った。

19 今回の講義ではケータイの普及を事例として取り上げている。日本で携帯電話が誕生した当初は重量が約3キロも気軽に身に付けるには非常に困難であったが1990年半ば以降に現在のように気軽に身に付けることができるようになった。現代の携帯電話は昔では考えられないほど様々な機能が搭載されている。インターネットに接続できたりカメラで撮影ができたり、さらにケータイ

でゲームや音楽を聴くことやテレビまで見れるようになった。今では子供から大人までほとんどの人が携帯電話持っている。そしてそれらのほとんどがメールで連絡を取り合っている。確かに現代の日本にとって携帯電話の発展は素晴らしいことではあるがそれによって人々のコミュニケーション不足や特に小中高生のケータイ依存症が心配される。

20 今回の講義は主にレスポンスに沿ってレポートの注意点を学びました。レポートとは問題を一つ取り上げ、具体例といった事実を述べ、その現象がどのようなものなのか記述することが最低限の条件であり、この4条件を守らなければならない。この中で、何が問題なのか、ヒューマンエラーの何が問題なのか、資料調査をして問題や意義をほり下げる。これにより、独自の方向性や持続性を見つけオリジナリティのレポートを作成する。現在の情報社会(サイバー社会)について知らない、もしくは理解をせずに生活してきた人にとっては著作権やネットのルールをわからずにパソコンや携帯などを使っているのではないかな。その中に私も含まれるが、この社会についていくためにも様々な勉強していかなければならないだろう。

21 今日の授業は大学での在り方というか、大学生とは何かを学んだ。大学生はどうにもならないものを自分で何とかする力を付ける所という言葉がとても心に響いた。確かに自分で何とかする力がなくてこれから先社会に生きていけるわけがない。それと、レポートの書き方を先生がご説明してくれてとてもためになりました。先生のおっしゃっていた悪いレポートの例はほぼ当て嵌まっていて情けないと思いました。自分は莫大の金をどぶに捨ててるという事を改めて実感しました。ただ単位さえもらえればいいという考えは中学生高校生と同等の考えであり、大学生ならさらにもっと深く追究するのが至極当然であるという言葉が本当に心にグサッときました。これからは自分の大学生としての在り方を改めたいと思います。

22 今回は3回目で、社会の情報化・ケータイの普及を事例として内容を変更してレポートについて講義内容を変更しました。今回だすレポートは、サイバー社会、問題をひとつ、具体例、記述の4条件をさいいていでも与えられました。そして1番印象的だったのは、レポートを受けとる教授が1番求めているものは「君達のオリジナリティをしりたい」という事でした。正直参考文献の内容を似たように書きうつして私はオリジナリティが少なかつたと思います。今回の講義は辛口で自分の今までの大学でのありかたを見直すくらいのものでした。妥協したレポート採点を見直し、危機感を持たせて社会に出てからのことまで考えているこの立て直しは私は必要だと思いました。

23 10月13日の講義内容は、この日締め切りであるレポートの書き方について中心であった。今回のレポートでは文章の条件を読み取り記述することが必要でありサイバー社会、問題をひとつ

提示、具体的な例、記述の4つが今回のレポートの条件である。大学のレポートは、情報(資料)を選択し、まとめ、それらの何が問題なのか、なぜそれが問題なのかを掘り下げていくことが必須である。また、参考文献をきちんと明示すること、引用のルールを守ることも必要であるという内容だった。その場限りのお茶を濁すようなレポートを書くのではなく、自分でまとめ問題を掘り下げていくことにより、講義の内容を再認識し、生きた情報になるようなものを書いていきたい。

24 今回の講義では、主にレポートとレスポンスに対する講義内容だった。現在は、調べればいくらでもネット上に情報が載っているので、レポートで参考にする資料などを入手しやすくなった。だが紙媒体と違い、簡単に中身をコピーできる上、誰が書いたのかもわからないという資料も多いため、ばれないだろうという意識が働き、正しく引用されず盗作に当たるレポートが、多々あるのが現状である。今ではネット上で情報入手が可能であるため、内容の良し悪しよりレポートの提出期限を守る方に重点を置いてレポートを作成すると、このような正しく引用されていないレポートが増えるので、しっかりと引用する際にはルールを守ることが大事であると思う。

25 今日は「大学での学び方」というテーマだったが大学に入り勉強と言う事を高校の時に比べ勉強全然をしなくなり頭を使わない気がする。大学での講義ではただ講義を受けてるだけの場合が多く、考えると言う行為を全然していないと思う。今日の講義でもいっていたが講義にでなければ単位をもらえるからといって、ただ講義をうけている。ただレポートを出しているという事は自分にも当てはまるなと思った。このままでは自分でもダメになるなと思い新聞を読んだりしているが、もっと頭を使い考えると言う事をしなきゃダメであり、わからない事があつたら調べる、色々な事を考え思考錯誤をしていく事が当たり前の事だが改めて重要であるなと思った。

26 大学で提出するレポートのコピー&ペーストは、全国的に問題になっているとニュースで見たことがある。それは、偏差値の高い大学、低い大学などは関係無いという。入学当初、知り合いがコピー&ペーストで完成させたレポートを提出したことで、100%の出席をしたのにも関わらず単位を落とされた場面に遭遇して以来、私は引用には気を配っている。大國先生がお話されたように、文献をそのまま入力して提出することは小学生でもできると思う。勉強する際、人に教えることで自分自身の理解度も深まるように、講義で学んだことを図書館などで資料を片手に掘り下げることで、同じようにより理解度が深まるのではないだろうか。

27 90年代の半ばから後半にかけて我々一般市民に携帯電話が急速に流行り出した。今回の資料には、80年代には初期型の「ショルダーホン」という大型のカバンのような携帯電話があったことを初めて知ることができた。2000年以降携帯電話がカラー化から

始まり、様々な便利な機能がたくさん備わる物が出るようになった。しかし、その機能を悪用する者もしばしば現れるようになってきた。携帯掲示板などでのイジメで自殺をするといったことがよく起こっている。私は、近年携帯電話の加入者契約数が1億台を突破したというニュースを見て日本人は携帯依存症の傾向が強くなっていることの形を表している数字に見えた。

28 今回の講義ではレポートとは何かや書き方、ルールなどを中心に行われた。私は恥ずかしながら入学してから今までいろいろな講義でレポート課題の講義を受けてきたが、一番大事な今回の講義の内容であるレポートについて知らなかった為大体で提出してきていた。多分この大学には私と同じくレポートとは何かという問いに対して解答できる生徒はあまり多くはないと思う。これに対して大学の入学時にでもレポートについてや高校生までの授業態度では大学では通用しないなどという線引きをするためにも特別講義を行っていただければその先の大学での講義を有意義に受ける事が出来るのではないかと思います。

29 今回の授業では、最初にレポートを書く際の注意事項の話を聞きました。大國先生の口調はいつも穏やかですが、ネットの引用についての説明の時はやや激しくなった感じがしました。それほど大事な事、当たり前の事なんだと思いました。当たり前の事が出来ていないというのは、あってはならないことです。私もこの授業のレポートに限らず、これからも大学生なのできちんとルールにのっとったレポートを書こうと改めて思いました。大学の存在意義というのは恥ずかしながら知りませんでした。単位も4分の3が授業外学習だなんて思いませんでした。とても勉強になりました。ありがとうございました。

30 今日講義は情報化について解説していました。情報化とは、起こった出来事を他に伝えるプロセスのことだと私は解釈しました。例えば事件が起こって、目撃者がいて、その人が警察に通報する、これが情報化の例だと思います。その後ニュースなどで私たちはその事件を知るのが普通ですが、もし自分が目撃者だったら、その目撃した瞬間は情報ではなく出来事であると、私は情報化を解釈しました。普段私たちがやっている、おもしろい出来事を友人にはなすという行為も情報化だと思いました。このように何気ないこともくだけて考えてみると、色々な行程があるんだなと思いました。

31 第3回前半レポートについて。内容を大学生らしく。調べ学習ではなく、資料調査。ほり下げ、何が問題なのか、なぜそれが問題なのかを明確にし、オリジナリティを出したレポートを作成する。大学の授業は、どうにもならないものを自分で何とかする力を身に付けるもの。授業で全てを伝えない。文科省では授業外学習を授業時間の3倍と定めてある。私は、授業外で学習する時間があまりにも少なすぎるんだと実感させられました。今までには棚からボタモチ消費主義でした。今日気付いただけでも良かつ

たと思います。もっと色んな事に興味を持って、理解しようと努力したいです。

32 今日の講義で強く感じたことは先生が言っていたようによいレポートとは情報の生物の集まりであり海だという言葉である。この言葉のごとくよいレポートは様々な新鮮な情報が入り乱れ、しっかりとまとまりのあるものだと思う。そのようによいレポートを作るのは実際難しいことだと思う、私は読み書き能力にはあまり自信がないのでうまくまとめたりわかりやすく情報を扱うということが下手だと思う、しかし今日の講義を受け自分には何が足りないかを考えさせられ自分の弱みを見つめることができたのでその弱みという穴を今後限られた大学生活の中でうめていきたいと感じた。

33 今日の講義はレポートを作成する上での注意事項とレスポンスに対してのコメントがメインだった。レポートを作成する上で調べ学習とレポート作成の根本的な違いを改めて知る事ができた。レスポンスに対してのコメントも、ひとつひとつの内容の中から気になった一文をピックアップしそれに対する回答という形でレスポンスをしっかりと書いても疑問点が残る人からしたらとてもありがたいシステムだと思う。恥ずかしながら文科省の定めた大学授業のシステムをきちんとした形で初めて聞きました。自分で動かさなきゃ何も自分のものにならないということを改めて痛感しました。

34 レポートを作成する上で大切なことは、資料調整や調べ学習である。これは、レポートを作る際に、様々な資料や文献に目を通し自分なりに価値があると感じるものを選抜していくという作業である。そして、そこから自分のレポートの方向性を定めて行きオリジナリティのあるものを作る必要がある。このような作業を行っていけば600字のレポートを書くにしても、結構な時間を要すると思うが、確実に資料収集能力や文章力を身につけることができると思う。これまでは単位をとることを目的にレポート作成をしてきたが、自分にとって価値のある作業をしていきたいと思う。

35 今日の講義を受講して、今日の授業内容はレポートのやり方や前回みんなが書いたレスポンスシートを見ていきながら授業が進められましたが、私は今3年生ですが改めて学校に通うことの意味を深く先生から学ぶことができました。それはレポートや課題に対してのしっかりとした意識だったり、自分の将来などにも深く関わってくると思うので、これから授業だったり、自分がやらなくてはいけない事を一つ一つ自覚をもってやっていきたい。そして今日みんなのレスポンスシートの紹介ではみんなの意見を参考にすることができて、より深く考えて学ぶことができました。

36 レスポンスの内容今週はレポートの書き方についての内容が主でした。私はレポートはあまり得意でないためとやかく言えま

せんが努力を認めていただけたらと思います。「大学に入ったのになんにも成長しないで卒業しては学費がもったいない」と先生がいったのはごもっともだと思います。先週のレスポンスシート(出席)ですが、初めての作業で馴れずアドレスを間違えてしまいました。その後送信し直したのですがエラーで返って来てしまいました。次回からは気をつけますので出席カウントしていただければと思います。御迷惑おかけして申し訳ございません。

37 今回の講義はまず最初にレスポンスシートの確認と解説が行われた。今回レスポンスシートは105名の分が提出された。このシステムは他の学生が講義をどのように受けているか、人それぞれ感じることはやはり様々である。レスポンスシートを見ることによって、また新しい発見や別の見方ができるため、とても役に立つと思う。そしてレポートの話になり、良いレポートの作り方や高校までの学習と大学での学習方法についてという流れであった。「どうにもならないものを自分で何とかする力を身につける」ということをいかに取得か、が課題である。

38 大学の授業の割合の話聞いて、授業時間1授業外時間3の単位数で区切られているのは初めて聞いた。高校の時であればただ話を聞いていて、テストで点数をとり、取れなければ補習して終わりであったのに、大学の授業では、先生からある程度のキーワードを与えられそれについて自分で調べていくのが大学の授業であることが理解させられた。自分の今までの授業の受け方はなんとなく話を聞いて、興味があれば耳をかたむけ、つまらなければ寝ていた。今回の話は自分の今までの受け方と、これからの受け方に少なからず影響を与えていくと思う。

39 今回の講義のポイントは、レポートの書き方、講義のうけ方です。講義のうけ方では、4分1しか教えてくれないということです。あとの4分3は自分で調べて勉強するということを知り、そして、分からないことは、調べるということ。これなら、大学らしいと初めて思いました。そして、レポートの書き方です。レポートでは、いかに調べて、その内容を書き、記述すること。そして参考文献を書くということ。それから、事実を上げて書いていくということ。自分は、この講義で、始めてこれらのことを学び、この講義を受けてよかったと思いました。

40 社会情報学Ⅰの三回目の講義は、最初に前回のレスポンスシートについての解説をやった。レポートについては調べ学習は高校までであり大学では資料調査を徹底してそれをさらにどのような方向性、持続性で掘り下げ、オリジナリティが必要である。大学はどうにもならないものを自分で何とかする力を身に付けるのが重要。確かにインターネットからコピーして引っ張ってきた情報をただ張り付けただけでは自分にとって何の意味もないことは大学生活で身にしみてわかるような気がする。授業でわからないことは調べるようにしたいと思った。

41 本日の「社会情報学Ⅰ」の講義での学びは何だか1年生の時

の論述作文のような内容が多々あった。それはちよつと、例えば引用の仕方であったり参考文献のことであったりと様々である。そして、大学での学び方についても参考になった。やはり、自分も大学で学ぶ学生の一人であるから、学費を無駄にしないようにと考えさせられた。それは、しっかりと授業を聞く事も大事であるが、自分の中の意識を1つ上の段階に持つてく必要があるということにも繋がる。であるから、自分も大学生活を無駄に過ごさぬよう日々努力したい。

42 正直、今さらなぜレポートの書き方について講義で話すのか。というように最初は感じた。人の論文を自分の考えとして書いていけないのはもちろんのこと、自分の考えの裏付けとして他人の意見を利用したい場合はその部分をしっかりと示さなくてはならない。レポートを書く上で自分は十分に注意を払ってきたつもりであったが、足りない部分もあることを再確認した。自分の頭で考えたものをまとめるから大学生として意味がある。大國教員が話したことを今まで以上にしっかりと肝に銘じて、今後の授業に臨みたい。

43 著作権問題は非常に難しい事である。最近では音楽業界での著作権が非常に問題になっているが、自分が考えた事柄を他者が既に全く同じ事柄を考えている可能性があるのではやはり事前に調べることが非常に大事になってくる。それはレポートにも言えることで、良い内容を書けば書くほど、講師などはそれを調べる可能性が高いので、いくら自分が考えた事でも先駆者がいれば著作権に引っ掛かる可能性が出て来てしまう。そういうわけで事前に調べたものがあれば引用とし、自分の考えも書いてく事が非常に大切である。

44 今日の講義で最近の学生のレベルの低さに正直残念や嫌気を感じました。確かに自分もその中の一部なのかもしれないが、今日の講義を受けて改めて低レベルだと思い知りました。提示された問題に対してそれに触れずに自分で勝手にレポート書いたレポートがあったと聞いた時とてもびっくりしました。今までにレポート提出は何度もあったが今思い返すと常識的に考えて合格点もらえるような内容だったかと思うと自信がありません。でも今回の講義のおかげでこれからのレポート作成のやり方を変えようと思います。

45 レポートについて詳しく説明してくれました。引用部分に「」をつけることや、無断引用はいけないということをちゃんと理解した。大学では全てを伝えず、自分でなんとかする力を身に付ける。たしかに大学が高校のときのように先生が全員を見れるように少人数ではやっていないし、先生に聞けばすぐに教えてくれるものでもない。そのために授業外学習ができるようにレポートなどがあるのだと思う。先生が生徒に自分でなんとかする力をつけるためにだしてくれているのがレポートなので真剣に取り組みたい。

46 今日の講義は前回のレスポンスを確認しつつレポートの書き方についてだった。レポートについては4条件すべてを満たして初めて評価の対象である。具体例、説明、現象がどのようなものか、自分の意見である。資料を集めるだけでは調べ学習であり、コピペに関しては引用のルールを守る、資料もテーマに沿ったなるべく新しい情報を使うことである。そして一番大事なのは自分の意見(オリジナリティ)をしっかりとあることである。せっかく添削してもらえるのだから作文ではなくレポートを作りたいと思った。

47 今回の講義は今日までの締め切りのレポートの作成方法の注意事項というものであった。文章を読み、情報収集をし、きちんと処理をする。という本来、当たり前前のレポートの作成方法と言う話しがメインであったと感じた。私自身、大國先生のメッセージをあまり見ずにレポートを作成していた。そのようなレポートを作成していたので適当な人の中の一人だったんだと感じた。お金を払って学びに来てるのではなく、お金を払ってでも学びたい。そういう意識を持って以後講義に出席していきたくて思いました。

48 今回はレポートの書き方が全般でしたが、高校までは調べもの。大学からは更に調べたものを厳選して自分の意見を付け加える。など確かにそうだなと思う点がいくつかありました。しかし、1年次に論述作文で学んだことといくつか違いがあり受け入れ難い部分があるのも事実です。その点も考慮に入れて授業を進めて頂けるようお願いします。あと今回の授業は先生の持論を1時間半に渡って押し付けるといった印象を受けたので残念でした。次回からは通常の授業を行って下さい。よろしくお願いします。

49 今日の授業ではレポートの作り方、レポートを作成する上での考え方についてでした。レポートを作る際に重要になるものは、掘り下げると言うことでただ単純に資料をいくつか読み込みそれをまとめると言うだけのものでは高校までで行っていた”調べ学習”と変わらず大学に入ってまで行うような学習ではないと言うことでした。私自身、今回のレポートでは確実にダメだと評されるレポートを作成してしまった為今回の授業の内容をよく意識したレポートを作っていかなければならないと思います。

50 今日の講義では主にレスポンスシートとレポートについてのことを学びました。レスポンスシートでは上手い人のいいところを自分でも取り入れていいレスポンスシートを私も書きたいと思いました。また、授業外学習、つまり自分で調べると言うことの必要性を学びました。授業外のほうが授業より3倍長く時間をかけなければならないということには少し驚きました。あと、ATMが高齢者にとって使いにくいものであるならなにか解決策を考えなくてはならないのではないのかなとも思いました。

51 今回の講義ではレポートの書き方について具体例や説明と記述の違い、また参考文献リストや文献の引用方法といったようなレポートを作成するに当たって基本的な内容が挙げられた。また

資料について一つの資料だけではなくさらに掘り下げていくことがとても重要であること、また調べた資料について自分がどのような答えが見つかったのかが大切であることを学んだ。今後の学生生活では必ずレポートを作成する機会が必ずあるのでレポートについて復習する良い機会になった。

52 今日の講義では、レポートの注意点についてやりました。どのようにして書くのか、どの点に気を付けるのかを具体的に説明してくれた。大学とは、こういうところなんだぞというのを改めて実感しました。ただ単にレポートをやるのではなく、どうしてなぜなどの具体的な事を的確に書く。それは、簡単なことだけとても難しい。面倒臭いで済ませるなら、そこで終了だと私は思うので、今後のレポート課題を今日の講義を聞いた上で、十分に注意して望みたいです。

53 確かにレポートもろくに書けないまま大学を終えるのは授業料の無駄だと思う。それに社会にでてからもレポートの書き方や文章能力はどの分野でも必要とされる大事な力だと思う。この講義の用に講師が身を削り私達にそれを教えようとしていることに感謝したい。私も文章を書くのは苦手な方だし、1回目のレポートも参考文献を記載しないまま提出してしまった。次からのレポートはしっかりとルールに準じた大学生らしい書き方でレポートを作りたいと思った。

54 今回の講義は、レスポンスの話とレポートの提出状況からレポートの書き方中心の授業となった。内容はレポートの指摘、情報化を改めて説明、調べ学習と資料調査の違いについてとても熱心に指摘され、具体的な内容を改めて把握した。あまりに印象に残ったため、今回の学んだことは、他の講義でももちろん活かさなければいけないし、特に学生として要求に答えることが当たり前であることを改めて自覚させ、授業に対する考えを見直すきっかけだと思った。

55 今日の講義はちょっと圧迫的だった。もともと自分がやるべき事をやっていないと思っているから講義中に先生が述べられた事について圧迫を感じるのかもしれないが…後1つ私は疑問があるのだが、何を持って採点に値するレポートとなりえるのか。レポートを採点する人間にとって微妙に違ってくると思うが今講義で挙げられている条件は厳しいのかそれとも当然の事であるのか。この講義と同じレポートの作成の仕方であれば他の教科に万能に通用するのか。

56 今回の講義を受けて、一年の時に受講した論述作文がレポート作成に関してためになっていると思った。もし、受講していなければ参考文献の引用部分を「」で閉じることをしなく、無断引用を多々おこなっていたに違いない。しっかり講義を受けてよかったと思う。また、大学の講義は自身からどう取り組むかで違ってくると思う。受けて側だけにいるのではなく、受けて調べる側になるべきだ。私も受けて側ではなく、受けて調べる側になろう

と思う。

<↑200字↑>

57 本日締め切りのレポートについて、しっかりしたレポートの書き方講座。そもそも大学生のレポートと高校までの調べ学習は決定的に違うものであり、全く文献にあらずに自分の頭の中だけで作ったレポートはレポートとはよべない。資料調査をして、そのデータに裏打ちされた落としどころを作ることが重要。正直、何しに学校来ているのかわからない連中が多いと思ったので、それを形として提示してもらえたのがありがたかった。

58 今回は急速テーマが変わり、大学生での学びかたについて話を聞いた。自分が考えることとしては、大学は高校と違い学ばされるでなく、学びに行く場だということ。講義が進むにつれ学ぶのに興味が興味が薄れるものもでてくるが、それは我慢するべき。せめて興味のあるフリをしたほうがいい。社会にでたら興味の無いものをやらされることのほうが多いだろうから。この講義に関していうなら、レスポンスシートですべてがわかる。

59 今回の授業内容は、まず私たちとも多くの関わりがある携帯電話の普及について学んだ。携帯電話が誕生してから現在に至るまで日々進歩していった。最初は電話をかける機能しか無かったが、現在では、カメラ、メール、音楽、ゲーム、ネットなどたくさんの機能が追加されていて、追加された機能もどんどん性能が上がってきている。現在と昔の携帯電話を比べると、比べ物にならないくらい使いやすくなったと感じる。

60 世間的に四年大学は、自由だからたくさん遊ぶ時間があると思われている。しかし、大学とはどうにもならないものを自分で何とかする力を身に付ける場所である。全部自分次第でやるからこそ、真面目に取り組む学生がものすごく少ないのであろう。私も今日先生に注意されたレポートの件で、ただの独り言のレポートしか出せなかったが、最近の学生は当たり前のことができていない人が多いのだと改めて実感した。

61 世間的に四年大学は、自由だからたくさん遊ぶ時間があると思われている。しかし、大学とはどうにもならないものを自分で何とかする力を身に付ける場所である。全部自分次第でやるからこそ、真面目に取り組む学生がものすごく少ないのであろう。私も今日先生に注意されたレポートの件で、ただの独り言のレポートしか出せなかったが、最近の学生は当たり前のことができていない人が多いのだと改めて実感した。

62 今回の講義で改めて社会の情報化が進んでいると確信した。ケータイについて考えてみると、この数年でケータイの普及率が増え、昔と比べると大きさ、重さ、機能が良い方向に進み、使いやすくなっていくことがわかる。中には情報化を否定する人もいるが、私は情報化が進歩するのに悪い事はないと思うからだ。この講義で色々考えさせられることが多く、とても為になる話だった。

63 大学での学び方は自分でいかに考え結論へ導くかということだと伝わってきた。今回の講義はレポート作成に関してがほとんどで、大学では高額な授業料を払っている分、それに見合った勉強をするべきだと思う。講義から何を学べるかは先生の授業内容も重要になってくるが、自分で考える姿勢と心構えが大事だと思う。どう解釈してどのような結論をだすか、これが重要だとわかってよかった。

64 3回目の社会情報の講義では、サイバー社会の問題点についてのレポートのことをやりました。サイバー社会の問題点のレポートを書くときには、多くの文献や資料などといったものを目を通していき、まとめをやらなくてはならないことが今回の社会情報学の講義で理解できました。そして、講義で勉強をしたことを理解するためには、放課後の勉強が大事であることが理解できました。

65 今日の講義を聞いて自分がどれだけ甘い考えを持っていたのかと気がきました。今迄何枚もレポートを書いてきましたがネットをそのままコピーして提出した事もありました。ばれなければ良いと思っていたのです。しかし、今回のレポートは先生がせっかく添削してくれるのでこのチャンスを逃さずちゃんとした物を提出するためにもしっかりと調べてレポートを完成させます。

66 今日はレポートの書き方について学んだ。たしかにレポートというものは自分のオリジナリティを求められるものであると思うし、コピーだけのレポートでは先生に何も伝えられないと思いました。自分でなにを学んでどうそこから答えや疑問を出すかという部分をレポートには求められるわけで、サイトの内容をコピーしたりしても良いレポートにはつながらないと思いました。

67 今日の授業を聞いて自分はまだ高校生レベルであることを改めて知れた。大学に入ってレポートをしてきたが授業で先生が言っていた悪いことを全てやったことがあるしそれですと通用するもんだと思ってました。今日の授業で普通の授業では絶対教えてくれない大学というものを教えてもらいました。自分は今まで楽な生き方をして来たんだと思いました。

68 レポートの記述法は、高校までの「調べ学習」プラス方向性、持続性と資料調査の3つが柱となり、結果、レポート作成のオリジナリティが完成することが理解した。それは、作文から論文へ変化する礎として、自分の能力や、持っているものが、ちゃんと跳ね返ってくるということだと私は考えました。たかがレポート、されどレポートだと印象しました。

69 今日の講義を聞いて学んだことは、携帯電話の普及が年を重ねていくごとに多くなり、また携帯電話の性能、量、重さなどが進化していつている。次に情報についてだが、インターネットの普及により、より多くの情報が知れる。それに伴い、人の情報を勝手に引用、詐欺などといった問題も増えている。そのような問題を今後の課題にするべきである。

70 今回の講義の内容は主にレポートの書き方についてだった。レポートを出す際には条件を全て満たしているかを確認することが必要。コピーは著作権法違反になるため、引用のルールを守る必要がある。資料調査ではなるべく多くの文献に当たり、その資料を取捨し、自分で掘り下げていかなければならない。とにかく調べる癖をつけようと思った。

71 今回の講義は、主にレポート提出するための注意事項のことについてやった。特に参考文献や資料のリストを付けたり、レポートの内容の条件に合った文章の書き方などの講義だった。私は、レポート書くのが苦手などである程度の参考になりました。引用だけでなく自分の考えを主に書いていき、次回のレポートにつなげていきたいです。

72 今回の講義は学生として当たり前に出るようになってくることが再認識した。大学はどうにもならないものを自分で何とかする力を身につける場所であるなんて考えたことがありませんでした。レポートの件なのですが、一度提出したのですが、講義でレポートの話になり、不安になったのでもう一度提出しなおしてもよろしいでしょうか。

73 今日は講義というよりも、レポートの書き方や何より大学の目的について改めて知りました。調べ学習のように調べたことを写すのではなく、テーマを決めて問題を見つけ、それについて自分の思考で書くことがレポートです。文献などで調べて、難題なものでも自分の力でなんとかすることが、本来の大学生であることを痛感しました。

74 今回の講義ではレポートについて深く述べていた。私は今までは文献をたくさん引用したレポートがかなり多くそれを提出していた。しかし、先生たちはすべてお見通しだということがわかった。授業料をドブに捨てるなんて嫌だからレポートの書き方を今からしっかりと習得し質の高いレポート提出できるようにする。

75 今回は、大学でのレポートの書き方を学んだ。一年の論述作文で学んだ引用の仕方だ。自分は、論述作文以外のレポートでは、参考文献などを作っていなかった。今回のこの講義を聞き、改めて引用の大切さを学んだ。一つひとつの、レポートをしっかりと考えて書き、質の高いレポートにしたい。

76 大学生活で一番大切な事は、授業料を無駄にせずに自分のこれからの人生にどう役立てていくかという話が出ていたが、本当にそうだった。自分の人生の為だと思えばいつか降りかかって来るのなら学べる事は出来る出来ない関わらず挑戦していく事が大切だと今日の講義を視聴して感じた。

77 大学でのレポートの書き方はまじめに書いている人もいれば、コピーアンドペーストを繰り返してやってる人達もいる。コピーアンドペーストばかりしていると、自分で文章を考える能力がつかない。他人の文章を勝手に引用すると犯罪にもなるのでコピー

アンドペーストはやめたほうがいい。

78 今日の講義はサイバー社会についての内容と、レスポンスについて先生からの大学の過ごし方、講義に対する意識を教えてもらいました。一回の講義にかかる金額が自分の想像を超えるものだったので驚きました。この講義に限らず他の講義も真面目に受けようと思っていました。

79 今日の講義ではサイバー社会についての問題だった。高齢者にはATMや機械などは若者ならばすぐに使い方を覚えられるが高齢者ならばそうはいかない。もっと高齢者でも使いやすくするために細かく機械の使い方などを書いたものとかを近くに置いてあげたほうがいいと思った。

80 今日の授業内容は予定を変更して、レポートの書き方、資料の集めかた、資料の使い方などである。また、コピーなどの無断引用などの違反レポートを提出した場合の対応などの説明でした。少し厳しいと思われると思いますが、レポートは本来そうあるべきだと考えます。

81 ただ単位を取ればいい、卒業さえできればいいということではなく、一つでも多くのものが自分に身につけられるように時間を大事に講義を受けたり、学校生活を送らなければせっかく親が働いて稼いだお金で通えるのにそれを無駄にしてはいけないということ学んだ。

82 大学は小学校や中学校や高校と違って全くわからない状態から授業がスタートするなので最初から全く興味が無いのは当たり前それを自分でどうするか大学で実際今まで自分は何やってないで座ってただけなのでこれからは自分でなんでもできるようにしたい。

83 自分はわりと「ただレポートを提出する」といった気持ちで取り組んでいたが、先生が言っていたように、興味を持ってなくて当たり前、それでも少しでもその知識を自分に吸収しようという姿勢でこれからの大学での授業・レポートに取り組んで行こうと思った。

84 レポートの奥深さを改めて知った。今まで高校のときの作文の延長のようなものだと思っていた。それとは違い、自分で考えしっかり解決しなければいけないのだと深く思った。もう一度大学で何を学びに来ているのかも考え直さないといけないと思った。

85 レポートを書くのが苦手なので、今回のレポート作成についての話は参考になった。大学でまじめにやっつてつりだったが、今日の話聞いてもう一度考え直すべきだと思った。わからないことを自分で考えることを、自分なりに頑張りたいと思う。

86 今回はレポートの諸注意がメインでした。レポートでは参考文献を載せることや引用する場合の著作権などは去年からの講義などで把握していたので当然だと思います。大学生としての学ぶ姿勢を今回の講義で改めなければならないと感じました。

87 今日はレポートの参考文献などのシビアさと今まですごく適

当だったんだなと感じました。商学部という事で意識する事が少なかったのですが、ここで改めて学び自分の意見などを自分の言葉で伝えられるように努力していこうと思いました。

88 今回の授業はレポートについてだったがこれからレポートを書く際には今日言われたことをきちんとやりたいと思う。学費をどぶに捨てるのは嫌だと思った。出来るだけ参考資料などを色々見ながらレポートをやっていきたい。

89 レポートについての話で、私は今まで先生が言っていた「調べ学習」のレポートを提出していた。今後のレポートは何が問題なのか、なぜそれが問題なのかと、ふみいった内容の大学生らしいレポートを作成したいと思った。

90 内容今日の講義の内容はほとんどはレポート課題の書き方でした。やはりせっかく高い金だして講義を受講しているので無駄にはしたくないのでレポート課題はしっかり調べて自分の考えをしっかりと書きたい。

91 正直自分のレポートはあまかったと思いました。せっかくお金はらって授業をうけているんだからもっと深く調べたりして内容の濃い、意味のあるレポートを書いていきたいと思います。

92 レポート作成について、引用や参考文献の正しい書き方。資料集め、大学での学び方を教わった。大学での講義の学び方は難しいが、自分で調べものなどをして、慣れていこうと思う。

93 授業時間1、授業外学習3というのは知らなかったです。高校とは違う授業の比率で確かに自分で学習する事に意味があるし、それが全てを総称して大学なんだなと思う。

94 大学は高校の延長線で論述などに力をいれず、専門的な分野になっていくのかと思った。思えば論述あってレポートができるので基礎からやるのは当たり前かと悟られた。

95 今日の講義のレポートの書き方のことで思ったことは、高校みたいにただ調べるだけではなくて、調べたことの原因を深く調べていくというやり方を学んで勉強になった。

96 今回の授業でレポートの書き方などいろいろ先生に指摘されたことがあるので今度からは指摘されないように頑張りたいと思いました。

97 先生のお話を聞き、自分の大学への意識を改めて考え直さなければいけないと、強く実感いたしました。ありがとうございました。

「現代社会論」

- 01 携帯だと一定の文字数を書くには授業時間内では足りないと感じるし文章の俯瞰や編集に困難を感じる。レスポンスへの応答と感想を書く時間を消費すると授業の本論の部分が限られてしまったと感じる。私は主にPCで書いたが火曜の日程が忙しかったこともあり授業時間内で書ききれなくても、その後、送信を忘れることが多かった。D館などネットに繋げる環境で授業が行われていれば、その場で送れると思う。出席していても10時までの送付を忘れてしまい欠席扱いになることが多かった。他の学生の意見を全てフィードバックしてくれる点は嬉しいが、教員は扱い方に困難を感じているようにも思う。
- 02 携帯の場合、一度紙に書いてから文字をうつるので、紙だともっとたくさんコメントを書けたと思います。ただ、メールで学生が送ることによってフィードバックし資料を配布できるので、良い点もどちらもあると思います。紙で出せば、送れていないということはないが、メールでレスポンスやレポートを提供すると非常に不安です。ただ私はこの講義は大学の理想の講義だと思います。15回一度も休まなかったのは、受けてて楽しかった、タメになると感じていたからだと思います。まだ講義に確信が持てないで行っていましたが、このままの講義で確信持ていいと思います
- 03 手書きよりも楽でした。しかし、確認メールが曖昧で、来るときと来ないときがあり、ちゃんと確認されているのかが不安です。それを確認するためにまた、メールを送り確認するのにお互い手間がかかるのは、いかがなものなのでしょうか。確認メール以外は、とてもやりやすく、画期的でした。
- 04 私はパソコンが多かったが、携帯で長いレスポンスは書きづらい。打ちづらいのもあるし、落ち着いて文を考えられない気がする。メールでレスポンスを提出するのはいいことだが、私的にはパソコンでしっかり書かせてもらいたい。
- 05 文字数が多くなってしまい、結局PCから作成する時が多かったです。携帯からだと返信が来ない為不安になる時が多々あったのでそこを改善出来れば提出方法として良いものになるのではないかと思います。
- 06 レスポンスの提出について。授業中はか終わってからか中途半端なのが良かったと思います。時間が隨機応変に使えるのでレスポンス提出についてはこのままが今後の学生も取り組みやすいと思います。
- 07 一回一回の授業でレスポンスシートを提出することによってその日の授業内容を理解することができるので、とても為になると思いました。
- 08 パスワードさえ分かればいいので講義に出ていない人も出て人にパスワードを開けば出席をとることが簡単にできてしまうと思います。
- 09 授業の進め方として、講義を受けている立場から見たらとても理解しやすいものでした。先生の授業をこれからも取りたいと感じました。
- 10 メールによる提出なのであとで送信出来るのが便利だが、

俺は講義が終わっても教室でメールをうっているので紙でもいいかなと思う。

- 11 携帯の充電が切れている時は不便だったが、それ以外は問題はなかった。携帯でレスポンスシートを提出することは良かったと思う。
- 12 おそらく授業時間の12時20分を過ぎてからレスポンスシートを送ると受信確認メールが来ない気がしました。
- 13 受信メールがこない事があつたりと不安がありましたが改善されたら近代的で面白いシステムだと思います。
- 14 メールでの提出はデータをデジタル化できるメリットはあるが、出席確認でのメリットを教えてください。
- 15 メールは今の時代はみんな使いなれてるので非常に良いと思いました。やりやすかったです。
- 16 今の若い人たちは携帯というのは日常化しているものなので手書きよりよいと思った。
- 17 返信メールをきちんと毎回返してほしいです。送れているのかわからないからです。
- 18 出席確認としては斬新で、後から考える時間も与えられたので良かったと思います。
- 19 レスポンスに対しても良い点悪い点を指摘して頂いたので、次回に活かせました。
- 20 受信確認メールが来ないと少し不安だったので絶対くるような形にしてほしい。
- 21 今までにない携帯でレポート提出なので、自分としては良かったです。
- 22 全体的に先生がとても配慮してくださっていたように思います。
- 23 携帯を使ってレスポンスを書くのはやりやすくてよかったです。
- 24 携帯によるレスポンスシートの提出はとても良かったです。
- 25 特にありません。このままでいいと思います。
- 26 とてもいいやり方であると感じました。
- 27 メールで書くのは、少し大変だった。
- 28 このやり方で続けてもいいと思います。
- 29 メールで書くのは、少し大変だった。
- 30 非常に良いと思う。

「メディアリテラシー論」

- 01 私はメールでの提出が望ましいと思っています。さらにこちらの立場から希望を伝えるとすればなるべく授業終了時には提出が終えられるように時間を長めに確保していただくか、または締め切り時刻をもっと遅くに設定する代わりに授業終了ぎりぎりまで授業を行っていただくのがより望ましいと思います。例えば授業終了後すぐアルバイト等が入っていると22時に間に合わせるのが難しく、その場合無理にでも急いで提出しなければならず、レスポンスが書き切れない可能性があるからです。

02 メリットは、レスポンスは講義を聞いていないと書けないので、講義に集中しなければならないが、ポイントを上げて書くため、文の構成力が上がる。また、素早くメモを取れるようになる。さらに、メモを取ってその時の情報に対するの考えを書くということは、講義の内容の復習にもなる。あと、次の週に、他人のレスポンスを見ることができるので、自分のなかった発想・書き方・文の構成の上手さを学べるから良い刺激になる。

03 メリット:講義終了後に感想やコメントを出されてしまうと時間内に提出しなければと焦ってしまい、きちんとまとめて書くことが、出来ないが、この講義では当日の夜 22:00 までに提出出来るというメリットがある。デメリット:授業時間内に講義の内容を把握する事が困難だった。理解する能力に対してスピードも必要だと考えさせられた講義だった。

04 他の講義と違い新鮮でした。ただ手書きより面倒くさく感じます。先生がレスポンスシートをまとめやすい。講義時間を延ばせる。等、良いこともあります。何よりも書いて提出することを文字入力して提出するのが面倒に感じました。また、それが妨げとなり、途中で書きたいこともたまに省いてしまうことがありました。

05 メールで提出できることによって、時間ないに終わらなかつたり、帰ってからから提出できるのが便利でした。全て携帯でやっていたので、デメリットは感じとれませんでした。たいていの人はメリットが多いと感じていると思います。

06 メールでレスポンスを作成するのは学生側としてはどこでも作成できとても便利でしたが、パソコンで作成している学生や講義時間以内に作成を求めると、どうしても講義に集中できなくなりがちだと思います。

07 レスポンスを授業時間中にかききれないとき、家に着くとレスポンスを忘れて提出しないことがかなりあった。締切時間をもっと長くしてほしい。携帯は楽ではあるが全員が全員楽だと感じる人はいない。

08 手書きのほうがメール送信をするのを忘れなくて済むし、手書きのほうが書きたいことをたくさん書けるので手書きのほうがいいなと思います。携帯電池ないと、メール送るの忘れちゃう…。

09 講義を的確にメモする能力、またその日の講義を振り返ることができるのでかなりメリットがあると思う。デメリットは、レスポンスシートを時間内(22:00)に送り損ねることがある。

10 携帯の電池がなくなって授業時間内に送れないことがあった。受信確認メールがこないということがあってしっかり送信できていることがわからない時があるのでそれがデメリットだと思う。

11 メールは多少手間がかかるし、出席してないのに、パスだけ聞いて出す人が出そうなので、出来れば手書きがよかった。しかし、授業中で書ききれなくても大丈夫という点はよかった。

12 メールよりは手書きの方が楽に感じた。メールはボタンで文字を選んで打つので、作成に時間がかかる。紙でやるとスラ

スラと書くことが出来るので、スムーズに提出が出来ると思う

13 授業後に書け、時間があるので、よく考えて書くことができて良い。感想などを授業中に書いて出すという講義が多く、感想にこだわると講義に集中できないようなことがあった。

14 レスポンスシートをメールでおこなうことにより授業時間内に書かなければならないというプレッシャーなどがなくなりゆっくりに考え、文を書くことができるので良いと思います。

15 メリット・デメリットというより自分はメールで送信するよりも字を書いて提出した方が良いと思う。便利だからといって携帯に依存するよりも学生は字を書くべき。

16 携帯電話で提出できることで色々な場所で作成することができるので時間が有効に使え。しかし、充電なくなったときなどは慣れていないせいか困惑する。

17 手書きのレスポンスよりも、修正がききやすく、書きやすかった。ただ、この教室だとなぜか無線 LAN が使えなかったの、パソコンが使えなかった。

18 今の世の中、携帯で出席を取ると言う事に最初は驚いた。携帯は、皆が持っているものだから、携帯での出席の取り方は良いと思った。

19 メリットはとても書きやすい、手軽でいいと思う。デメリットが、手軽なゆえに送るのを忘れやすいという点があると思う。

20 メリットは自分の都合の合う時間に書くことができることでデメリットは電波状況によって送信されていない場合があること

21 メリットは授業時間後でも夜でも提出できることである。デメリットは授業に参加していない者でも出席になること。

22 メールだと時間を充分に使って提出できるしパソコンが得意な人には良いと思うが、逆に苦手という人もいると思った。

23 授業に出席して居ない人も出席しているかのような形になってしまうことが可能なのがデメリットであると思います。

24 レスポンスを提出する際、パソコン又は携帯電話で作成することは時間内であればいつでもできることがメリット。

25 パソコンで送信した場合確認メッセージが送られていない事がある。不安になり2通以上送ってしまうことがある。

26 メリットは身近にあるものですぐに送る事ができる。デメリットは出席しなくても提出することが出来る。

27 自分の不注意でもあるが、レスポンスシートの出し忘れが何度もあったので、やはり少し不便に思った。

28 メールでレスポンスを送信すると途中で帰って後から友達に聞く人がいるからずるいと思いました。

29 メリットは、いつでもどこでも提出出来る。デメリットは、携帯を持っていない人の対応。

30 ケータイを使うことによるレスポンスシートは書くよりも楽で便利だったと思います。

31 携帯電話を使い慣れていない人にとっては少しつらい機能であったかも知れません。

32 特になし。提出期限に関しても、その日以内なら多少は大

目に見てくれたので。

- 33 講義内で書ききれなかった場合に、後で提出し忘れることが何回かありました。
- 34 携帯を使うことで、書いている内容が安っぽく見えてしまうことがありました。
- 35 デメリットはパスワードを友達から聞ければ、簡単に出席扱いにできると思う。
- 36 提出するための文章を考えると、本日の講義内容を振り返ることができる。
- 37 通常の授業よりも聞いていなくてもは書けなかったのが良いと思いました。
- 38 メールでのレスポンスは手書きよりも時間がかからなくてよかった。
- 39 家に帰ってからでも作り送る事が出来るのでいいとおもいます。
- 40 メリットは家でじっくり考えてレスポンスを書くことができる。
- 41 普段携帯を使うことが多いので、書くよりも楽に感じました。
- 42 レスポンスシートは手軽で簡単に記述できる事は良いと思う。
- 43 文章を書く機会が増えたのでこの方法はいいと思います。
- 44 メールだと書く時間が早くなるのでよいと思った。
- 45 デメリットは後回しにして送り忘れることがあった
- 46 デメリットとして出し忘れたさいの救済がない。
- 47 中間くらいに自分が今何点かを知らなかった。
- 48 授業のあとでも提出できる点は良かったです。
- 49 レスポンスシートじゃないほうが良いと思う
- 50 紙の紛失等もなくせるため良いと思う。
- 51 なるべく手書きが良かったです。
- 52 このやり方はよかったと思う
- 53 特に問題は感じなかった
- 54 手書きよりは楽

「社会情報学」

- 01 何よりやりがいを感じたのは、毎週、何人かのレスポンスに対して先生が講義のはじめに解説などをしたことだ。自分のレスポンスの内容を褒められた時などはまた来週も時間をかけ、レスポンスを作ろうと思った。メールによるレスポンス提出もとても良いシステムだと思った。講義に出席しないでパスワードを教えてもらう人たちも周りにはいたが、講義を受けずに書けるレスポンスなど、たかが知れているのでやはり同じことだとは思ふ。毎回のレスポンスは、受けた講義の内容を自分の言葉で考え、情報を咀嚼し、記憶として残す手段としても有用だと思う。
- 02 メリット最初は戸惑ったが、手書きで書くよりも楽に打てるし、授業の途中でも空いてる時間に気になった言葉などをすぐに打てるのでやり易いと思いました。メールにすることで授

業中に書かなければいけないと言う事態に陥らないので自分で考えた内容の濃いレスポンスが書けるので良いと思います。デメリット特になかったがメールを友人に送りそれを書き換えただけの提出が増えると思うし、講義に出てないのに出席したことしようとする人が増えると思う。

03 メリット携帯電話でレスポンスが書けるのは良い事だと思う。なぜなら、講義中で先生が言った内容を書く事が出来るが、自分の中で整理しきれない時がある。そのため、講義の最後に提出するよりも、具体的に書きやすいからだ。デメリット講義に出席せず、キーワードを友人に聞いて、出席していないのに出席しているように見せる人がいる。他にも、送信したにも関わらず、返信のメールが来ない事もあるので、先生に直接渡すのではなく機会なので不安になる。

04 メリット》》すぐに意見を携帯でメモできることによりITを使った授業環境を作っている。また出席の区別がすぐに分かるようになる。不正を防ぐ方法に適している。他の学生の貴重な意見を知ることが出来て勉強になる。デメリット》》先生の目を盗んでニコニコ動画を見たりするなど自分の趣味に集中に授業から離れている問題がある。また文章能力が苦手な人にとっては携帯ですぐに入力できない人もいる。平等に扱う環境になっていないこともある。

05 メリットは、用紙に感想などを書くより楽で、紙で出席をとるより確実だと思った。さらに提出時間を10時にすることで自分のペースで文章考えて打てるのが魅力的だった。デメリットは、個人的に紙を提出するよりもメールでの提出は実感がわかず、不安だった。あと提出時間が10時までなので忘れてしまいがちになる。さらに出席をしていない人が友人にレスポンスを聞いて出席したことにする人が多くなりがちなのが大きなデメリットだと思った。

06 授業が終わってからの出席と講義の内容の感想をメールで送るというレスポンスシートを使った講義も学生生活において初めてだったのでとても新鮮で便利だと思います。時代はどんどん変化して進化していくもので、ケータイが講義の中で必要になるという環境も時代が進むにつれて変わっていく風景を感じます。書くという行為からケータイを打ったり、パソコンを打ったりするのも自然な流れであってそういった時代になったんだなと感じました。

07 初回の講義でメールでレスポンスシートを提出する旨を聞いたとき、若干戸惑ったが結果的にはメールでのレスポンスシートを提出する方が良いと感じた。紙に記述する際、書き直しなどの作業を避けたいためどうしても時間がかかりがちになり文字不足になりがちだが、メールの場合その問題点が解消され効率的にレスポンスシートの作成を行うことができた。しかし、届いているかなど心配になる点を多かった。

08 メールによるレスポンスシートに提出にあたって、ほとんど問題点がなかったのですがメールの返信が来ない、無線の状態が良くないなど、講義内容には関係のないことですが多少の不安があったのでそこをなんとか対応できればいいと思いま

した。しかしレポート提出後の改善点などをメールで指示してくれたのは、再提出する側としては大変ありがたかったです。

09 メリット:講義終了後に感想やコメントを出されてしまうと時間内に提出しなければと焦ってしまい、きちんとまとめて書くことが、出来ないが、この講義では当日の夜 22:00 までに提出出来るというメリットがある。デメリット:授業時間内に講義の内容を把握する事が困難だった。理解する能力に対してスピードも必要だと考えさせられた講義だった。

10 私自身は紙に書く方がどちらかというと好きです。携帯やパソコンにばかり頼っていると漢字を覚えな、忘れがちになるからです。しかし、提出までの行動が簡単なのでレスポンスを携帯やPCで作成し送信するのは非常に便利です。他社の意見もそのまま見ることが出来るので、視野も広がると思います。

11 メリットは、出席の集計をしやすい。資源の削減。送信後、受信確認メールがすぐに来る。自分の書いた内容を提出後も、送信メールを見て確認できる。デメリットは、送信後、受信確認メールが来ないことがある。携帯の電池がないときに、送信が遅れる。

12 メリット=提出しやすく、提出するのに並ぶなどの無駄な時間がないので楽になる。デメリット=でたのに、うまく受信できてなかったら欠席になってしまう。携帯だと長い文字を打つのに向いてなく、PCだと持ってくるのにかばんが重くなる。

13 やはり授業にパソコンを持ってこれると有利だと思う。社会情報学部はパソコンを持ってこることができて少しうらやましい。家のパソコンで書くこともできるが、その場で感じたことを家で文章にすることはなかなかできないので。

14 社会情報学のアドレスとメディアリテラシー論のアドレスを携帯に登録していたら間違えてメディアリテラシー論のアドレスで打っていたことがあったのでどちらかの授業は手書きでもいいと思いました。

15 文量を気軽に増やし、意見を自由に表現できるようになったのは非常に便利。ただ、講義に出席していないのに出席しているかのように装う生徒がいる可能性が増大している感覚は否めない。

16 メリットとしては文字が綺麗で先生が並び替えるのに楽だと思われる。デメリットとしては講義中に関係ないことでパソコンなどを使っても注意されることがないということである。

17 時折自動返信がなかったのが不安になることが少なくなかった。電子メールを使う方法も良かったが、ポータルのようなwebブラウザから投稿できるようにするのも手段だと思う。

18 パソコンでの出席確認はエラーが起こることがあるため、自分がどれだけ出席しているのか確認できるようなシステム例えば大学のポータルのようなシステムがあれば安心だと思う。

19 レスポンスシートをメールでおこなうことにより授業時間内に書かなければならないというプレッシャーなどがなくなりゆっくり考え、文を書くことができるので良いと思います。

20 自分に多かったのが家に帰ってから提出しても大丈夫というゆるい縛りが逆に甘えてしまっ出し忘れるというのが数回あったのがメリットであり、デメリットでもあった

21 メリットは提出し易く、次の講義で意見を確認出来る点、改善点は特に無いが、強いて挙げるとするならば、メールを提出した後の確認メールを毎回しっかり出して欲しい。

22 メリットは普段使い慣れている携帯のメールだからつくりやすいデメリット出席していなくても後からメール送信できるのでずるいことをすることができてしまう

23 メリットレスポンスの提出を私はPCで行っていた為、書きたいことが書きやすい事デメリット授業終了後に授業を受けて無くてもレスポンスを提出出来る事

24 携帯で入力するのは慣れていたのでレスポンスが書きやすかった。また、手書きでは漢字が思い出せなくて書けないということがなく、便利ではあった。

25 メールにすることによって良い面は、授業を円滑に進められる事だと思います。ただ悪い面は、メールだと何らかの異常が起きやすい事だと思います。

26 メールによる提出のほうが手書きに比べはるかに出しやすいと思った。しかしなるべく講義時間内に出すようにしないと、忘れてしまう事もあった。

27 パスワード制だと講義に出ていなくても友人が出ていればレスポンスシートを送ることが出来るのでもう少しやり方を変えた方がいいと思った。

28 メリットはあまり感じなかったが、デメリットは個人的なことになってしまうがレスポンスを後回しにしてしまい忘れることが多々あった。

29 携帯でレスポンスシートを提出するというのは初めてだったが結構いい試みだと思った。これはこれからも続けていけばいいと思う。

30 とても楽でいいと思うが、確実に先生の手元にいつているか不安が残るのだったり、届いてなかったりするがデメリットだと思う。

31 携帯で文字打つのが慣れないので少々手間取りましたが、手書きより編集がしやすかったので内容の出来はよかったと思います。

32 携帯でレスポンスシートを提出するというのは初めてだった。ただメールが送信を失敗してる場合もあるので、配慮してほしい。

33 メールでのメリットは出したときにすぐ出せるとこだ。デメリットは内容を聞きながらメールを打つのがむずかしかった。

34 社会情報学部以外の学生はなかなかノートパソコンを持っていないので、携帯電話で200~300字の入力は辛そうだ。

35 レスポンスシートをメールで提出というより今日の授業の感想を紙に書いて授業の最後に提出したほうが良いなと感じた。

36 手書きなら時間内で出さなければいけないが、メールなら

当日中に出せばいいからゆっくりに考える事が出来るから良い。

37 漢字が簡単に出てくるので楽だが、授業中に打つことに抵抗を感じる。携帯でゲームをやっている人との区別がつかない。

38 メリットはあまり感じず確認メールがこなくてしっかり送れたのかわからないときがあったことがデメリットである。

39 デメリットと感じたのは、講義に出席してなくてもレスポンスを提出することが可能という点について感じました。

40 携帯での提出では文字数を多く書くことには向いていない。そのためパソコンでの送信のほうがすばやくできる。

41 今まで講義で携帯を使用したことがないので刺激にもなったし、新しいことに取り組んでる感じで楽しかった

42 レスポンスの管理としてはいいと思う。ただ文字化けや送信エラーなどに気を付ける必要があると思う。

43 メール機能はいいがレスポンスを書く時間がとても短く感じたのもう少し長く時間がほしかった。

44 メリットは、いつでもどこでも提出出来る。デメリットは、携帯を持っていない人の対応。

45 私は携帯で文字を打つのが遅い方なので、レスポンスの作成をするのが少し大変でした。

46 パソコンで送信しようとしているときに、回線が不安定になって焦ることがありました。

47 出し忘れたりするので出席確認の為にカードリーダー等を使うと私は嬉しいと感じた。

48 携帯で入力するのは授業時間の間に十分な時間がないと時間中に書くのはつらいです。

49 携帯で打つのが自分がどれくらいの文字数を書いているのか把握しにくいと思った。

50 メールなので学生も簡単に送信出来るし、先生側も確認しやすいから良いと思った。

51 ケータイやパソコンで送ることによって急がなくても手軽に送信することができる。

52 たまに受信完了メールが届かないことがあり、きちんと送られたか不安になった。

53 携帯でのレスポンス提出は紙の紛失などの問題も防げるのでとても良いと思う。

54 デメリットはパスワードを友達から聞ければ、簡単に出席扱いにできると思う。

55 携帯とパソコンでは勝手が違うので、携帯で200文字は厳しいと思います。

56 気軽に講義に参加しやすいと思うのでこれからも続けて欲しいと思います。

57 レスポンスは、メールではなく講義終わった後に出せばよかったと思う。

58 確実に出席とレスポンスを自分で確認できるのが良かったところです。

59 授業内に書かなくちゃ忙しくて出せない事があって何度か後悔した。

60 メリットは特にない、デメリットはやはり手書きの方がよ

かった。

61 手書きより早く書けるし長く書けるので便利だと思います。

62 提出しやすく、最近の技術をうまく使っていると感じた。

63 パソコンのメールの方が手書きより楽に書けると思う。

64 レスポンスシートは手軽で簡単に記述できる。

65 携帯で打つ方が手書きよりよかった。

66 少しやりづらい

携帯電話を利用した双方向型授業の実践(2)

—講義中の自由な発言を可能にするプロトタイプの紹介—

札幌学院大学 情報処理課

三川豊章

1. 取り組みの端緒

携帯電話を利用した双方向型システムの事例を知り「講義中にサイレントな私語」を可能にできないか、と考えた。発展的には「サイレントな議論」も期待したい。

2. 実装機能

- 2-1. 受講者がコメント(発言)を携帯電話あるいはモバイルPCより書き込む。
- 2-2. 書き込まれたコメントは即時、教室内のスクリーンに表示される(投影用PC+プロジェクタ)。
- 2-3. 講師は講師用PCよりコントロールページから表示内容等を管理する。
 - ・ 現在および過去のコメントのモニタ。
 - ・ リアルタイムな表示(自動更新)/表示させたいコメント(過去コメントも含む)の固定の切り替え
 - ・ コメント投稿の許可/停止
- 2-4. 寄せられたコメントのダウンロード(CSVファイル)。

3. 想定される講義形態・利用法

- 3-1. 自由に発言させて講義中も教員が発言内容をモニタし、必要に応じてその都度リアクション・補足等を行う。
- 3-2. 自由に発言させるが講義中は受講者へのリアクションを行わない。講義終了後、寄せられたコメント内容を吟味し、次回講義に質問への回答、必要に応じて補足資料の配布などを行う。
- 3-3. たとえば、講義中は最初の30分は講義のみとし書き込みを停止しておく、中盤30分間は講義+コメント書き込み許可タイムとし、ラスト30分は書き込みに対する補足に充てる。
- 3-4. 良いコメントは成績評価の対象とする(インセンティブ)。
- 3-5. 出席調査を兼ねる。

4. 今後の課題

- 4-1. 実施例がないので、使いやすさ(インターフェース)に工夫の余地があると思われる。
- 4-2. 複数講義、複数教員への対応(DB設計含む)。
- 4-3. 履修登録していない学生への対応(履修者リストとの照合)。
- 4-4. 出席調査として利用した場合、教室にいないでも投稿できることへの対策。

**携帯電話をお持ちの方は
ぜひ投稿してみてください。**



<http://mobileform-dev.sgu.ac.jp/msg.html>

1. 全学 FD 活動の記録

3) 第3回FD研究会

「KIT ポートフォリオシステム及び修学基礎の実務運用・成果
等について」(総合教育センターFD研修会)

(2010年3月12日)

2009年度 FD 活動記録

組 織	総合教育センター	取組番号	1/2
FD 活動の名称	KIT ポートフォリオシステム及び修学基礎の実務運用・成果等について		
開 催 日 時	2010年3月12日 14時から17時		
開 催 場 所	G館5階 特別会議室		
参 加 人 数	16名		
添付資料の有無	有 <input checked="" type="radio"/> 無 <input type="radio"/>		
概 要	<p>総合教育センターが課題としている全学共通教育および組織・改革のための懇談会の一環としておこなった。</p> <p>初年次教育の重要性について全学的な理解を拡げるために、金沢工業大学の初年次教育の統括責任者である藤本元啓先生をお招きし、全国的にも有名な金沢工業大学の初年次教育（一ポートフォリオを使った「修学基礎科目」の実際の運用と成果について）についてご講演いただいた。</p> <p>その後質疑・討論を行った。</p>		
成 果	<p>「多くの大学生にとって大学は最後の教育機会であり、大学には入学を許可した学生を社会に有為で貢献できる人物として送り出す使命がある。そのためには初年次の修学・生活指導が重要であることは自明で、学生の大学生活への適応を直接・間接的に支援し、上級学年に導かなければならない。</p> <p>そしてこのことが学生の定着率向上、退学防止策、ひいては大学の経営戦略に直結するものと確信する。その意味においても、初年次教育に携わる教員の責務は重い。」ということについて理解が深まった。</p> <p>とくに、初年次教育において、アカデミック・スキルとは区別されるスチューデント・スキルが重要であることについて理解が深まった。</p>		

※ 取り組みが複数ある場合は「取組番号」に1/1、1/2のように記入してください。

※ 提出期日 2010年5月20日（金）

※ 提出先 教務課長（内線 3210）

札幌学院大学総合教育センターFD研修会 2010.3.12
**KITポートフォリオシステム及び
 修学基礎の実務運用・成果等について**

- はじめに
 I. 初年次教育とポートフォリオ構想
 II. 修学基礎 I II III IVとポートフォリオ
 III. KITポートフォリオシステム
 IV. 河合塾の初年次教育評価項目
 V. 自己成長型教育プログラム
 おわりに



藤本 元啓
 K.I.T.
 金沢工業大学

金沢工業大学について

21年5月1日現在
 4学部14学科(学部定員1480名) 学生数 7,273名 (学部6,767名、大学院474名、他32名)

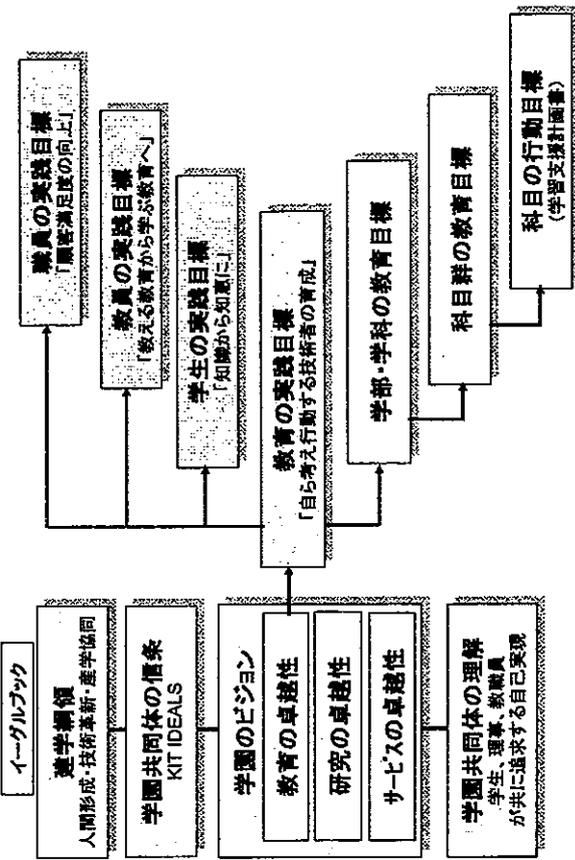
教授 214名、准教授 67名、講師 60名、助教 2名 合計 343名
 非常勤講師 41名

1. 出勤日:月曜～金曜日(大学行事の土曜日は出勤)
2. 標準勤務時間帯:8:30～17:00
3. 授業がない日も出勤 → 学生指導、自己研究
4. 他大学の非常勤兼務は禁止
5. 標準授業コマ数:1週間15コマ(1コマ45分、原則連続授業)
6. 標準業務内訳:教育50%、研究30%、学内外貢献20%
 研究者である前に教育者であれ
7. 研究費は外部資金(科研費申請の義務化)
8. 専門課程教員の約半数が企業勤務経験者
9. 新任教員は3年契約(2年目の5月に本採用審査)

教育改革の歩み

- 戦前:エリート教育
 戦後:マスプロ教育
 戦後21世紀:ユニバーサル教育
- 教職員協働による会議・委員会
- 1991年9月 最初のアメリカ大学視察 (スタンフォード・MIT・カーネギー・CALTECH・JYU大)
 - 1992年1月 「新たな教育の枠組みについて」検討する「発創会」発足
 - 1992年7月 「教育改革検討委員会」発足
 - 1994年6月 「金沢工業大学教育改革実施委員会」発足
 推進会議のもと10の小委員会
 - 1994年9～10月 米国大学(15大学)視察研修、5チーム、57名
 - 1995年4月 第一次教育改革 教育大学として再生
 - 1995～8年 米国大学(10大学)視察研修、9チーム、118名
 「新世紀の工学教育国際シンポジウム」を6回開催
 - 1997年 第一次教育改革に関する委員会
 推進会議のもと9の検討小委員会
 - 2000年4月 第二次教育改革 7学系、13学科体制
 自己点検授業の導入
 工学基礎教育センターの設置
 2001年4月 学習支援センターの設置
 2002年4月 基礎英語教育センターの設置
 2003年4月 ライティングセンターの設置
 - 2004年4月 第三次教育改革
 3学部7学系15学科体制:工科系単科大学 → 工科系総合大学
 - 2008年4月 第四次教育改革
 4学部14学科体制 工学部・環境建築学部・情報学部・バイオ化学部

目標の階層化と明確化



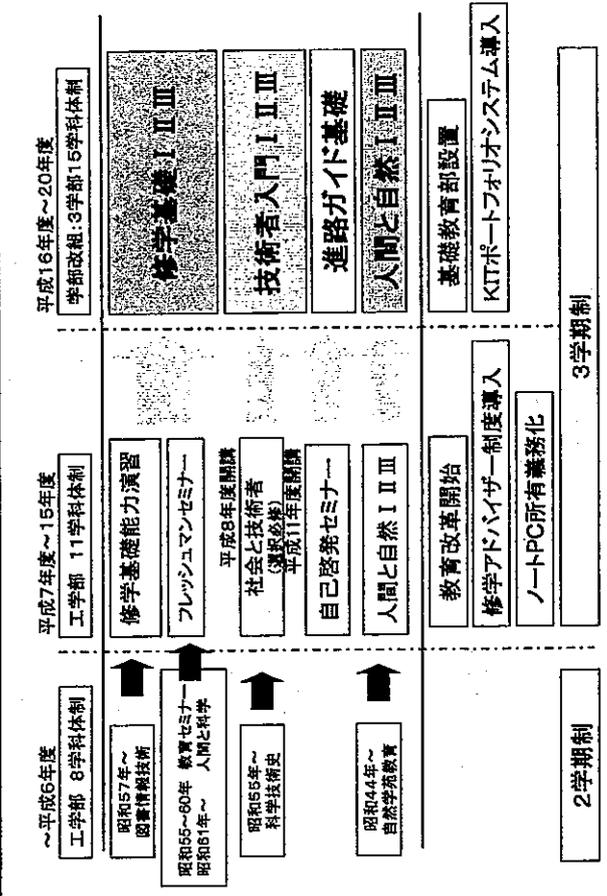
自己点検評価の仕組み

- ★ 学科・課程・個人レベル
 1. 新採用教員研修会(法人：春1日・夏2日、大学：春1日)
 2. 新採用教員FDプレゼンテーション研修会(夏4日間、日本IBM研修サービス)
 3. 学科・課程におけるFD研修会、WG活動
 4. 複数担当者科目におけるWG活動
 5. 科目別FD報告書の提出(学期別、年間総括)
- ★ 全学レベル：学内評価
 1. 教育点検評価部：科目別保存資料の提出
 - ・学習支援計画書、レポート、各種テスト等成績ランキング別サンプル、模範解答、成績表、出欠簿、配付資料
 - ・授業アンケート、フィードバックコメント(Web公開)
 - ・授業改善活動報告：科目別FD報告書(授業点検シート)→ティーチングポートフォリオ
 2. 教育フォーラム(年4~6回、全教員参加、情報の共有)
 - ・『KIT PROGRESS 工学教育研究』、その他の発表・投稿
- ★ 全学レベル：第三者評価(異なるメジャーでの評価)
 1. 教育・研究の健全性：日本技術者教育認定機構(JABEE)
 - ★ 教育プログラムの評価：4年間の教育プログラムが達成する教育成果
 - ★ 継続的な教育改善活動と機能性
 - ★ 完全な証拠主義
 - 効果：教育内容の改善PDCA(個人→組織)、積極的に取り組む学科→授業アンケート良好
 2. 機関の健全性：大学基準協会大学評価、日本高等教育評価機構
 3. 経営の健全性：日本経営品質委員会

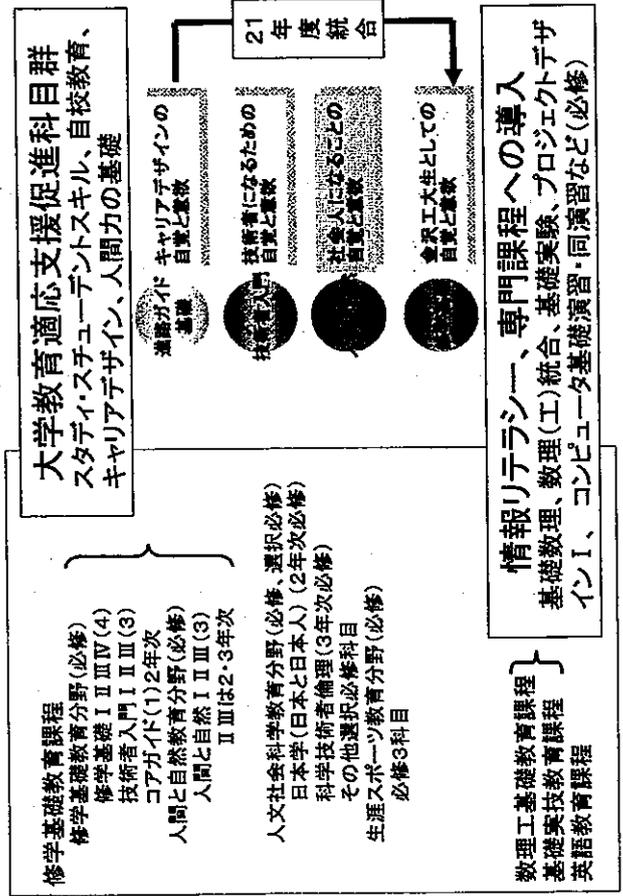
I. 初年次教育とポートフォリオ構築

1. 初年次教育の変遷
2. 基礎教育部の概要
3. ポートフォリオ導入の背景とねらい
4. 構想段階のポートフォリオ全体図
5. ポートフォリオの暫定案

1. 初年次教育の変遷



2. 基礎教育部(16年度設置)の概要(2学期制)



1. 「修学基礎 I II III IV」の概要

- 全学必修科目・共通学習支援計画画書(シラバス)**
- 1年間(春・夏・秋・冬学期各1単位)を通して修学・生活指導
 - 自己管理・自己評価(修学ポートフォリオ、キャリアポートフォリオ)
 - ★「主体性をもった人物」に育つための準備作業」: PDCAサイクル
 - 1日、1週間、1学期間、1学年
 - 修学・生活の自己管理とタイムマネジメント
 - 気づき: 何を省き、何に取り組むか
 - 年度末: 1年次の達成度評価レポート・ポートフォリオレポートの作成
 - 本学の各種授業スタイル(講義、講話聴講、演習、グループ討議、プレゼンテーション)の体験
 - キャンパスラリー、LCツアー、企画(バーベキューパーティー)、研究室調査・訪問(→履修計画)など、教室から離れた活動の体験
 - ポートフォリオ・各種レポート・小論文コンテストを通じた日本語表現方法の量的体験★ライティングセンター: 年3回のレポート添削
 - 5月と2月の全数個人面談、各学期の指定・希望個人面談
 - 1クラス40~70名、教養系教員1クラス担当、全クラス1限目開講

修学基礎 I (前学期春)★オリエンテーション週間時に学生部長講話「修学と生活」★修学生活に意欲的に取り組むために、学習スタイル学習環境を理解する

- 1回: ガイダンス、メモの取り方
- 2回: 学長講話「学生に求めるもの」
 - 課外: ライティングセンター特別講義「小論文作成の方法」
- 3回: 文章作成の方法
- 4回: グループ討議の方法
 - 課外: 個人面談(4~6週)
- 5回: グループ討議と発表 大学生生活、倫理観、その他指定テーマ
- 6回: 修学アドバイザーの自由講義・演習
- 7回: 再個人面談
- 8回: 自己点検授業、修学基礎 II ガイダンス



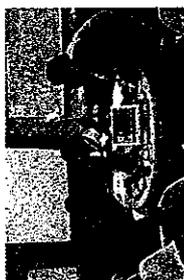
- 修学基礎 II (前学期夏)
- ★修学生生活を振り返り、今後の学習目標を明確にし、修学意欲を高める
- 1回: 進路部長講話「キャリアデザインの手引き」
 - 2回: ポートフォリオ入力の方法(修学ポートフォリオ、キャリアポートフォリオ)
 - 3回: カウンセリングセンター講話「充実した大学生生活を送るために」
 - 4回: プレゼンテーションの基本技術、グループ討議(キャリアデザイン関連テーマ)
 - 5回: 4回目の発表、パワーポイント使用
 - 6回: 修学アドバイザーの自由講義・演習
 - 7回: 後学期履修計画書の作成
 - 8回: 自己点検授業、修学基礎 III ガイダンス

夏期課題
1 週間の行動履歴
小論文コンテスト草稿

修学基礎 III (後学期秋)

★専門領域を理解し、学習計画を設計することによって、基礎領域の重要性を理解する

- 1回: 教務部長講話「後学期からの修学姿勢」
- 2回: 所属学科研究室調査、ゲストスピーカー(専門課程教員)
- 3回: 研究室に関するグループ討議①
- 4回: 研究室に関するグループ討議②・発表資料作成
- 5回: 研究室についての発表(パワーポイント使用)
- 6回: 修学アドバイザーの自由講義・演習
- 7回: 4年間の履修計画書作成
- 8回: 自己点検授業、修学基礎 IV ガイダンス



修学基礎 III 情報コンセン
橋元ケイターブル

修学基礎 IV (後学期冬)

★1年間の大学での修学生生活を反省し、2年次以降の修学意欲を高める

- 1回: 自己開発センター講話「資格取得の手引き」
- 2回: 修学アドバイザーの自由講義・演習、ゲストスピーカー(外部講師可)
- 3回: キャリアデザインシートの再検討とWEB入力
- 4回: キャリアデザインからの大学生生活に関するグループ討議
- 5回: キャリアデザインからの大学生生活に関する発表
- 6回: 個人面談(課外を含む)
- 7回: 個人面談(課外を含む)
- 8回: 自己点検授業

2. 教育目標・学生の行動目標・評価項目

教育目標	学生の行動目標	評価項目
<p>本学の学生として求められ、学習や生活に取り組む態度・姿勢</p> <p>自己実現を目的とした自主的な学習計画を設計し実行する姿勢</p> <p>活動と行動の基準や日本語表現力を身につけ実践する姿勢</p>	<p>規則正しい生活をし、授業には欠かさず出席し、提出物の締切を守るなど、積極的に学ぶ姿勢を確立できる</p> <p>グループに協力的な姿勢で臨む、提出物の締切を守るなど、学ぶための規範を確立できる</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・キャンパスラリーレポート ・図書検索シート・レポート ・予習レポート ・レポートの提出期限 ・授業への定刻出席
	<p>「1週間の行動履歴」の作成を通して自己管理能力を高め、次学期での対応を文書で報告することができる</p> <p>本科目における学生の達成すべき行動目標を自己評価できる</p> <p>研究室を調査して専攻選択の動機づけを行い、将来への展望を文書で報告することができる</p> <p>学習・生活スタイルを確認した上で学習計画を立案し、履修計画書を作成することができる</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大学で挑戦したいこと ・1週間の行動履歴 ・キャリアポートフォリオ ・各学期の達成度自己評価 ・学科研究室レポート ・年度末の達成度評価レポート ・ポートフォリオ ・後学期の履修計画
	<p>講話の内容を整理し、それに対する自己の見解を文書で作成することができる</p> <p>グループ討議を通して自己の見解と他者の見解を文書で作成することができる</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学長・学生部長・教務部長 ・進路部長講話聴講レポート ・グループ討議メモ・レポート ・プレゼンテーション

3. 修学ポートフォリオ: 1週間の行動履歴

21年度版実例

日	科目	時間	内容	達成度
1	英語	18:00-22:00	授業	○
2	英語	18:00-22:00	授業	○
3	英語	18:00-22:00	授業	○
4	英語	18:00-22:00	授業	○
5	英語	18:00-22:00	授業	○
6	英語	18:00-22:00	授業	○
7	英語	18:00-22:00	授業	○
8	英語	18:00-22:00	授業	○
9	英語	18:00-22:00	授業	○
10	英語	18:00-22:00	授業	○
11	英語	18:00-22:00	授業	○
12	英語	18:00-22:00	授業	○

① 今週の優先順位と達成度 ② 出席遅刻...科目名、理由
 ③ 学習...科目名、資格名、時間数
 ④ 課外活動...教育施設、クラブ活動、アルバイト、時間数
 ⑤ 健康管理...朝昼夜の食事摂取、睡眠時間、積極的な運動時間
 ⑥ 1週間が満足したこと、努力したこと、反省点、日常生活で困ったこと

教員のコメント欄
 教員コメントを確認し、各自で入力

修学生活からの
 モチベーション

4. 修学ポートフォリオ: 前学期春の達成度自己評価

- 下記「修学基礎 I」①~⑥の「学生の行動目標」の達成度(0%、20%、40%、60%、80%、100%)を選択し、その理由を各項目100文字程度で入力しなさい。
 - 「1週間の行動履歴」の作成を通して自己管理能力を高め、次学期での対応を文章で報告することができる。(%)
 - 講話の内容を整理し、それに対する自己の見解を文章で作成することができる。(%)
 - グループ討議を通して問題点を見出し、自己の見解を口頭および文章で表現することができる。(%)
 - 学習・生活スタイルを認識した上で学習計画を立案し、履修計画書を作成することができる。(%)
 - 規則正しい生活をし、授業には欠かさず出席し、提出物の締切を守るなど積極的に学ぶ姿勢を確立できる。(%)
 - 本科目における学生の達成すべき行動目標を自己評価できる (%)
- 前学期春の全履修科目の修学状況(成績・課題提出・出席など)について満足していること、感想、反省やその改善方法について、300文字程度で入力しなさい。
- 前学期春の日常生活状況全般(課外活動・アルバイト・病氣・病後など)について満足していること、感想、反省やその改善方法について、300文字程度で入力しなさい。

学生コメントと教員のフィードバックコメントの実例

コミュニケーションインングのスケッチに時間がとれなかったけど、計画的に課題ができたので、よかったと思う。英語のホームワークや修学基礎の提出物を家に忘れてきたりなど、忘れ物が多かったから、その点をもっとしつかりすればよかったと思う。
 ★夜遅くなる時は、気をつけて下さい。忘れ物をすると、かえって面倒になりますので気を付けてください。

英語が苦手なので、英語を中心に勉強した。英語の小テストをいい点とれるように頑張った。英語以外はほとんど勉強できなかった。技術入門 I の予習をすることができ、だんだん授業の予習ができるようになってきたが復習がほとんどといていいほどできなかった。
 ★昔手を克服するために、小さな「成功」を積み重ねていくことが大切です。少しずつでもよいので工夫することを忘れないようにしてください。

穴水研修はけっこう楽しかったが、レポートや課題がたくさんあったので、2日目の夜はみんなが寝た後一人でパソコンでレポートを書いた。そのおかげでかなりレポートが作成できたが、家でしかできない課題もあるので、すごく憂鬱な気分になった。

★穴水の研修、お疲れ様でした。楽しく充実した活動に参加できたようで何よりでした。課題については、行事が予定されている場合など、なかなか調整が難しいとは思いますが、くれぐれも体調には十分注意しながら、計画を立てて早めに取りかかるといいと思います。

- ★何かひとつでも褒めること
- ★相談にのること、例えば、「授業後、残ってください」
- ★「課題・勉強できなかった」に対して、非難は慎み、原因を考えさせるコメント

5. キャリアポートフォリオ: 進路ガイド基礎 → 修学基礎(21年度)

キャリアポートフォリオの自己分析シート

高専までの自己史

大学卒業後のキャリア像

在学中の取り組み

自分の特性と目標

将来

現在

過去

自己分析・自己認識

6. 達成度評価ポートフォリオ 1～3年次生の学年末に作成 → 新年度の数人面談資料

- ①今年度の目標(50文字)と達成度自己評価(200文字)
- ②今年度の修学・生活状況の反省(100文字)、およびその改善方法(200文字)
(出欠、成績、課題提出・各種教育センター利用、課外活動、健康、アルバイトなど)
- ③希望進路(100文字)とその実現に向けて実際にとった行動・成果・展望(200文字)
(自学自習、資格挑戦・取得、インターンシップ、研究室選択など)
- ④「KIT人間力＝社会に適合できる能力」に示された5つの能力の達成度自己評価(各100文字)
(「自律と自立」「リーダーシップ」「コミュニケーション能力」「プレゼンテーション能力」「コラボレーション能力」の各項目について、具体的な達成度自己評価)
- ⑤次年度(50文字)とこれを達成するための行動予定(200文字)
(各学年設問項目が異なる)

7. 修学基礎 I II III IVとポートフォリオに対する 学生の声と授業アンケート

自分の行動を振り返り、次の学年での目標を明確にする手助けになったように思う。また、高校まではあまり文章を書くことがなかったが、文章を多く書く練習にもなったと思う。

毎年の進路について自分の行動やその時の進路に関する考え方を振り返ることができるとよかった。また、考えるだけでは忘れてしまいがちだが、それを記入して保存することができるため、過去と現在の進路に関する考え方を比較することができるので、さらに考えが深まったよと思う。

他のレポート課題と同じように、文章を考える訓練にはなった。実際、各学期の回顧と展望を比べてみると、学期が進むごとに文字数が増えている。加えて、反省と改善の提示の訓練でもあった。達成度ポートフォリオは提出課題であるため、強制的に反省と改善の提示を捻り出さなければいけない。つまり、考えずには先に進めないのである。これが1年間続くことによって習慣になる。これは周りの友人との会話からも伺える。例えば学期終了時に感想を求めると、なぜか反省とその改善点が示される。これは私にも当てはまることで、ポートフォリオの威力を実感する体験であった。

高校時代と比べて自学自習は身に付きましたか

	十分身に付いた	やや身に付いた	あまり身に付かなかった	全く身に付かなかった	回答数
16年1期	12.7%	67.2%	17.5%	2.6%	1,404
2期	9.4%	59.9%	25.6%	5.0%	1,156
3期	19.4%	60.6%	15.1%	5.0%	1,007
17年1期	26.8%	58.4%	11.9%	3.0%	1,341
2期	15.5%	65.9%	16.3%	2.3%	1,321
3期	24.4%	61.6%	11.7%	2.3%	1,141
18年1期	23.6%	60.6%	13.5%	2.3%	1,528
2期	15.4%	61.5%	20.3%	2.8%	1,301
3期	23.0%	63.6%	10.7%	2.6%	1,284
19年1期	24.2%	61.3%	12.2%	2.3%	1,133
2期	14.9%	67.2%	15.4%	2.5%	1,114
3期	29.4%	60.2%	9.3%	1.1%	944
20年1期	26.6%	61.2%	10.2%	2.0%	1,209
2期	15.1%	59.0%	22.8%	3.1%	1,152
3期	24.5%	64.6%	9.0%	1.9%	986
21年前学期	21.9%	62.7%	8.0%	2.6%	1,057

教員の熱意を感じ取ることができましたか。

	感じ取れた	まあ感じ取れた	あまり感じ取れなかった	感じ取れなかった	回答数
17年1期	52.2%	40.4%	4.9%	2.5%	1,341
2期	51.1%	42.8%	4.0%	2.1%	1,321
3期	56.1%	37.8%	4.2%	1.9%	1,141
18年1期	54.0%	41.5%	3.2%	1.3%	1,528
2期	53.2%	40.4%	4.5%	1.9%	1,301
3期	58.0%	37.8%	3.1%	1.1%	1,284
19年1期	58.5%	38.0%	2.7%	0.8%	1,133
2期	58.4%	39.4%	1.6%	0.6%	1,114
3期	66.6%	30.6%	2.6%	0.2%	944
20年1期	62.9%	33.3%	2.6%	1.2%	1,209
2期	60.0%	35.7%	3.5%	0.8%	1,152
3期	63.3%	34.0%	2.0%	0.7%	986
21年前学期	54.9%	39.9%	3.8%	1.4%	1,178
21年前学期夏	55.9%	39.6%	3.3%	1.2%	1,067

「行動履歴」や「達成度自己評価」は自分を見つめ直し自己評価を行うものですが、あなたにとってこの作成は有益と考えますか。

	大変有益	有益	肯定率	回答数
16年2期	6.2%	58.7%	64.9%	1,156
3期	9.3%	68.5%	77.8%	1,007
17年1期	19.0%	71.7%	90.7%	1,341
2期	16.0%	70.3%	86.3%	1,321
3期	18.0%	69.4%	87.4%	1,141
18年1期	17.7%	72.4%	90.1%	1,528
2期	13.7%	64.5%	78.2%	1,301
3期	20.7%	68.1%	88.8%	1,284
19年1期	24.1%	70.1%	94.2%	1,133
2期	16.7%	71.5%	88.2%	1,114
3期	23.7%	68.5%	92.2%	944
20年1期	23.6%	70.1%	93.7%	1,209
2期	18.9%	70.7%	89.6%	1,152
3期	26.6%	66.1%	92.7%	986
21年前学期	19.8%	71.4%	91.2%	1,055

Ⅲ. KITポートフォリオシステム

1. KITポートフォリオシステムの概要
2. 自己評価レポートポートフォリオ
3. プロジェクトデザインIIポートフォリオ
4. プロジェクトデザインIIIポートフォリオ
5. ポートフォリオ関連図
6. 第二学簿としてのポートフォリオ

8. 「修学基礎 I II III IV」WGの活動

1. WG…各学期の授業アンケート集計結果報告
2. 担当教員…1をともに各学期の授業点検シート(FD報告書)をWGIに提出
18年度までの報告書の概要

WGメンバー

- ① 学生の行動目標の達成度
- ② 授業での工夫・問題点・改善点
- ③ 学生の自由記述(要望・苦情)
- ④ 上記③に対する回答
- ⑤ 成績評価の割合(評価値・人数・割合)

19年度からの報告書の概要 ★20年度から「授業点検シート」(全科目共通)

- ① 学生アンケート結果に対する自己評価、授業分析と改善について
- ② 前学期の授業を分析し、本授業において改善した点などPDCA項目
- ③ 前学期からの変更点の評価と次学期に対する授業全般にわたっての改善案のまとめ

3. WG…FD報告書の検討、問題点の抽出 → 科目担当責任者に報告、討議
→ 次年度指導書(マニュアル)、学習支援計画書(シラバス)の作成
4. 担当教員会議…次年度の改善事項の決定と運営方法(課題の統一、採点基準等)の共有化
5. 基礎教育部長・教育点検評価委員会に報告

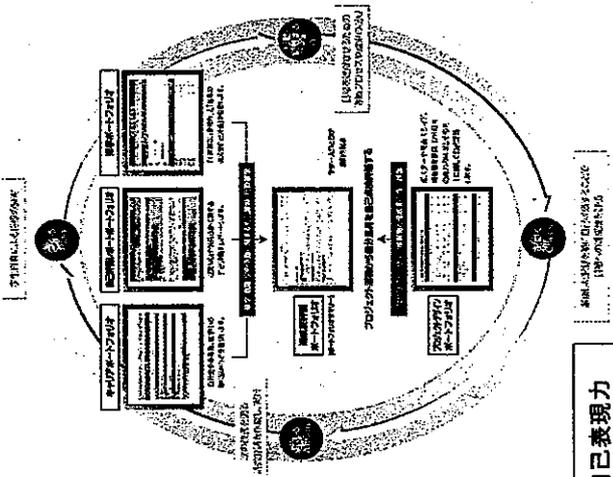
1. KITポートフォリオシステムの概要

学生一人ひとりのポートフォリオ情報を記録・蓄積して、大学生生活における向上過程を顧み、将来への展望を構築する、下記ポートフォリオの集合体

- ① 自学自習の姿勢を身につける
- ② 生活スタイルを確立する
- ③ 自己の目的指向を高める

修学ポートフォリオ
キャリアポートフォリオ
自己評価レポートポートフォリオ
修学基礎科目・専門科目及び課外活動における自己評価
プロジェクトデザインIIポートフォリオ
プロジェクトデザインIIIにおける成果物と自己評価
プロジェクトデザインIIIにおける活動記録と指導記録
達成度評価レポートフォリオ

自己の活動とその評価を整理し分析する→自己表現力



2. 自己評価レポートポートフォリオ

1~4年次: 授業科目・課外学習・クラブ・プロジェクト活動etc

人間と自然 I	人間と自然 II	人間と自然 III	人間と自然 IV	人間と自然 V	人間と自然 VI	人間と自然 VII	人間と自然 VIII	人間と自然 IX	人間と自然 X	人間と自然 XI	人間と自然 XII	人間と自然 XIII	人間と自然 XIV	人間と自然 XV	人間と自然 XVI	人間と自然 XVII	人間と自然 XVIII	人間と自然 XIX	人間と自然 XX
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20

3. プロジェクトデザインIIポートフォリオ

3/28(土) 09:31

入力項目

① ポスター

② 最終設計報告書

③ 最終口頭発表スライド

④ 能力状況とその向上に関する自己診断

1. 英社会で活躍できる能力に属するもの

A1 英語の読み書き能力

A2 英語の聴き取り能力

A3 英語の話し能力

A4 英語の読解能力

B1 明確な目的意識を持って行動すること

B2 責任を持って行動すること

B3 自己管理能力を高めること

B4 自己責任を持って行動すること

B5 自己責任を持って行動すること

B6 自己責任を持って行動すること

B7 自己責任を持って行動すること

B8 自己責任を持って行動すること

B9 自己責任を持って行動すること

B10 自己責任を持って行動すること

B11 自己責任を持って行動すること

B12 自己責任を持って行動すること

B13 自己責任を持って行動すること

B14 自己責任を持って行動すること

B15 自己責任を持って行動すること

B16 自己責任を持って行動すること

B17 自己責任を持って行動すること

B18 自己責任を持って行動すること

B19 自己責任を持って行動すること

B20 自己責任を持って行動すること

4. プロジェクトデザインIIIポートフォリオ(他大学の卒業研究)

活動状況: 内容、時間 (日報、週報)

教員指導内容

教員管理メモ

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

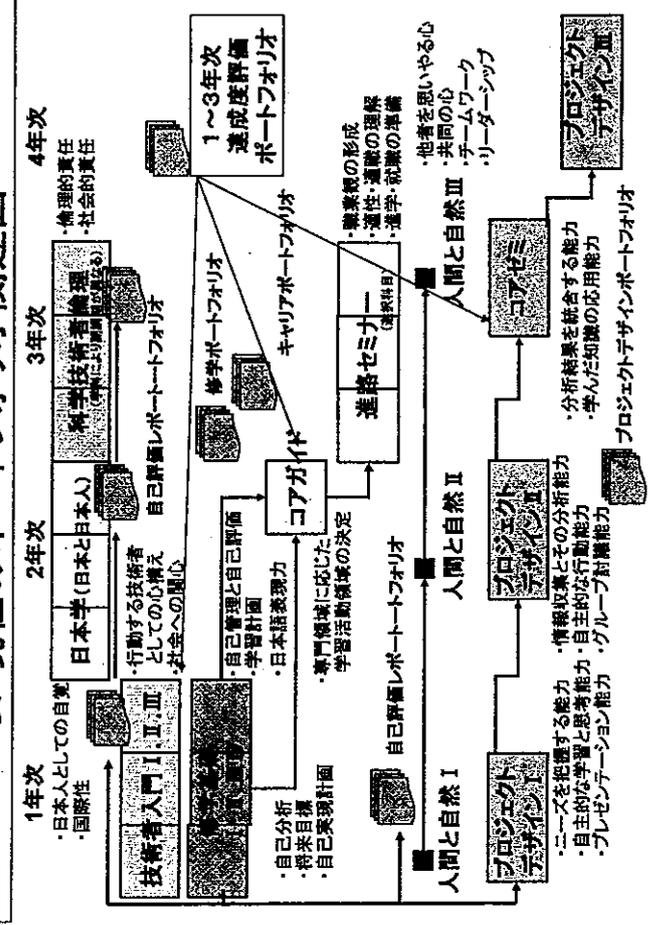
17

18

19

20

5. 現在のポートフォリオ関連図



6. 第二学籍簿としてのポートフォリオ

18年度特色GP選定プログラム

期待される効果 → 達成されつつある効果

1. 修学・生活の自己管理と分析(自立と自律への第一歩)
2. 次年度の目標と行動設定(キャリアデザイン)
3. 修学アドバイザーによる迅速な修学指導
4. 自己評価の文章化による自己表現力
5. 保護者会(全国53会場)個別懇談手元資料
6. 実在修学モデルの提示(大学HP、入学案内など)

予想外の効果

1. 進級した学生も1年次修学アドバイザーに報告や相談
 - ・1年生と上級生のコミュニケーション醸成
 - ・一部で上級生が1年生を指導する「勉強会」の発足
2. 上級生が修学上の相談にのる「?相談コーナー」の設置要求と実施
3. 学生がオープンキャンパス、保護者会のミニ講演などでデータ公開

1. 河合塾の評価項目 学生の変容を促す取り組み

1. 初年次ゼミにおいて学生に問題を投げかけ考えさせる仕組み
 - ・大学生生活、倫理観、キャリアデザイン、所属学科研究室調査、その他指定テーマに関するレポートおよびグループ討議、小論文コンテスト
 2. グループワークを通じてコラボレーション能力、コミュニケーション能力を高める仕組み
 - ・上記1)に関するグループ討議(正課・課外)とプレゼンテーション
 - ・1年間365日、24時間開放の自習室の設置
 3. 初年次ゼミの内容以外に「学生を変容させる」仕組み
 - ・「人間と自然I」(1年次必修)2泊3日の研修合宿
 - ・課外学習プログラム(各種教育センター)
 - ・各種プロジェクト(夢考房、建築系「あかり」、地域連携、インターンシップなど)
 - ・KITスタッフ(職員との協働)
 - ・出身高校での講演会講師
- ★2年次以上
- ・2年生以上にオープンキャンパス、保護者会でのミニ講演
 - ・3年生以上にSA、大学院生TA
 - ・卒業研究発表会は市民・企業に公開

IV. 河合塾の初年次教育評価項目

1. 学生の変容を促す取り組み
2. 学生の自律・自立化を促す取り組み
3. 初年次教育の一定水準以上を担保する取り組み
4. 金沢工業大学初年次教育の特徴

2. 河合塾の評価項目 学生の自律・自立化を促す取り組み

1. 振り返りシート(ポートフォリオ)での自己評価
 - ・KITポートフォリオシステム
 - (「1週間の行動履歴」「各学期の達成度自己評価」「1年次の達成度評価」、「キャリアポートフォリオ」など)
2. 次の目標設定をさせる仕組み
 - ・「1週間の行動履歴」の今週の優先順位事項
 - ・「キャリアポートフォリオ」の在学中の取り組み、卒業後のキャリア像
 - ・「1年次の達成度自己評価」の次年度の目標と行動予定
3. 教員が学生とやり取りをし、その達成度をチェックする仕組み
 - ・「1週間の行動履歴」への教員コメント記述(年間30回)
 - ・前学期開始時期と年度末の全数個人面談
 - ・学期途中と後学期開始時の指名・希望者個人面談

3. 河合塾の評価項目 初年次教育の一定水準以上を担保する取り組み

1. マニュアル・ガイドライン
 - ・毎年WGが毎年作成し、検討会・説明会を実施
2. 共通テキスト
 - ・毎年WGがテキストとワークシートブックを毎年作成
3. FD制度
 - ・担当教員は「修学基礎 I ~ IV」の自己点検シートの作成(年4回)
 - ・WGは自己点検シートをもとに問題点の整理・検討・報告
 - ・年2回、担当教員によるワークショップ・FD研修会
 - ・教育点検評価部にFD結果報告
4. 新任教員研修(法人研修、教学研究は別途)
 - ・着任前に説明会
 - ・ベテラン教員が副担当として授業に参加し補佐
 - ・7月に日本IBMの研修4日間(主にプレゼンテーション)
5. 全学動員体制
 - ・修学基礎教育課程教員が主担当
 - ・専門課程教員の協力(ゲストスピーカー)

4. 金沢工業大学初年次教育の特徴

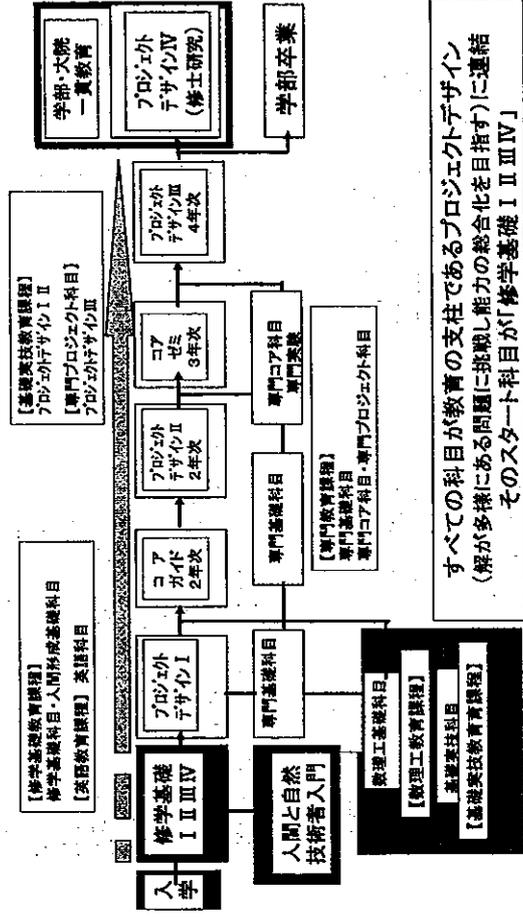
1. 学習内容と評価基準の統一、全学共通プログラム
2. 体験型授業、自己表現による自己分析
3. グループ活動とプレゼンテーションの多用
4. eポートフォリオの活用、学生との往復作業
5. 1授業ごとの課題
6. 専門課程教員の協力とSAの活用
7. 複数科目での構成、2年次以降につなげる仕組み
8. WGと教育点検評価部、ティーチングポートフォリオ
9. 担当教員の熱意と協働

組織的取り組み、1年ごとの見直し作業
初年次教育科目を単発科目としない仕組み
学生は初年次教育の成果をモチベーションとして進級

V. 自己成長型教育プログラム KIT ACROKNOWL PROGRAM

1. 初年次教育とプロジェクトデザイン教育
2. 教育・評価システム
3. 総合力(学力×人間力)評価 CLIP
4. 授業アンケート(Web公開)
5. 修学支援施設
6. プロジェクトデザイン I II III の発表会
7. ACROKNOWL PROGRAM

1. 初年次教育とプロジェクトデザイン教育



すべての科目が教育の支柱であるプロジェクトデザイン
(解が多様にある問題に挑戦し能力の総合化を目指す)に連結
そのスタート科目が「修学基礎 I II III IV」

2. 教育・評価システム

学習支援計画画書の内容

1. 授業科目の学習教育目標
2. 授業の概要・学習上の助言
3. 教科書・参考書
4. 履修に必要な予備知識
5. 学生が達成すべき行動目標
6. 「〇〇することができる」
7. 達成度評価(評価方法・指標と評価割合)
8. 評価の要点
9. 具体的な達成の目安
9. 授業明細表(1授業毎:学習内容・授業の運営方法・学習課題)

- ★ 17年度より定期試験の廃止 結果重視型 → プロセス重視型
- ★ 多様な評価項目と評価の内容・基準の提示
- ★ 達成度確認試験 → 全評価数値の40%以内
- ★ 提出物のコメント付き返却
- ★ 成績異議申し立て制度

4. 授業アンケート(Web公開)

学生・教員ともに自己点検

- ・学生の行動目標達成度自己評価
- ・教員の授業運営や教育力についての意見、不満、改善要求
- ・該当科目で良かった点
- ・その他、科目HPIによる独自のアンケート
- ・授業アンケート結果、フィードバックコメントシステム

アンケート回答の励みはあります。ご意見をお聞かせください。

アンケートの回答は、授業改善に活用させていただきます。

① クラスの雰囲気や授業内容について

② 授業の進め方やスピードについて

③ 授業の理解度や満足度について

④ 授業の改善点について

⑤ その他、ご意見をお聞かせください。

※ アンケートの結果は、授業改善に活用させていただきます。

※ アンケートの結果は、授業改善に活用させていただきます。

※ アンケートの結果は、授業改善に活用させていただきます。

学生の目標

学年	目標
1年	基礎知識の習得、学習習慣の確立
2年	専門知識の習得、実践力の向上
3年	高度な専門知識の習得、研究能力の向上
4年	卒業論文の作成、就職活動の準備

3. 総合力(学力×人間力)評価 CLIP

Creative Learning Initiative Process

手段 ← →

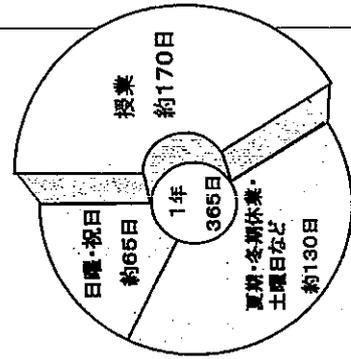
科目名	試験	小テスト	レポート	作品	成果発表(口頭・実技)	ポर्टフォリオ	その他	合計
	30	10	20	30	10	10		100

能力	10	10						20
知識を取り込む力	10	10						20
思考・推論・創造力	20		20					40
コラボレーション・リーダーシップ				15				15
発表・表現・伝達力				15				15
学習姿勢・意欲						10		10

5. 修学支援施設

授業時間外に学生自らが学べる仕掛け(教育環境)

- ・ KITインターネットサービス: 学生全員がノート型パソコン所持 (情報コンセン 学内7,000箇所、学生アパート3,500箇所)
- ・ 夢考房(自由工作空間)
- ・ 実験考房(基礎実験・専門実験室)
- ・ マルチメディア考房(自由創作室)
- ・ ライブラリーセンター(図書館)
- ・ 自習室(220席、24時間、365日オープン、情報コンセン・プリンター完備)
- ・ 数理工学教育センター(教・理 補完教育)
- ・ 学習支援デスク(専門基礎 補完教育)
- ・ 基礎英語教育センター(補完教育)
- ・ ライティングセンター(文章添削)
- ・ 自己開発センター(資格指導)
- ・ 六水湾自然学苑・池の平セミナーハウス(人間形成)





コース制学習と各種教育センター

- ★達成度別クラス編成
数理(工)統合:2コース、英語:3コース
★均一レベルの授業こそ学生の不利益
- ★学生の学習支援機能
・教理工基礎教育センター
入学前教育、個人・グループ対象補習、学習診断、特別講座、教材・学習支援プログラム開発、
- ・基礎英語教育センター、ラーニングコーナー
個人指導、TOEIC特別講座、
ネイティブスピーカー、
- ・ライティングセンター
共通レポート添削指導(1年次3回)、文章作成
特別講座、エントリースシート作成指導
- ・学習支援デスク(専門基礎教育部)
専門基礎科目の個別学習支援



<p>LEARNING CENTER</p> <p>LEARNING CENTER</p> <p>LEARNING CENTER</p>	<p>LEARNING CENTER</p> <p>LEARNING CENTER</p> <p>LEARNING CENTER</p>
--	--

学習支援記録書
(学生指導カルテ)

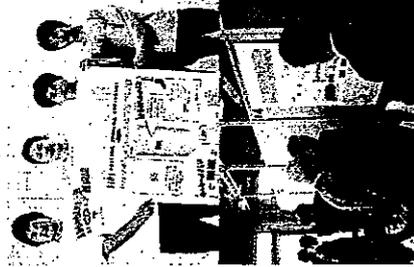
6. プロジェクトデザイン I II III の発表会

PD I : 1年生
Planning : 計画



クラス公開の
プレゼンテーション

PD II : 2年生
P+Doing : 設計・製作



学科公開の
プレゼンテーション

PD III : 4年生
P+D+Check : 分析・評価

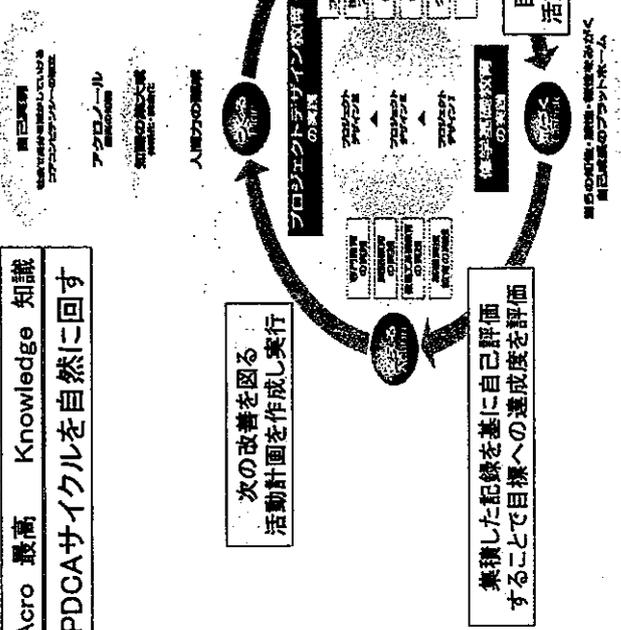


企業人を含めた学外公開の
プレゼンテーション

各学年・各学期に複数のプレゼンテーション必修科目の配当

7. ACROKNOWL PROGRAM

Acro 最高 Knowledge 知識
PDCAサイクルを自然に回す



おわりに

1. 修学履歴情報システム
2. 平成13～20年度の留年・退学・休学
3. 平成13～20年度の教育センター等利用者数
および学長褒賞受賞者数
4. 平成13～20年度の
QPA: Quality Point Average

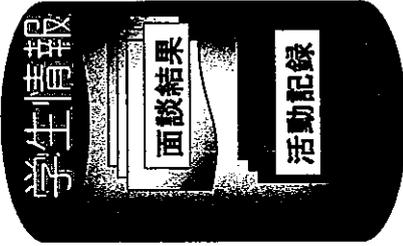
修学履歴情報システム面談結果入力画面

個人面談

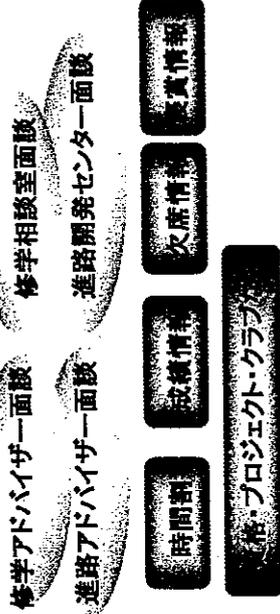
- ・1年次①入学直後、年度末・・・全数面談
②前学期末・・・教員指名學生、希望者
③後学期オリエンテーション・・・指導対象學生
 - ・2～4年次①4月～5月、全数面談
②後学期オリエンテーション・・・指導対象學生
- 保護者面談: 保護者会総会、地区交流会 (全国53会場)
 修学相談室面談: 全學生対象 (随時)

1. 修学履歴情報システム

教職員作成の
第一学籍簿



データ入力



- 時間割
- 成績情報
- 出席情報
- 学費情報
- 学務・プロジェクト・クラブ

登録情報は、学生の基本情報をはじめ、面談内容、学生個人々の時間割、授業出席情報、修学指導情報、進路指導情報、褒賞情報、成績情報(単位修得状況、成績を点数化したQPA、未修得科目と対応科目)、資格取得情報、プロジェクト情報、奨学金情報、クラブ情報、学生スタッフ(学内勤務)情報等。

2. 平成13～20年度の留年・退学・休学

年度	学生数	留年数	留年率	退学数	退学率	休学数	休学率
H13	7011	332	4.74%	248	3.54%		
H14	7295	226	3.10%	250	3.43%		
H15	7513	185	2.46%	282	3.75%		
1H6	6851	433	6.32%	233	3.40%	188	2.74%
H17	6824	483	7.08%	257	3.77%	205	3.00%
H18	6892	517	7.50%	249	3.61%	228	3.31%
H19	6809	428	6.29%	225	3.30%	274	4.02%
H20	6903	351	5.08%	182	2.64%	188	2.72%

(平成21年5月1日現在)

3. 平成13～20年度の教育センター等利用者数 および学長褒賞受賞者数

	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20
学部学生数	7513	7295	7011	6851	6824	6892	6809	6903
数理工教育 研究センター	12163	14181	14456	13579	14772	15784	15765	14593
夢考房 26 ものづくり	18290	21220	31330	45864	47333	53233	55568	55382
夢考房 41 プロジェクト	40327	41940	43842	46203	47597	51070	52270	55389
学長褒賞	2984	3847	4332	5423	6694	7864	9053	7079

数理工教育センター・夢考房26・夢考房 41:利用者延人数
学長褒賞:受賞者延人数(20年度より受賞条件変更)

53

大学教職員が共通に認識・理解すべき現状

多様化する学生

1. 基礎を嫌う、マニュアル主義 ⇨ 過程軽視、結果重視
2. 大学進学のための目的 ⇨ 学ぶ意欲、自学自習姿勢の欠如
3. ストレスコントロール、社会常識の欠如

★指示待ち症候群、自律と自立の未成熟

★保護者の家庭教育と消費者意識

大学を取り巻く環境

1. 大学 ⇨ 全入時代、多様な入試形態、大学間格差、
2. 中教審答申案 ⇨ 大学教育の実質化、出入口の管理
3. 就職募集の早期化 ⇨ 人間力、社会人基礎力、
就職基礎能力

55

4. 平成13～20年度のQPA:Quality Point Average

QPA=(評価ポイント×単位数)÷(履修科目の総単位数)

評価ポイント:S(4)・A(3)・B(2)・C(1)・D(0)

	1年次	2年次	3年次	4年次
13年度入学	2.19	↘ 2.09	2.17	2.30
14年度入学	2.18	↘ 2.14	2.21	2.34
15年度入学	2.31	↘ 2.23	2.26	2.36
16年度入学	2.24	↗ 2.30	2.43	2.48
17年度入学	2.35	↗ 2.39	2.44	2.50
18年度入学	2.33	↗ 2.38	2.47	
19年度入学	2.33	↗ 2.40		
20年度入学	2.29			

★数値は各年次末までの累計平均値

54

多くの学生にとって大学は最後の教育機会の場であり、
大学には入学を許可した学生を社会に有為で貢献できる
人物として送り出す使命がある。そのためには初年次の修
学・生活指導が重要であることは自明で、学生の大学生活
への適応を直接・間接的に支援し、上級学年に導かなけれ
ばならない。

そしてこのことが、学生の定着率向上、退学防止策、ひ
いては大学の経営戦略に直結するものと確信する。その
意味においても、初年次教育に携わる教員の責務は重い。

(「藤本・金沢工業大学における初年次教育の展開」[「工学教育」57-1, 2009年])

すべては学生のために

ご静聴ありがとうございました

fujimoto@neptune.kanazawa-it.ac.jp

K.I.T.
金沢工業大学

56

2. 学部学科の取り組み

1) 経営学部

経営学科

会計ファイナンス学科

2009年度 FD 活動記録

組 織	経営学部(経営学科, 会計ファイナ ンス学科)	取組番号	1 / 2
FD 活動の名称	学生を交えての FD フォーラム		
開 催 日 時	2009年 12月 17日		
開 催 場 所	本学 3310 会議室(学部教授会にて実施)		
参 加 人 数	教員 20 人、経営学部学生 4 人		
添付資料の有無	有 無		
概 要	<p>全教員の参加のもとで実施する為、教授会の開催前に実施した。経営学部自治会の執行委員を中心とする学生代表 4 名を招き、経営学部のカリキュラム、初年次教育、教授法についての学生からの要望を聴取した。その後、カリキュラムの趣旨や基礎科目の教授法など議論した。</p>		
成 果	<p>参加学生は経営学部自治会に所属しており、事前に学部の多くの学生から学部教育に対する意見を集めていた。履修単位上限や履修可能な全学共通科目の制約、経営学入門における教授法など、学生からの様々な意見・要望が寄せられた。教員との間で活発な議論が行われ、学部特有の制度について、その理由や目的などが話され、相互理解を進めることができた。</p>		

※ 取り組みが複数ある場合は「取組番号」に1/1、1/2のように記入してください。

※ 提出期日 2010年5月20日(金)

※ 提出先 教務課長(内線 3210)

2009年度 FD 活動記録

組 織	経営学部(経営学科, 会計ファイナ ンス学科)	取組番号	2 / 2
FD 活動の名称	FD フォーラムの結果に基づく, 学部 FD 研究会		
開 催 日 時	2010年2月18日		
開 催 場 所	本学 3310 会議室(学部定例研究会として実施)		
参 加 人 数	15人		
添付資料の有無	存 無		
概 要	<p>前期に実施した FD フォーラムの検討結果に基づき, 教員間での FD 推進の為の討議を行った。グループに分かれ, 経営学部学生の実態やその学生に合わせた教授法など, ブレーンストーミングを行い, 教務委員長を中心に, その結果を取りまとめた。</p>		
成 果	<p>参加者数が前回 FD フォーラムのときより少ないという課題を残したが, 参加者間で活発な討議がなされた。特に, 議論の活性化, 効率化を図る為に教務委員長を中心にブレーンストーミングの手法がとられ, 学生の問題, 学部教育の問題について, 共有化を図る事ができた。</p>		

※ 取り組みが複数ある場合は「取組番号」に1/1、1/2のように記入してください。

※ 提出期日 2010年5月20日(金)

※ 提出先 教務課長(内線3210)

2. 学部学科の取り組み

2) 経済学部

経済学科

2009年度 FD 活動記録

組 織	経済学部	取組番号	1 / 3
FD 活動の名称	講義別成績統計の作成・公表		
開 催 日 時	2009/05/14 13:30		
開 催 場 所	第3会議室		
参 加 人 数	16名		
添付資料の有無	有 <input type="radio"/> 無 <input checked="" type="radio"/>		
概 要	過去3年間の講義別成績統計をまとめ、各講義の成績状況について情報共有を行った。		
成 果	履修者数の偏りや成績分布の偏りを是正するための基礎資料となる。		

※ 取り組みが複数ある場合は「取組番号」に1/1、1/2のように記入してください。

※ 提出期日 2010年5月20日(金)

※ 提出先 教務課長(内線3210)

2009年度 FD 活動記録

組 織	経済学部	取組番号	2 / 3
FD 活動の名称	専門科目に関してシラバスの記載に関するガイドラインの策定		
開 催 日 時	2009/10/22		
開 催 場 所	第3会議室		
参 加 人 数	17名		
添付資料の有無	有 ☒		
概 要	① シラバスの有用性を高めるため、専門科目に関してシラバスの記載に関するガイドラインを定めた。		
成 果	2010年度の専門科目シラバスは、ほぼすべての科目についてガイドラインにそって作成され、学生にとっての利便性の向上に貢献したと考えられるが、客観的な検証は、今後、アンケート等による調査が必要である。		

※ 取り組みが複数ある場合は「取組番号」に1/1、1/2のように記入してください。

※ 提出期日 2010年5月20日(金)

※ 提出先 教務課長(内線3210)

2009年度 FD活動記録

組 織	経済学部	取組番号	3 / 3
FD活動の名称	卒業直前アンケートの実施と分析		
開催日時	08年度アンケートの分析と結果公表…2009/11/19 13:30 09年度アンケートの実施…2009年12月～2010年1月		
開催場所	第3会議室他		
参加人数	17名		
添付資料の有無	有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/>		
概 要	2008年度卒業生に実施したアンケートの分析を行った。引き続き2009年度卒業生を対象にアンケートを実施した。		
成 果	経済学入門A、B、C、プロゼミ、専門ゼミなどの改善を要する点、ゼミ募集改革の効果などが確認できた。		

※ 取り組みが複数ある場合は「取組番号」に1/1、1/2のように記入してください。

※ 提出期日 2010年5月20日(金)

※ 提出先 教務課長(内線3210)

2. 学部学科の取り組み

3) 人文学部

英語英米文学科

2009年度 FD 活動記録

組 織	英語英米文学科	取組番号	1 / 1
FD 活動の名称	「英文講読」指導プロジェクト		
開 催 日 時	月一回		
開 催 場 所	各研究室		
参 加 人 数	英文講読担当教員 3 名		
添付資料の有無	無		
概 要	<p>英語英米文学科の一年次必修科目である英文講読の担当教員が定期的に集まり、アカデミック・スキルの教え方、TOEIC 指導の実践方法について意見を交換し、また参考文献を紹介しあった。学生の情報共有することによって、チームティーチングの可能性を開いた。</p> <p>今年度の経験は次年度英文講読担当教員に引き継がれ、発展的に応用されている。</p>		
成 果	<p>学生へのアカデミック・スキルの浸透に時間がかかることがわかり、一度説明して終わるのではなく、講義やアクティビティの中で何度も繰り返す必要があることを確認した。</p> <p>担当教員間で情報を共有した結果、学期ごとのクラス再編成（能力別）を実施しても、大きな混乱なく指導に取りかかることができた。</p>		

※ 取り組みが複数ある場合は「取組番号」に 1 / 1、1 / 2 のように記入してください。

※ 提出期日 2010年5月20日（金）

※ 提出先 教務課長（内線 3210）

2. 学部学科の取り組み

4) 人文学部

こども発達学科

2009年度 FD 活動記録

組 織	こども発達学科	取組番号	1/2
FD 活動の名称	小学校教職課程科目「教育実習」の充実化		
開 催 日 時			
開 催 場 所			
参 加 人 数	53名		
添付資料の有無	存 無		
概 要	<p>事前学習では、学科教員2名に加えて、教育実践に精通した学外講師3名の5名体制によるきめ細やかな指導を行った。使いやすい仕様の本学科独自の実習日誌を作成し、教育実習に活用した。</p> <p>尚、外部講師を含めて指導教員5人は学校現場の視点から求める教師の姿を明確に示し、学生を5グループに分けて個別的で具体的に責任を持って学生一人一人に対応する指導を行った。教員採用試験対策と教育実習指導とを関連づけてより実践的な指導を行った。</p>		
成 果	<p>小学校教職課程科目「教育実習」を履修する53名の学生全員の現場での実習を円滑に実施することができた。</p>		

※ 取り組みが複数ある場合は「取組番号」に1/1、1/2のように記入してください。

※ 提出期日 2010年5月20日(金)

※ 提出先 教務課長(内線3210)

2009年度 FD 活動記録

組 織	こども発達学科	取組番号	2/2
FD 活動の名称	今期授業に対する SA からの指摘・意見の聴取		
開 催 日 時	7月15日・1月20日(水)		
開 催 場 所	教員研究室		
参 加 人 数	学生5名と教員1名(7/15)・学生3名と教員1名(1/20)		
添付資料の有無	有	無	
概 要	<p>次年度以降の「SAを導入した授業運営」に資するため、授業期間終盤に、今年度の授業を担当する SA に集まってもらい、以下の各項目について指摘や意見をだしてもらった。また、だされた指摘・意見にあわせて、項目の範囲にない事柄にも広げて聴かせてもらった。</p>		
成 果	<p>次年度の SA を導入した授業に反映させ、円滑な授業運営に寄与している。</p>		

※ 取り組みが複数ある場合は「取組番号」に1/1、1/2のように記入してください。

※ 提出期日 2010年5月20日(金)

※ 提出先 教務課長(内線3210)

2009 年度 こども発達学科専門科目

「地域の子ども連携マネジメント実習」

今期授業に対する SA からの指摘・意見の聴取

面談日時：7月15日（水）午後1時10分より、鈴木研究室にて

次年度以降の「SA を導入した実習運営」に資するため、今年度の実習を担当する5名の SA に集ってもらい、以下の各項目について指摘や意見をだしてもらった。また、だされた指摘・意見にあわせて、項目の範囲にない事柄にも広げて聴かせてもらった。その結果を以下に記す。

Q：SA の業務時間は、適正と思いますか？ また、業務時間について問題がありますか？

・特にこれといってない。

Q：毎回の実習において、SA としての実習補助の内容を把握していますか？ また、教員からの補助内容に関する伝達は、十分と言えますか？

- ・把握はできていなかったと思う。授業の際にはじめて、これをしてあげなくてはとわかる。
- ・伝達は十分ではなかったと思う。仕事をしっかりと把握するために、前もって知りたかった。

Q：教員から事前に伝達されていると役立つと思われる事があれば、教えてください。

・参加募集班の仕事がわからないままに、いきあたりぼったりでアドバイスをしていた。教員がわからないことは、SA にはわからないだろうに。

Q：SA の業務時間は、授業時間内に限定されていますが、この限定の中で打合せの機会を作る必要があると思いますか？また、そうした機会を持つとしたら、どのような仕方があると思いますか？

- ・打合せはあった方がよかった。リハーサルの時間等の事前の話し合い。実習の終わりの時間を打合せに利用できるのではないかな。
- ・水曜5講に何をするかを各班の班長から事前にきけたら、会議をもっと円滑にすすめることができたと思う。

Q：実習全般を通して、SA の補助内容のよい点、悪い点を指摘してください。

- ・どこまで手伝ってよいか明確でないから、どうしてよいか分からないときがある。SA がサポートをどこまでやってよいのか、やるべきなのをもっと明確にしておいた方がよいと思う。
- ・よい点は、履修する2年生と仲良くなれること。
- ・去年の経験を活かしてアドバイスをしすぎると、今年のクラスの個性がだせなくなってしまう。

- ・ 授業の期間を通して、徐々に SA と履修生とのコミュニケーションがとれるようになってきた。

Q: 今回の SA 業務を通して、自分自身の勉強に資する経験ができましたか？ それは、どのようなことですか？ あるいは、どのようにしたら、よりよい経験の機会となると思いますか？

- ・ どうやってアドバイスしたらよいかを考えていると、自分自身の勉強になる。どうやったら、理解してもらえるかを考える機会となった。
- ・ アドバイスをするタイミングを考える機会となった。
- ・ こちらの意図していることを気づいてくれたことに感動した。
- ・ 去年のやり方はあくまで例として紹介することに留めた方が、今回のクラスのオリジナリティをだすのによい。
- ・ こうしたらよかったのに、といった自分自身が後で改善点に気づいたようなタイミングの遅さなどの話も紹介したらよい。
- ・ 前にやった先輩達の企画・行事もふまえてアドバイスしてみたら、よいと思う。
- ・ 自分たちのだけでなく、先輩達の行事のビデオも授業期間の前にみっておくとよいだろう。過去の行事ビデオは、授業のサイショの方で履修生にみせた方がよいだろう。
- ・ 過去の行事ビデオをみせるのも、やっぱりタイミング！途中でみせるのが効果的。

Q: その他、今後の実習について、指摘・意見等がありましたら聴かせてください。

- ・ 先生と SA との連携がうまくとれていない。一回目のリハについての考え方を一貫させておくのがよい。
- ・ SA は気づいたことをメモして、言った方がよいと思うタイミングをみはからって言う。
- ・ 公欠以外の欠席は、もう少しきびしくみるべきではないか。
- ・ リーダーの負担が大きくなっている。サイショと最後に出席をとるとよい。
- ・ 副リーダーはいたほうが良い。
- ・ 作業班ごとに作業スケジュールを作るのがよい（去年はつくっていい良かった）。
- ・ レジュメの必要性が、メンバーに十分に理解されていなかった。
- ・ レジュメには日にちを必ず入れるべき！
- ・ SA は、長い目で見守ろう！寛容な心で見守ろう！（履修生に対する姿勢）
- ・ （行事開催後の）反省をまとめて、その記録を活かせるようにしてほしい。

2009年度 こども発達学科専門科目

「ものづくりと子ども発達」

今期授業に対する SA からの指摘・意見の聴取

面談日時：1月20日（水）午後2時50分より、鈴木研究室にて

次年度以降の「SAを導入した実習運営」に資するため、今年度の実習を担当するSA（5名、うち3名出席）に集まってもらい、以下の各項目について指摘や意見をだしてもらった。また、だされた指摘・意見にあわせて、項目の範囲にない事柄にも広げて聴かせてもらった。その結果を以下に記す。

Q：SAの業務時間は、適正だと思いますか？ また、業務時間について問題がありますか？

- ・特にこれとってない。

Q：毎回の実習において、SAとしての実習補助の内容を把握していますか？ また、教員からの補助内容に関する伝達は、十分と言えますか？

- ・図工室の備品の道具等、何をどこからどこまで使ったり、教えたりしていいのかが、分からないことがあった。履修生から「このような道具がありますか？」と聴かれたもののほとんどがなかった。

Q：教員から事前に伝達されていると役立つと思われる事があれば、教えてください。

- ・自分たちが履修した前年の授業内容と異なる点は、事前に説明を受けておくとよいと思う。
- ・授業の展開について、次に何をやるのかを教えてくださいと動きやすい。
- ・教員が一時的に教室を離れている間の履修生への対応の仕方について伝えておいてもらうとよい。作業グループによって、図書館やパソコン室にいきたいという申し出を受けた。

Q：SAの業務時間は、授業時間内に限定されていますが、この限定の中で打合せの機会を作る必要があると思いますか？ また、そうした機会を持つとしたら、どのような仕方があると思いますか？

- ・特になし

Q：実習全般を通して、SAの補助内容のよい点、悪い点を指摘してください。

- ・SAが、履修生の作業中に手の空いている場合が多くあった。作業を見守ることも大事だが、その間にSAが積極的にサポートすることができずに待機している場合もあった。一方で、グループを巡回しつつ、声かけをしてみると履修生の意欲を高めるようなコミュニケーションができたときもあった。
- ・新聞や落ち葉などの作品制作について、履修生からアイデアを求められて、どこまで答えて

いいものかと困る場面もあった。答えすぎると、こちらの意見を押し付けてしまうことになるのではと考えた。

- ・ まじめにやりすぎずに、ときには他愛無ない会話をしてみると、履修生とよいやり取りができた。SAは、教員のようにかしこまらずにアドバイスすることができると思う。
- ・ ほんの少しの時間ではあるが、SAが遅刻する場合があった。これはない方がよい。
- ・ SA用の授業内の仕事に関するプリントは、今回はなくてもやっていけたが、授業内容のどこでどのようなことをするのかといった仕事内容の詳細がわかるプリントを事前に渡してもらえれば、とても役立つと思う。

Q: 今回のSA業務を通して、自分自身の勉強に資する経験ができましたか？ それは、どのようなことですか？あるいは、どのようにしたら、よりよい経験の機会となるとおもいますか？

- ・ 新聞作りなどは、自分が履修していたときには思いつかなかったことに気づかされることもあった。
- ・ そば打ちのときに、前に出て説明する場面があったが、自分にとってもよい経験になると思った。説明するところについて事前に、パワーポイントの資料を用意しておくとうい。SA同士が話し合える時間を事前に持てれば、もっとポイントを押さえて伝えたいことをよりしっかりと伝えられたかなと思う。

Q: その他、今後の実習について、指摘・意見等がありましたら聴かせてください。

- ・ 履修生の名前を、授業時間中に覚えられない。名簿を渡してもらい、事前に覚えておくとういと思う。
- ・ SAが、グループに付いて担当し、3つのテーマの内容を一緒に進めていけたことによって、履修生とのコミュニケーションがとりやすく、アドバイスややりとりがしやすくなった。この点では、テーマごとに担当していた昨年よりも、今回の方式の方がよいと思う。
- ・ SAがそば米ぞうすいを作るときに、包丁が足りなかった。もう一本はあるとうい。
- ・ 蕎麦の他、アレルギーのある履修生用にうどんも打ったが、履修生全員がどちらかを選択して作れるともっとよいと思う。薬味の小ネギがたりなくなったので、今後は、あらかじめ班ごとに分けて渡しておくとうい。打ち粉をコップに入れて配ったのはよかった。
- ・ 壁新聞は、作業時間が後半で足りなくなるので、このテーマの初回も2コマ続きで作業をするとういと思う。
- ・ 作品の内容が、ただアンケートをとるだけのもの等、壁新聞の主旨にあっていないようなものもあったと思う。さまざまな資料にあたり、収集したデータを分析することをすすめるとういと思う。このテーマでは、調査結果をもう一步踏み込んで考えたり、調べたりすることが、大事だと思う。

- ・ 仲のよい人同士でグループを作るより、仲良しグループに関係なく、男女混成のグループにする方が、作業に対する責任をもって、生産的な作業を行えると思う。
- ・ 落ち葉をひろう際には、極力多くとっておいた方が、作品をつくる上での選択の幅が広がると思う。しかし、実際には、履修生にそうアドバイスしてもなかなかたくさんとろうとしないので、しっかりとアドバイスした方がよい。なるべくバラエティーに富んだ落ち葉をたくさん集めるように指導するとよいと思う。
- ・ SA は、早めに落ち葉をひろい終えた履修生について教室にもどったらよいか、それとも、時間いっぱい外で拾っている履修生についていたらよいかかわからなかった。
- ・ 去年は、木の枝や木の実もひろっていたが、今年は、葉っぱばかりを拾っていた。木の枝や木の実、作品を作る上でよい材料になるので、積極的に拾う様に指導するとよいと思う。今年、SA からアドバイスした場合もあった。
- ・ 四葉のクローバーを探している履修生がいたが、時間内ではあるが作業というよりも遊んでいるように見えた。こうした場合のアドバイスの仕方について教えてもらいたい。

2. 学部学科の取り組み

5) 法 学 部

法 律 学 科

2009年度 FD 活動記録

組 織	法学部	取組番号	1 / 4
FD 活動の名称	初年次教育における受講者理解度向上の取り組み		
開 催 日 時	基礎演習 開講時等		
開 催 場 所	基礎演習 開講教室等		
参 加 人 数	2人		
添付資料の有無	有 無		
概 要	<p>基礎演習 9 クラス中 2 クラスで SA を採用し、1 年生の授業理解度の向上に努めた。1 年生の作成したレポートまたはレジュメのチェックおよび助言を上級生が行い、1 年生が授業内容を理解し学習方法を築いていく手助けとした。</p> <p>その他、就学に関わる相談に上級生が応じるなどした。</p>		
成 果	<p>上級生が1年生の課題に目を通してアドバイスすることで、1年生は自らの位置に近いところに現実的な目標を見だし、それをクリアする努力を行いつつ、授業内容を理解していた。教員が1年生に要求するレベルが現実から乖離しがちなことを、認識する機会にもなった。また、上級生が就学上のアドバイスをすることで、1年生が安易に欠席することを防止することができ、結果として授業内容の理解から遅れることを防ぐことができた。さらに副次的成果として、上級生が下級生を指導することで、資料読解力やレジュメ作成力を高めたり、自らの課題を発見したりした。</p>		

※ 取り組みが複数ある場合は「取組番号」に1/1、1/2のように記入してください。

※ 提出期日 2010年5月20日(金)

※ 提出先 教務課長(内線3210)

2009年度 FD活動記録

組 織	法学部	取組番号	2/4
FD活動の名称	教員授業参観の実施		
開催日時	6/1(月)～6/27(土)、11/9(月)～11/28(土)		
開催場所	各講義教室		
参加人数	18人		
添付資料の有無	有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/>		
概 要	<p>教員各々が自己の授業方法の改善につなげるため、前期に4週間、後期には3週間の間、演習科目を除く授業において、他の教員の授業を参観できるものとした。参観は、前期には18科目(担当教員14名)が期間中常時オープンとされ、3科目(担当教員2名)が期日限定でオープンとされ、3科目(担当教員1名)が期日限定とされた。</p>		
成 果	2009年度に他の教員の授業を参観した例はなかった。		

※ 取り組みが複数ある場合は「取組番号」に1/1、1/2のように記入してください。

※ 提出期日 2010年5月20日(金)

※ 提出先 教務課長(内線3210)

2009年度 FD 活動記録

組 織	法学部	取組番号	3/4
FD 活動の名称	講義科目における学生の出席率と単位認定率の把握		
開 催 日 時	6/18、7/16、11/19、12/17の各教授会		
開 催 場 所	1号館4階 会議室		
参 加 人 数	教授会出席者数		
添付資料の有無	有	無	
概 要	<p>前期は5月下旬を中心に20科目、後期も11月上旬を中心に20科目について、学部コア科目以外は各2回の出席調査を行った。学部コア科目については、各担当教員がリアクションペーパーの提出や復習問題の回答提出を求めるなど、独自に教授法を工夫しているところ、4回の出席調査を行い、出席回数および出席学年の詳細な把握を努めた。</p> <p>また、各科目の単位認定率を集計している。</p>		
成 果	<p>出席調査は現在のところ、就学指導を第一の目的として行っており、学部全体の出席率を把握することは第二の目的となっている。また、単位認定率の集計は出席調査とは別個に行われている。今後、出席率と単位認定率の相関について検討していくことで、各教員の教授法開発につながりうると考えられる。</p>		

※ 取り組みが複数ある場合は「取組番号」に1/1、1/2のように記入してください。

※ 提出期日 2010年5月20日(金)

※ 提 出 先 教 務 課 長 (内 線 3210)

2009年度 FD活動記録

組 織	法学部	取組番号	4/4
FD活動の名称	成績不振学生の授業理解度向上のための取組み		
開 催 日 時	12/3 (水)		
開 催 場 所	1号館4階会議室		
参 加 人 数	約15人		
添付資料の有無	有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/>		
概 要	<p>法学部では、単位取得状況が思わしくない学生に対し、担任となっている教員が前期および後期に各1回以上の面談を行い、授業内容理解のための助言をしている。対象学生全員の状況を把握して就学指導を行うことをめざし、とくに面談の呼出しに応じない学生への対応や、卒業年次に該当する学生への対応など、教員協議会を開催して意見交換を行った。</p>		
成 果	<p>第4学年および留年生の成績不振者について、単位不足状況を一覧にした就学対策用資料を作成し、学生の授業内容理解を促すための個別指導に役立てることとした。</p>		

※ 取組みが複数ある場合は「取組番号」に1/1、1/2のように記入してください。

※ 提出期日 2010年5月20日(金)

※ 提出先 教務課長(内線3210)

2. 学部学科の取り組み

6) 社会情報学部

社会情報学部

2009年度 FD活動記録

組 織	社会情報学部	取組番号	1 / 2
FD活動の名称	基礎ゼミナール意見交換会		
開催日時	2010年3月18日		
開催場所	C館4階会議室		
参加人数	5名		
添付資料の有無	有 無		
概 要	<p>初年次教育における学習指導、および生活指導において中心的な役割を担っている1年次の基礎ゼミナール（前・後期）については、社会情報学部としても改善の試みを続けてきている。2009年度も前年度に引き続き、1年間の授業運営の経験を踏まえた基礎ゼミナール担当教員による意見交換会を開催した。</p>		
成 果	<p>基礎ゼミナールは1年生を対象とする科目のため、前期については大学での勉学になじむための学習指導、また文章の読解やレジユメの作成の練習などの基礎的なリテラシー教育に関する担当教員の取り組みについて情報交換・情報共有が行われた。</p> <p>後期の基礎ゼミナールについては、前期の課題をどこまで引き継いで柔軟に運営するか、また3年次以降の専門教育につなぐための下地作りをどのようにおこなうかについて問題意識の共有が行われ、各担当教員の取り組みについて情報交換が行われた。</p>		

※ 取り組みが複数ある場合は「取組番号」に1/1、1/2のように記入してください。

※ 提出期日 2010年5月20日（金）

※ 提出先 教務課長（内線3210）

2009年度 FD活動記録

組 織	社会情報学部	取組番号	2 / 2
FD活動の名称	専門ゼミナール（3年次）発表会に関する意見交換		
開催日時	2009年2月/18日・3月11日の学部教授会にて		
開催場所	C館4階会議室		
参加人数	2月18日：11名 3月11日：約10名		
添付資料の有無	有 無		
概 要	<p>これまで、3年次の専門ゼミナールの発表会の持ち方については、各ゼミに委ねられていた。そこで、改めて3年次の専門ゼミナールを、1年間で積み上げた成果を学生が自らまとめ、自分の言葉で、人前で発表するトレーニングと位置づけては、という趣旨で議論を行った。その結果、次のようなねらいを想定して全ゼミ合同の発表会を持つ事で合意した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 自らの活動を振り返り、他者の前でプレゼンテーションする機会を提供する。 2) 人前でまとまったことを話す経験を積み、自信の一端としてもらう。 3) 3年次終了時点の学生に対して、「専門ゼミナールIV」あるいは「卒業論文」への動機付けを形成する。 4) 同じゼミの他の学生あるいは他のゼミの学生の発表を聞くことで、自らの発表に対して相対的な捉え方を持てるようにする。 		
成 果	<p>上の議論を踏まえ、2010年度より全ゼミが合同で発表会を行うことになった。各専門ゼミでは、指導教員が、2011年2月に予定されている発表会を想定して指導を進めている。</p>		

2. 学部学科の取り組み

7) 総合教育センター

2009年度 FD 活動記録

組 織	総合教育センター コンピュータ基礎担当	取組番号	2/2
FD 活動の名称	2009年度コンピュータ基礎 TA 反省会		
開 催 日 時	2010年3月20日 15:00~17:00		
開 催 場 所	札幌学院大学社会連携センター		
参 加 人 数	12名		
添付資料の有無	Ⓞ	無	
概 要	<p>2009年度コンピュータ基礎 TA と教員による授業の反省会を実施（毎年度、授業開始前に1回、終了後に1回、計2回）している。反省会の前に全 TA から1年間の業務に関わる自己点検と総括をメールで提出してもらい、また、授業で収集した学生からのアンケートの自由記述一覧を反省会時に配布し、その資料に基づいて、各々の TA が、1年間の業務を振り返った。また、次年度への改善点をまとめ、それらを教員が次年度への授業運営に生かすことにしている。</p>		
成 果	<p>TA ならびに教員らの授業に対する情報共有がなされた。また、次年度への改善点が明らかとなり、早速次年度の授業改善につながった。</p>		

※ 取り組みが複数ある場合は「取組番号」に1/1、1/2のように記入してください。

※ 提出期日 2010年5月20日（金）

※ 提出先 教務課長（内線 3210）

2009年度コンピュータ基礎FD報告書

コンピュータ基礎担当 石川千温

■内容

1. 2009年度コンピュータ基礎TA反省会
2. 2009年度コンピュータ基礎TA改善報告集
3. 2009年度コンピュータ基礎学生アンケートの自由記述一覧

1. 2009年度コンピュータ基礎TA反省会概要

- 1) 実施日： 2010年3月20日(土) 15:00~17:00
- 2) 場所： 札幌学院大学社会連携センター
- 3) 参加人数(参加率)： 教員3名(100%)、TA9名(65%)
- 4) 反省会概要

①今年度の各TAによる業務総括(開始前の目標と終了後の自己評価、反省等)

各TAの業務に対する自己評価、総括は別紙に記載。全体的に見て、業務2年目以降の経験者は、総じて科目の目的、授業内容、授業手順についての理解が進み、各々の業務手順、役回りについてしっかりこなしていたと判断する。初年度のTAについては、前期はやはり進め方について、直前になって指示されることも多いためか、混乱する様子が伺える。ただ、後期になって、それらの問題は改善されている。担当教員として、新人のために、もっと早い段階での指示を行うべきであるとの認識を持った。

②教員による授業総括(開始前の目標と終了後の自己評価、反省等)

この授業の方法については、既に10年以上に渡るため、特に大きな問題点はない。しかしながら、毎年度、課題がかなりの速いペースで増えつつあり、それらを事前にTAに検証してもらう余裕がないのも事実である。ただ、課題数については、2010年度までで落ち着くのではないかと思われる。

学生のアンケートの結果から、やはり、後期のエクセルについて難しさを訴える学生の声が多く、エクセルについてはより詳しい説明をする機会を設けるべきであった。現在、教室に2名のTAを配置しているが、それでもやはり足りないとの声も多い。質問する学生はどうしても偏りがちであり、また、説明時間をとられる傾向にあるので、できるだけ公平に対応する方法を検討したい。

③次年度の授業の進め方についての確認

次年度は、開講曜日を1日追加し、その分、各曜日の開講クラス数を削減する方法を実施する。場合にはよっては、これまで同一コマ同一学科のクラスであったが、混合クラスが発生する模様である。そのため、授業運営上、これまでとは違った問題点が生じる可能性があることをTAに周知した。

また、次年度は、教員の各課題についての説明を、ビデオに収録し、学生が後からその説明を見られるようにして、特にエクセルに対する説明不足を補う予定である。

2009 年度コンピュータ基礎TAの自己評価・総括

	今年度の TA 業務で、自分なりに工夫改善した点	TA 業務に関する総括(感想、次年度の目標)
1	TA 業務二年目ということもあり、前年度の経験を生かして生徒に考えさせ自分自身で解決できるよう導くことを意識して行いました。生徒との対話の中でただ単純にわからないではなくドコを理解できないから問題解決ができていないのかを引き出せるように会話することを心がけました。	二年間 TA 業務に携わることができてとても勉強になりました。ありがとうございました。この二年間は特にオフィスのバージョンが 2003 から 2007 に切り替わるタイミングであり、生徒の指導が難しい中円滑に進めることができた事は私自身のスキルアップにもつながりました。過去の TA の先輩方の蓄積された経験やノウハウを今後も引き継いでいってほしいと思います。
2	採点ツールにかけた時に、ひっかかりやすいところを頭に入れて臨むようにしたので、昨年よりも学生からの質問にスムーズに答えることができたと思います。なるべく、HP やテキストの該当部分を指示し、自分で考えるように誘導しようと努めたのですが、教えてしまうこともありました。また、進捗状況の遅い学生には、課題の締切日になるべく丁寧にみるなどしました。	一人ひとりが課題を進めていくという授業なので、課題(特に後半)によっては学生が戸惑っていたように思います。HP とテキストだけではわかりにくい場合、こちらが説明した内容を、その場では理解してくれても、今後自分一人でも使えるようになってきているのかな、と思う場面が時々ありました。ただ質問に答えるというのではなく、自分で試行錯誤して乗り越えていく力がつく指導がもう少しできたらよかったです。
3	教科書や HP をよく読めばわかる質問が依然として多い。そのような質問があった場合、できるだけ自分の力でやってもらいたい(それ以前に教科書なり HP なりをきちんと読んで取り組む姿勢を身につけてほしい)と思い、これまでは「それについては HP (教科書の〇ページ) に書かれているからもう一度よく読んでごらん」というふうに対応していた。しかし、そうすると「わからないから質問してるのに…」などと言ってさらにやる気をなくす学生も少なくない。やる気がなくなってしまうのは一番困る。そのため、特に上記のような学生に対しては、今年度は「ちょっと手を出しすぎだろか」と思うような部分でもとにかく質問に答えるようにし、とにかくまずは「わかる喜び」を知ってもらおう(そしてやる気につなげる)ことにした。	今年度はますます学生のコンピューターに対する慣れが進んでいて、それに伴い学生からの質問は少なくなっているように思う(TA としてはやや寂しい…)。しかし、だからといって「本当に理解しているのか」という疑問が残る学生は多い。そのような学生に対してどう応じていけばいいのか。また、パソコンが苦手であったり課題が難しくなるにつれてやる気をなくしてしまうような学生に対しては、理解してもらおうと同時にどうやってやる気を持ち続けてもらうか。毎年悩む課題ではあるが、来年度も試行錯誤しながら業務にあたっていきたい。また、パソコン自体のトラブル等があった際、「どうすればいいんだろ?」と、依然対応に困ってしまうことがある。Word や Excel の課題と同じく、トラブルに対しての対応力をもっと高められたいと思っている。
4	できる限り一人一人に声をかけて進捗を確認し、励ますように心掛けました。それぞれの学生の性格やスキルがしだいに把握できるようになると、学生によって説明の度合いを変えて指導しました。なかには課題ができないのに質問することができない学生もいるので、こちらからも積極的に関わることで質問しやすい環境を作り、学生の助けになれるように努めました。	今年度は 2 年目でしたが、昨年度以上にパソコンを覚える学生/そうでない学生の差が大きかったように感じました。自分で課題を解き進める学生は問題ないのですが、「全く分からない」という学生をどのように指導すべきか、という点に苦労しました。特に、発達障害があると思われる学生につきっきりになってしまうことで、他の学生に目が行き届かない時には葛藤を覚えました。このような学生のサポート体制については今後も課題になっていくことかと思われまます。またこれは余談ですが、今年度はまとめ試験で部分点を導入したことで、まとめ試験に取り組む姿勢がよくなった気がします。「どうせできない」といったあきらめや不満の声はほとんど聞かれなくなったと感じました。
5	Word や Excel では学生の技量に個人差が大きかったため、課題の進捗状況が遅かったり同じところに引っかかったりしているような学生に対して、なるべく声をかけるようにした。それでも大学の授業であるので、自分でわからないところを聞くという姿勢も必要だと思い、ただポーンとしていたり寝ていたりする学生は、基本的に放っておくようにした。	コンピューターの取扱いがそれほど得意ではなく、我流でやってきた部分が多いので、先生の授業中の話や得意な学生の説明によって自分の勉強になることも多々あった。1 年を終えてそれほど詳しくなったわけではないが、さらにきちんとした知識を身につけて学生に接するようになっていきたい。また、学生の課題の手伝いになるのではなく、なるべく自力で解決できる術を考えるようにしたい。
6	昨年度の反省から、教えすぎてしまうことに注意し、できるだけ学生自身が考えて答えを出せるよう、例えばわからない点についてホームページや教科書の該当箇所を教え、まず自分で読ませてみた上でそれでも理解できないようであれば説明を加えるという具合に、段階をふむことを意識した。	今年度は 2 年目であったため、昨年度よりは余裕をもって業務にあたることができた。ただ、再履修の学生への対応について、細かい点で他の学生と違う点があり、当初とまどうこともあった。また、パソコン操作の基礎的な知識が欠けており、勉強しなくてはと思いつつ今年度も課題をこなすための予習のみで手いっぱいになってしまったことは反省である。同室の TA の方に助けられたことも多く、お世話になった。
7	この TA 業務は私にとって 2 年目であり、前年度の経験を踏まえ特に意識的に改善した点は、「学生の質問に対し学生自身がその答えを調べる方法を教える」という点だ。この教え方は、一人の学生の質問に対応する時間が長くなる傾向があり、質問が集中するタイミングでは適さない。しかし、まとめ試験を含め、学生が今後のコンピューター操作に困った状況を考えて場合、教科書通りの方法を教えるより実践的な指導だと思われる。	今年度の私の担当は、前年度と同じ水曜日(法・経)であり、前年度の経験と比較しやすかった。前年度と違う印象を受けた点として、学生全体が静かであり、途中で授業に集中しなくなった学生が多かったことが挙げられる。さらに、教員の操作解説を聞いていない学生(自分の作業に集中している学生)が印象的だった。これは、前年と比べ課題の量が増加し、単位を諦めたり、教員の解説を聞く余裕を失ったりしたためと感じた。

8	<p>TAとして働くのは初めてだったため、かなり戸惑いました。質問された内容に対して、解答を教えるのは簡単でしたが、出来る限り生徒自身に考えてもらえるよう、努力しました。</p>	<p>09年度では、積極的に質問する学生には十分に、対応ができたと感じております。しかし、そうでない学生に対する配慮が少し足りなかったと反省しております。来年度は、そのあたりを考えて業務を行ってまいります。</p>
9	<p>前期でテキストと課題内容にミスマッチがあったためか、後期に入ってもテキストを見ながら自分で課題を進める習慣が身につけていない学生が多く見られた。そのため質問に対しては、まずは出来るだけテキストやホームページの課題説明を再度確認するように促すとともに、テキスト等を学生と一緒に確認することで、自分で課題が進められるように工夫をした。</p>	<p>今年度は、出席免除を目指して前倒しで課題を進めるよりも、締め切りにあわせて進める学生が多いように感じられた。締め切り直前は質問が集中し、じっくり考えさせる時間がないため、進捗が遅れている学生ほどきちんと理解できないまま自転車操業で課題を進めているように思われた。自分で考える前に質問する者もいるが、一人で悩んでいる学生には早めのケアが必要だと感じた。</p>
10	<p>A/Bの授業については、パワーポイントの発表をいやがる学生が多かったので、しつこいぐらいに「発表しないともったいない」ことをお寄せた。それから、「前期の単位を落としたから後期はなんとかとりたい」とか、「ここまでこんなに休んでしまったけど、単位を取るためにはこれからどうしたらいいか」というように、具体的に相談してくる学生が比較的多く、個人データを参照しつつ、個別にアドバイスをした。Cの授業に関しては、TAがチェックして可否を判定する課題が多かったので思いのほか苦労した。一人の学生のチェックを何度もするとその分ロスするので、一度のチェックで訂正箇所をすべて告げるようにした。(とはいえ、これで時間が短縮できたかどうかは不明。)</p>	<p>A/Bに関して：新しい課題以外は、昨年度とほぼ同内容だったため、教える際の注意点などもそのまま通用したので、やり易かった。ただ、他のTA(特に新メンバー)に自分に蓄積したノウハウを伝えきれていなく、あとになって、「教えておいてあげれば困らなかつたらう」ということがあった点、反省している。 Cに関して：今年は「早く課題を終えて出席免除を狙う」学生がとて少なかつたように思う。(木曜日だけでしょか?)この状態だと、締め切り日に可否チェックが集中して大変なことが何度かあった。 来年度は、今年度とは何かと変更する部分が多そうなので、臨機応変に対応できるよう心がけつつ、他のTAと積極的に情報交換し、より良い指導ができるよう取組みたい。</p>
11	<p>本年度は、臨床心理、子ども学科及び英語英米学科を担当致しました。各学生の情報リテラシーに関する事前知識、学習意欲などには大変大きな差があることをTA業務開始後、2~3週間後に痛感致しました。この事実を踏まえ、学習進度がはやい学生には最低限の指導に留め、初歩的なことから指導が必要な学生には机間指導の際に、重点的にアドバイスを与えるように致しました。また、後者の学生の内、課題をこなすうちに自分で調べて課題に取り組むことができるようになった学生にはアドバイスの回数を作為的に減らしていくように指導を致しました。</p>	<p>担当クラスには、障壁を抱える学生もおり、指導以前に、演習中に周りの学生に迷惑を掛けずに集中して課題に取り組ませるという学習態度から向き合わなければならない学生もいました。こうした学生の学習進度が遅れていく事を目の当たりにするのは非常に心苦しいものでした。今年度も行われたように、来年度以降も、障壁を抱える学生に対する具体的な配慮や講義内における工夫などが必要になると痛感致しました。</p>
12	<p>私が担当する2列だけを見回りするのではなく、教室全体の見回りをする事で、学生が質問をしやすいうにしています。学生にとって、TA2人のうち、質問のしやすいTAに質問をできるようにするので、学習がより進め易くなっていたのではないかと思います。</p>	<p>TA担当初年度でしたので、Word、PowerPoint、Excelと、オフィスソフトを授業で扱い始める度にあたふたと勉強をしていました。それでも、何とか一年間授業をこなせたので、良かったです。次年度は、「質問をすることなく課題をこなせていた学生が、課題につまってしまった場合に、なるべく察知してうまいことアドバイスを与える」ことを目標としたいと思います。</p>
13	<p>今年度というよりここ数年心がけていることだが、学生との適度な距離を維持すること。特によく質問する学生の中には「まじめ」な学生だけではなく操作を1から10までTAや友だちに関して課題をこなそうとする学生も教室に1, 2人はいるようになっている。そのため、自分のシマの学生にはなるべくまんべんなく対応できるように心がけていた。</p>	<p>ここ数年は他の大学や専門学校の授業を担当するようになり、いわゆる学生の「質」の変化を実感する場面が多くありました。その中で痛感したことは、知識・技術・意欲いずれの面においても個に即したきめ細やかな教育的支援がなければ、高等教育そのものが成立しえないということです。その点においてはコン基礎の指導体制はこれからの大学授業に不可欠なものであり、私自身も自分の経験や思考の枠を超え、どんな学生にでも対応できる柔軟な授業運営をする姿勢を身につけることができ、貴重な体験をさせていただきました。</p>
14	<p>本年度はCDの担当で、ABを履修済みの学生を扱ったが、ABの知識を使いこなせていない学生も少なくない。ABの復習をしつかりすること、ネットなどでわからない事を積極的に調べるよう指導した。コン基礎の内容は基礎として非常に重要だが、将来的に現場で使いこなす事を想定するとやはり不十分であるから、学生が自身で知識を広げている能力が重要であるという事を念頭におき、またその事を理解してもらえるよう務めた。CDは人数が少なく、一人一人にじっくりと段階的に教えることができたように思う。</p>	<p>三年間という短い期間ではありましたが、本年度でコン基礎のTAを退任致します。先生方、TAの皆様には本当にお世話になりました。初の教育的な業務であり、貴重な経験となりました。得られた経験を活かし、精進していきたいと思っております。将来的に研究者として大学に携わっていきたくと考えておりますので、またどこかでお会いする機会もあるかと思っております。よろしくお願致します。</p>
15	<p>内容の理解に遅れが出たり、課題提出の遅れに間に合わなかつたりした場合に、学生の関心や意欲が弱まる傾向にある。そのような層の学生の把握やこちらからの声かけに重点を置いた。また、学習内容がその後の学生生活のどのような場面での役に役立つものなのか、学生のフォローの際に付け加えて理解を促した。</p>	<p>TA業務は、学生への関わりや質もさることながら、担当教員とTA集団のチームワークによるところが大きいと感じた1年となった。コンピュータに関する専門的な知識については、私自身さらに学んでいく必要があるが、業務上の情報交換・共有をはじめ、円滑な問題発見と解決を可能とするチームワークをつくりだせるよう、視野を広く持って業務に取り組むたい。</p>

16	<p>よく質問をうける事項については、予め説明しやすいように図や例題などを作って対応しました。特にエクセル課題の場合、躓いている学生の多くはエクセルの操作方法に問題を抱えている訳ではなく、それ以前の算数・数学的な概念が理解出来ないために課題に手問取っているように思います。そういった点をケア出来るような対応を心掛けました。また特に受講態度の悪い学生については TA のみの対応では不十分と感じたため、先生方に相談しました。結果、席替えという形で対応して頂き良かったと思います。</p>	<p>曜日・教室毎に多少の差はあるものの、教室内のマネジメントが非常に重要な業務だな、というふうに思っています。携帯電話を使わないこと、実習室は飲食厳禁であること、授業中の私語は周りの迷惑になること、勝手に席を立たないこと……等々、一年を通して注意喚起する必要があったこと自体、非常に問題だと思いました。</p>
17	<p>今年度が初めてだったので、あらかじめ課題を解くことで生徒からの質問の予測をした。また、早く課題を解いていく生徒の質問に答えながら次に同様の質問が来た場合の最適な回答を考えることで遅れている生徒のフォローは出来たと思う。</p>	<p>質問に答える際に少し教えすぎてしまった。説明が回りくどくなってしまうために、解答にほぼ近い回答や操作を行うことがたまにあった。なので次年度はなるべく生徒にわかって貰える様な説明の仕方を心がけたいと思う。</p>
18	<p>今年度は、学習障害と思われる学生に対して、普通の学生とは異なる対応を取るよう心掛けた。これまでは何でこの学生は何度も聞いてくるのだろうと思っていたような学生にも、それを障害と認識することで、その学生にあった対応ができるようになったと思われる。</p>	<p>TA がどこまで教えるかに関して、ばらつきがあると思われます。大きく分けると、聞かれるまでは教えない人と、分からなそうであればどんどんこちらから話しかけて教えていく人になると思います。個人的にはもっと丁寧に教えていった方がいいと思います。課題をクリアできればいいではなくて、ワード・エクセル能力をしっかりと身につけ今後役に立てていけるような指導をしていくのがいいのかなと思います。</p>

2009 年度コンピュータ基礎アンケート自由記述

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ 火曜日 1 時限目 ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

- R. TA を増やしたほうが良いと思いました。・座席はクラスごとなどにしてほしいです。それか、せめて男女分けてほしいです。私は両隣が男子だったので、課題につまづいても聞きにくかったです…
- R. 1 講の人とそれ以降の時間の人とはちょっと不平等
- R. TA が一定の人にかかりつきりになっていたり教室内を見ていなかったりして質問しにくい。
- R. TA によって対応が違うので聞きたい人と聞きたくない人がいた。
- R. TA に質問しづらい。
- R. TA に質問出来ないときが多かったように思える。
- R. TA の教え方がよかったです。
- R. TA の指導も大変参考になり、授業はわかりやすかったがチェッカーでどこが間違っているかが少しわかりにくかった。
- R. TA の人呼びづらいです。
- R. TA の説明が分かりにくい時がしばしばあった。
- R. TA の先生や WEB での説明が不明確な点もあった。
- R. TA の先生方があまり対応してくれなかったと思います。
- R. TA の方があまりつかまらなかつた気がする。全部自分で調べて習得した方が早かった。
- R. TA の方が親切で助かりました。
- R. Word の図の挿入で、図の位置を細かく設定しなくてはいけないのが大変だった
- R. Word はだいたい自分の力で進めることができました。エクセルは様々な関数を使うため難しく自分だけではできませんでした。もっとエクセルを覚えたいと思います。
- R. いつもコンピュータ室には人がたくさんいるので、提出期限までに課題を終わらせるのが大変だった。
- R. エクセルがとても難しかったです。
- R. エクセルがとにかく難しかった。
- R. エクセルが全く分からなかった。最初の説明もなければ、ただ「教科書を参考にしてください」だけ。エクセルの用語、仕組み、全体を習ったこともないのに、どうやって進めていいか分からないのは当然です。結局、授業に出ても意味がないので、電子センターや、学外の友人に教えてもらう始末。高校卒業者の全員が全員、エクセルを知っているととは思わないでほしい。まだ 1 年生で不安な中、本当に残念な授業でした。
- R. エクセルが途中から付いていけなくなった。
- R. エクセルが難しかった。
- R. エクセルになってから、課題が難しくてせかせかして疲れた。
- R. エクセルの応用が難しかった。
- R. エクセルの課題で複雑な式や関数を使ったものが少し難しかったので、講義中でも詳しく教えてほしいかったです。
- R. エクセルの課題になったときに、質問しても「ここで検索してどうにかする」しか答えてもらえなくて困りました。自分で考えるのが一番だけ少し助けてほしいかったです。
- R. エクセルの技術を身につけ、エクセル検定を受けてみようかな、と思うようになりました。
- R. エクセルの使い方について知識を深められたと思います。
- R. エクセルの使う関数について詳しく説明をして欲しい。
- R. エクセルの総合問題が難しかった。
- R. エクセルは最初の方はついて行けたが、後半になって急激に難易度が上がったように感じた。初心者なのでもう少し段階を踏んでから難易度の高い問題に行っていたらよかった。
- R. エクセルは難しかったが、非常にためになる講義だと思った。
- R. エクセルやワードなどをやっていくと色々な使い方があったためになった。エクセルの使い方には一生慣れないと思う。
- R. クラス分けをしているので、それ相応のレベルの課題をクラス別に出してもらいたい
- R. けっこう面白かった
- R. この講義のおかげでコンピュータ色々な知識が身に付いたのでよかったです。
- R. この講義を通して、ワードやエクセルの基本の再確認や応用技術の習得をすることができた。ただ、エクセルに関していえば、教科書に載っていない関数の使い方をもう少しわかりやすく説明してほしい。
- R. この授業は、今後大学生活を送るうえで大変役に立つ授業だと思います。しかし、いろんなことを一気にやってしまうのでどれが必要なのかわからなくなってきました。なので、もう少しやることを絞ってもいいと思います。
- R. この授業を受けて基本的な知識がついたと思います。普段パソコン

- を使うのに役立っています。また、授業中わからないことがあった時に TA の先生が丁寧に教えてくれたので良かったです。
- R. これから PC を使ってゆく上で、役に立ったような気がします。
- R. コンピュータ基礎の授業で色々な操作の仕方を学べたことはとてもよかったですと思います。
- R. だいたい高校でやったことの復習だったので簡単だった。
- R. ためになった。
- R. チェッカーの誤作動がいただけない。もう少し早く改善してほしい。
- R. テキストを読んでも、コンピュータ基礎のホームページを見ても、方法が記載されていない内容を含んだ課題が難しかった。せめて、ホームページにはやり方を載せてほしい。
- R. とくになし
- R. とてもいい勉強になりました。でも教科書がわかりずらくて(詳しく書いていなくて)なかなか課題が進みませんでした。
- R. とても難しかったです。
- R. パソコンに向かって作業することに慣れていなかったため、毎時間とても疲れました。でも、ワードやエクセルの基本的な操作が習得できたので良かったです。
- R. パソコンの技術が上がった気がする。
- R. パソコンの使い方が前より分かって良かった。基本的なことができるようになったので、文章作成などにとっても役立ちます。
- R. もっとスクリーンを使って課題のやり方を説明してほしいです。
- R. ワードやエクセルの操作が分かってよかったです。
- R. ワードやエクセルを少しでも使えるようになって良かった。
- R. わからなかった操作を覚えられて良かった。
- R. わかりやすい説明で、理解できました。
- R. 可もなく不可もなく
- R. 可愛い TA がいたのでよかったです ('q')
- R. 課題の問題がわからないから TA に質問しているのに、何がわからないのかわからないと答えられないと言われました。TA の意味あるのでしょうか。もう少し親切にしてくれてもいいと思います。課題評価の問い合わせメールも送ったのに返信がこなくてとても困りました。どうなっているのでしょうか。管理をしっかりしてほしいと思います。授業はあんまり意味ないと思いました。先生がもっと教えてくれればいいと思います。
- R. 楽しかったです。
- R. 基本的なパソコンの操作を身につけることができた。
- R. 教科書やコンピュータ基礎のページの説明通りに課題を作って提出して、課題は合格するが、時間がたつて何も見ないでもう一度やれと言われてできない人が友達に多かったため、もっとしっかり覚えられるようなものにしたほうが良いと思った。
- R. 後期は結構難しかった。
- R. 後半になると、授業以外で課題をしても提出期限に間に合わないで、課題を一つ減らして欲しい。
- R. 高校の時と違い、操作方法も高度になり、難しかった。でも、できることも増えてよかった。キーボードの扱いにも慣れてよかった。(特にキーボードを打つ速さは断然速くなった)
- R. 高校までのコンピュータの授業とは違い、コンピュータが使えるレベルになれたのでよかった。
- R. 今まであまりパソコンが使いなかつたけど、この 1 年で、だいぶできるようになれたことがうれしかった。まだ、手元を見ないと打てないので、これから打てるようになりたい。
- R. 今後役に立つ技術ばかりでした。ただ、TA の方々の教え方にはいささか不満が残ります。質問しても解決できなかったことが何回かありました。
- R. 最後の方の課題は提出期限までに終わらせるのが大変だった。
- R. 授業自体がよくわからない (◎▽◎) 学外から見れないのをどうにかしてほしい。
- R. 授業進行スピードが早かった
- R. 出席免除の制度は良いと思った
- R. 将来に役立つ、とても為になる講義でした。
- R. 将来のためにも役に立つ科目だと思う。計算式など全部は覚えきれないが、試行錯誤する方法などわかるようになった。
- R. 先生の対応がはやく頼もしかった
- R. 前期はワードだったので自分的にも楽にすすむことができたが、後期はエクセルというあまりやったことのないことが範囲だったのですごく、この授業のおかげでエクセルの基本操作を覚えることができてよかったと思う。私の TA はすごく的確に教えてくれてすごいいろいろなことに詳しい人だったけど、言い方の面でキツイところがあって、聞くに聞けないところがあった。
- R. 全てを駆使したうえで質問をしているので、「これは教科書を見ればわかる」という返答だと課題が全く進まなかつた。最終的にパソコン

コンが出来る友人に聞いた。出席・欠席などその後の対応が遅く反映されていない。メールを出しても返信がない。以上が1年間で感じたことです。自習形式の講義なのでもっと沢山質問に答えてくれたり事前の説明がないと困ります。そこを改善してほしいです。

- R. 全然できなかったことが少しでもできるようになったのでよかったです。タイピングが授業を受ける前よりかなり速くなったので、いろいろなことを検索するときに役に立った。
- R. 大学卒業後も役に立つ知識が身に着いたと思います。この授業で学んだことは、忘れずに生かしていきたい。
- R. 大変自分のためになりました。
- R. 締め切りを延ばすくらいなら、最初から余裕を持って期限を決めれば良いと思う。授業中は声を出すのも憚れるので、TAや教員はもっと周りを気にしてほしい。気づいて貰えない時がある。
- R. 特にありません
- R. 難しかった。
- R. 難しかった。もう少し説明がほしかった。
- R. 難しかったけど、ある程度の技術は身につけられたと思います。
- R. 難しかったけど、やったことで前よりも文字が打てるようになったから良かったです。
- R. 難しかったけど TA の先生が丁寧に教えてくれたのでわかりやすかったです。
- R. 役に立つ授業だったのでよかったですと思います。

■■■■■■■■■■ 火曜日 2 時限目 ■■■■■■■■■■

- D. Word やエクセルの使い方がよくわかったし、これからも使っていけそうなので、とても役に立つ授業だったと思う。
- D. エクセルが難しいところがありましたが基本操作ができるようになってよかったです。
- D. エクセルは使い慣れてないので難しいと感じた。
- D. この講義で分からない部分があるようになったので大変参考になりました。
- D. この授業を通してコンピューターに対して、とても詳しくなることができたと思います。word やエクセルなど、実社会においてとても役に立つこの技術を学生のうちに学べ、良かったです。
- D. これから、パソコンを使う機会が増えると思うのでとても参考になりました。
- D. パソコンが学べていいと思う。
- D. パソコンが苦手なうえに、持病の糖尿病があり、欠席も多く先生や TA の先生に迷惑をかけてしまいました… すいませんでした。
- D. パソコンに慣れることができ、いろいろな技能が身に付きました。タイピングも以前より速くなってよかったです。ありがとうございます。
- D. もう少しわかりやすいヒントがほしかったがやりやすかった。
- D. レポートを書くときやゼミで発表するときこの講義でやったことがとても役に立った。これからはもっとパソコンは使っていかなければならないのでこの講義があつてよかったと思う。
- D. ワードやエクセル・パワーポイントを有効的に活用できるようになってよかったです。
- D. ワードやエクセルのチェッカーを誤作動がおこらないように改善したほうが良いと思う。
- D. ワープロ、エクセルなどの練習ができてよかったです。
- D. 課題に取り組む時に前の課題を応用して解くことで習得率が上がった
- D. 覚えれることがたくさんあってよかった。
- D. 楽しかった
- D. 見本通りに行った場合、チェッカーで通らなかった場合もあったので、もっとしっかり確認してほしい。ただ一方的に課題に取り組ませるだけでは授業ではないからわからない人もしっかり学習できるように説明をもっとしてほしい。
- D. 最初は打つのも遅くて大変だったけどいい技術を身につけられたと思う。
- D. 思っていた以上に難しかったです。先生たちのアドバイスなどでうまくすることができました。ありがとうございます。
- D. 授業の後半になるにつれて難しくなっていく、聞かなければできなかった。
- D. 説明が大雑把にしかしないので、パソコンの知識がほとんど無い人にとっては難しい。
- D. 特になし
- D. 特になし
- D. 難しい課題になると TA の先生に質問が殺到して、質問ができなくなり先へ進めないで増やして欲しい。
- D. 難しかったこともあったけど、この講義で習ったことは役に立つと思います。

- D. 難しかったです
- D. 難しくできないところがたくさんあったけどためになったと思っています。
- D. 履修登録をしていたにもかかわらず、初回の授業で座席がなかったのが学年にかかわらず、履修している学生への配慮がもう少し必要だと思いました。エクセルの操作の仕方の説明がもっとホームページ上などにあればやりやすかった。
- L. excel は、とくに最後のほうの課題に苦戦しました。教科書だけでは詳しく載っていないので、自分で調べて進みました。少し難しいと思いました。
- L. PC 上の問題が起きた場合の対処方法についても教えていただきたかったです。
- L. TA に少し厳しい人がいました。
- L. TA の方がとてもわかりやすく教えてくれたので、パソコンが苦手な私でも何とか課題を完成させることが出来ました。最後のほうのエクセルの課題は少し難しすぎるのでは、と思いました。
- L. Word やエクセルの基礎的、応用的な内容をよく学べたので、とても役立つ授業でした。
- L. エクセルが難しかったので、もう少し詳しい解説をして欲しい。
- L. エクセルが難しすぎたからもう少し説明がほしかった。
- L. エクセルの関数がまだわからない部分があるので、エクセルの関数をなるべく多く覚えようと思った。
- L. チェッカーで文字はちゃんと同じように打っているのに、チェックがつかなくて、何が間違っているのか、見つからなくて大変だった…
- L. ティーチングアシスタントの方がわかりやすく教えてくれたのでスムーズに作業を行うことができました。
- L. テキストを購入しましたが、コンピュータ基礎のホームページに課題のやり方の説明のヒントがあるととてもうれしいです。
- L. とてもためになった授業でした。
- L. とても難しかったが、できると楽しくてやりがいがあった。
- L. とても難しかったがためになる方法ばかりだったのでとてもよかったです。
- L. とても難しかったけど、これから先使ううえで、とても役立つと思う。
- L. とても役に立ったと思います。
- L. パソコンは人生の中でたくさん使うので勉強できてとてもよかったです。パソコンに少し自信ができました。
- L. もっとわかりやすく説明してほしい！
- L. よかった
- L. よくわからない。
- L. ワードとエクセル検定の資格を持っている人は、コンピュータ基礎を受講する必要はないと思います。
- L. ワードやエクセルがだいたいできるようになったのでよかったです。
- L. わかりづらかったときが何度かあったが、大体自力で行えた。
- L. 課題が多い。
- L. 課題が難しい
- L. 楽しかった
- L. 個人の意見として、TA の教え方が理不尽な人もいた。
- L. 個人的にパソコンは苦手なので大変だった。
- L. 後期に入っていくと難しくなりました。エクセルの資格がほしい！
- L. 後期はとても難しかったです。
- L. 後期は前期より難易度が高くなるようにした。生徒数が多いのもう少し TA が多くいるとほかの生徒も助かると思う。
- L. 後半急に難しくなったがとてもいい勉強になった。
- L. 高校でやったことの復習と同時に、難しいこともできたのでよかったです。
- L. 今まで、エクセルに触れる機会がなく、できるようにはなりたいたく思っていたので、今回コンピュータ基礎でできてよかった
- L. 最後の方が難しく全然わかんなかった。
- L. 最後の方は課題が難しかったけどとてもためになりました。
- L. 最初はキーボードを打つのが遅かったが、1年やっているとある程度の速さで打つことが出来るようになった。エクセルはやっぱ難しい。
- L. 最初は簡単だと思っていたけど、最後のほうは難しかった。
- L. 就職する際に役立つと思いました。
- L. 出席免除という制度は大学での時間を有効に使えるため大変良かった。
- L. 将来に必要なワードやエクセルの細部まで学習できて、とても有意義な時間を過ごせました。
- L. 難しい課題も多くありましたが、小中高の技能より格段にワード、

エクセルを使えるようになりました。

- L. 難しい関数に関して、教科書にもあまり載ってなかったので、もう少しわかりやすく説明してくれたらと思いました
- L. 不正をちゃんと取り締まってほしい
- L. 毎週課題提出で大変だった。

■■■■■■■■■■ 水曜日 1 時限目 ■■■■■■■■■■

- J. エクセルとワードにあまり触れていなかったためこの授業でそれらのことの基本的なことを学んで良かった
- J. Excel がよくわかりませんでした。
- J. PC の基本操作が理解できました
- J. TA がわかりやすく教えてくれて非常に感謝しています。
- J. TA さんには大変お世話になりました。TA さんがいなかったら授業には出てくるが課題が全くできないというような状況になってたと思います。親切に対応してくださって本当にありがとうございました。
- J. TA の教え方に差別があると思った。
- J. TA の人数が足りない
- J. TA の先生がいつも優しく教えてくれてとても助かった。
- J. TA の先生がとても丁寧に教えてくださったのが、私が少しでもパソコンができるようになったきっかけなのでとても感謝しています。
- J. TA の先生がわかりやすく教えてくれて、いろいろなことがためになった
- J. TA の先生の説明がわかりやすくてよかったです。
- J. TA の先生方がとても優しくしてくれて、自分がわからないところなどがあればすぐに駆け付けてくれて色々指導してくれました。とても感謝していますし、教え方も優しく丁寧に勉強になることがたくさんありました。ありがとうございました。
- J. TA の対応がよかったです
- J. TA の方がとても丁寧だったので課題をスムーズに進められた。課題の提出期限が短いように感じた。
- J. TA の方々や先生がとても優しく、とても質問しやすかったです。迷った時はヒントを出してくれて、閃いた時すごく気持ち良かったです。この講義を通して、自分の情報収集能力が飛躍的に上がったのが実感できました。ありがとうございました。
- J. Word は授業を受ける前からある程度できていたが、エクセルは全くできなかったで勉強できてよかった。
- J. アンケートや成績によってクラス分けされた意味がよく分らなかったです。
- J. エクセルがだいたいできるようになったことがよかったです。
- J. エクセルが少し難しかった。
- J. エクセルが難しかった
- J. エクセルが難しかった。
- J. エクセルが難しかったです。
- J. エクセルが難しすぎる。授業を理解できない。
- J. エクセルチェッカーで間違ったところの説明をもっと詳しくしてほしいかった。
- J. エクセルなど普段使わないソフトを使うことができとても勉強になった
- J. エクセルにより詳しくなることができたと思う。
- J. エクセルの課題の提出期限が早かった
- J. エクセルの関数の解説(特に課題 43)をもう少し詳しくして欲しかった。
- J. エクセルの基本的な操作ができるようになったことがよかった。
- J. エクセルの基本的な操作をもう少し説明して欲しかった。
- J. エクセルの数式が難しかったです。課題提出は週 1 つにしたいと思います。
- J. エクセルを使えるようになったので良かった。
- J. エクセル検定を視野に入れた授業は、非常に有意義なものでした。この授業で学んだことを生かして、検定に臨んでみようと考えております。
- J. かなり難しいこともあり、大変でしたが、ためになりました。
- J. この講義のおかげでパソコン操作が向上したと思います。
- J. この授業でコンピュータの使い方が、昔より身に付いた気がします。
- J. コンピュータの基礎的な部分であったが、自分には少し難しい部分があった。しかし、基礎的な部分ができるようになってよかった。
- J. コンピュータ基礎を受けてきて、今まで一部しかわからなかったワードやエクセルの操作ができるようになったので、とてもわかりやすく、ためになる講義でした。
- J. コン基礎の HP とテキストの解説だけでは excel の問題において、できない箇所が多々あったし、その都度 TA に関くのが面倒だった。教授はもっとスライドを使って毎時間解説すべき。

J. コン基礎の授業の雰囲気があんまり好きじゃなかった。

- J. たのしかった
- J. チェッカーがたまに作動しなかった(汗)
- J. チェッカーが完全でないため、手取った部分がありました。
- J. チェッカーの不具合をなんとかして
- J. チェッカー制作大変だと思いますがこれからも不正防止のためがんばってください
- J. ちょっと難しい課題が多すぎると思った
- J. できれば授業は自主みたいな感じじゃなく直接教えてほしい。
- J. どうか課題はやってこれましたが、後半になるととても難しかったです。授業の進め方が中学高校の頃のコンピュータ授業と違って、自分で見本を見てやっていくという方法なのが難しいところだと思いました。講義を受けても学ぶことが少ない(不明な点を聞くだけ)から、ちょっとサボり癖がついてしまったんだと思います。
- J. とくどき難しいものがあつて大変でした。
- J. ととてもためになったと思います。
- J. ととても為になった。楽しくできた。
- J. ととても良かったです
- J. パソコンが苦手な TA の先生方にお世話になることがよくありましたが、大変親切で感謝しています。
- J. パソコンが苦手なので、エクセルとワードを完成させるのに苦労しました。
- J. パソコンについてほとんど何もできなかったが、コン基礎のおかげでだいぶわかるようになった。
- J. パソコンの基本的な力が身につけてとてもためになった。TA の教え方が親切だった。
- J. パソコンの技術が身に付くので大変自分のためになりました。
- J. ベースが速く感じるものが時々あり、ついていくことが困難になったことがあります。
- J. まったくわからなかった。もう少し初心者にもわかりやすくしてほしい。
- J. もう少しアドバイスがほしい。
- J. もう少し具体的な操作の説明が欲しいものもあった。
- J. もう少し検定に向けた対策があってもいいかもしれません
- J. もう少し授業をゆっくりに進めたほうが良いと思う。
- J. もっと、エクセルやワードの複雑化したものを勉強してみたいです。
- J. よかた
- J. ワード、エクセルの力がつきました。TA の先生が親切に指導してくれたので、やりやすかった。
- J. ワードチェッカーの判定が厳しいような気がします。
- J. ワードとエクセルの技能は将来かなり、役に立つと思う。
- J. ワードのときはすんなりできましたが、エクセルは難しかったです。
- J. ワードはレポートなどを提出するときに使うのでサクサク進めることができたが、エクセルを使う機会はありませんので難しかったです。
- J. ワードは簡単だったけどエクセルは難しかった
- J. ワードや、エクセルの使い方が詳しくわかったのはとてもよかったし、普段使わないような関数計算も練習で来てよかった。
- J. ワードよりエクセルが難しかったです。
- J. ワード入力が早くなったのでよかった。
- J. わからないことがあっても丁寧に教えてくれたし、教え方もわかりやすかったので、すごくいい授業でした。
- J. わからないことが気軽に聞くことができなかったのが残念でした。しかし非常にためになったので受講してよかったと思います。
- J. わかりやすかった
- J. わかりやすかった
- J. わかる所とわからない所があった。
- J. 課題が詰まったときに、TA の先生が教えてくれたのでおいてけぼりにならなくて済んだのでよかった。
- J. 課題でいろんなことを覚えたけど、実際に資料などを作成するときのどのような場面で使えばいいのかわからなかった。高校でパソコンの授業がなかったから知識がなかったけど、ある程度人並みのものは身についたと思う。
- J. 課題の締め切りが早いので内容理解しないまま次の課題になるため内容理解を徹底すべきだと思います。
- J. 課題の点数配分が少々偏り過ぎる気がします。
- J. 課題提出主体の授業は自分のペースで進められるのでよかった。出席免除制度も余剰時間を有効に使えたのでとても助かった。
- J. 楽しかったです。
- J. 目が疲れるので、1 時間半は長すぎる。
- J. 基礎ということで初心者でもとてもわかりやすかった。
- J. 教員や教科書の説明が不十分なのでエクセル素人の私には非常に

つらかった。

- J. 教科書をみても理解できない点が多い。
- J. 結構身に着いたと思う。
- J. 後期でコン基礎Bになってから主にエクセルでしたが、普段使うことがないので難しかったです。
- J. 後期のエクセルの講義はほとんど独学のようなものだったので、今年からはまともな講義をしてほしい。
- J. 後期は大変だった
- J. 後半は難しかった。エクセルの技術を身につけることができた。
- J. 高校でパソコンを習っていたので簡単でした。
- J. 高校で習熟した内容を生かすことができたので、授業の内容を簡単に理解することができ有意義な時間とすることができたのでよかったです。
- J. 今の社会はパソコンを使えることが当たり前になってきているので、WordやExcelの授業はとても役に立つと思います。
- J. 今まで以上の知識が身につけて、とても役に立った。
- J. 困った時はTAの先生が優しく対応してくれるのでよかったです。
- J. 最後のほうの課題の進み具合が異常にはやくてついて行くのがつらかった。
- J. 探点ツールのミスなどが目立った
- J. 参考書を見るというだけじゃなく、もう少し教えてほしい
- J. 時間内に課題をこなすのがとても大変でした。でも、この授業でコンピュータの基礎を学べてよかったです。
- J. 自分のペースで作業ができるので、頑張れば頑張った分、楽に授業を受けれた。
- J. 自分の席の周りに友達がいなくて寂しかったです。けどおかげでパソコンは上達できたと思います。
- J. 自分はエクセル講座3級の講座を受けていたためわかったが、複数の友人に質問されたため、もう少し、とくに基本動作をもっと丁寧に教えたほうが良いと思った。
- J. 自分はパソコンは全然できなかつたけどそれなりにできるようになってよかつた
- J. 自分は最初からある程度の知識はあったのでだいぶ楽でした。ただ、わからないときはTAの人に聞いていたのですが遠くにいたりして聞けなかつたことがあったりしたのでそれをこれからどうにかしてほしいです。
- J. 説明が分かりづらすぎる
- J. 先生の説明がわかりやすかつた。
- J. 専門的なことが学べて良かつたが、エクセル等を初めて触る人にとっては丸投げな内容だったと感じた。
- J. 前期は簡単だったが、後期が難しかった。もう少し簡単なものにしてほしい。
- J. 全然パソコンの知識がなかつたのでこの講義はとても役に立ちました。
- J. 大学までパソコンはインターネットしか触ったことがなかつたので難しかったです。
- J. 中学高校とコンピュータに触れる機会が結構ありましたが、この科目が一番自分がコンピュータで必要な技能を習得できたと思います。
- J. 追いつけなくて困った
- J. 特にエクセルの使い方を詳しく覚えられたことがよかつたと思います。
- J. 特になし
- J. 特になし
- J. 難しいこともあつたが、為になつた。
- J. 難しかった
- J. 難しかった。
- J. 難しかったが自分のためになつた。
- J. 難しかったけどなんとかできてよかつた。
- J. 日常で使えるパソコン操作を教わつて良かつた。
- J. 分からないことがあつてもすぐに聞けたので、途中で詰まることなく楽しく学べました。
- J. 役に立つた

■■■■■■■■■■ 水曜日 2時限目 ■■■■■■■■■■

- K. 1教室につきTA2人では足りないと思う
- K. TAがとても親切。
- K. TAが解りやすく説明してくれて良かつた。
- K. TAが生徒の対応に対して間に合っていないかたのではないかと…
- K. TAに質問したら自分で考えてやってくださいと言われたいつものTAではなかつたです。
- K. TAの教え方がわかりやすかつたです。

- K. TAの先生のサポートのおかげである程度ならパソコンを使えるようになりました。
- K. TAの先生の指導がとてもわかりやすかつた。
- K. TAの方がしっかり教えてくれたのでわかりやすかつたです
- K. TAの方がわからないところを教えてくれたりするので疑問をすぐ解決できた。
- K. TAの方に教えてもらったので、比較的スムーズに進めることができたと思います。
- K. TAの方は親切に教えてくれたのでよかつたと思います。
- K. あまり積極的に講義にでなかつたのもっとしっかりと出ておけばよかつたと後悔しています。課題46の説明を行ったように毎回あれぐらい課題の説明をしてほしい。
- K. ある程度の基礎知識を覚えることができたのでとても役に立ち、よかつた。
- K. いままでパソコンの知識はあまりなかつたけれど、この授業を受けてまだまだ多少ではあるけれどパソコンの知識や技術が身についたと思う。
- K. いろいろな技術を学べてよかつたと思う。いつか役立てたいです。ありがとうございます。
- K. いろいろ勉強できて楽しい。先生も親切に教えてくれたから分らなくても聞けたから良かつた。
- K. エクセル・ワード共に今後必要となりそうな最低限の知識と操作方法を教えてもらい、この授業で教えてもらったことで家の人の仕事の手伝いなどでもできるようになったので、とても役に立つたいい授業だったと思う。
- K. エクセルが難しかった
- K. エクセルが難しかった
- K. エクセルが難しかった
- K. エクセルが複雑で難しかったので関数とかをもっと説明してほしいです。
- K. エクセルで使用する関数が少し高度。
- K. エクセルなどを使いこなせるようになったので、役に立つた。
- K. エクセルの関数が難しかった。
- K. エクセルの関数の使い方が難しいと感じた。
- K. エクセルの授業が難しかった。
- K. エクセルの操作がちよつと難しかった。
- K. エクセルの締め切りが内容に合わず早すぎだと思いました。また、説明などももう少し詳しく聞きたかつたです。
- K. エクセルの締め切りはもう少し延ばしても良かつたのではないかと思います。でも授業は楽しめました。
- K. エクセルの難易度が急に上がつて課題が追いつけなかつた。
- K. エクセルの複雑なやつはめんどくさかつた。
- K. エクセルは難しかったですが、役に立ちました
- K. エクセル面白かつた。
- K. エラーが細かすぎる。チェックツールに頼りすぎな気がする。いくら授業の効率化を図るためとはいえ、いちいちエラーが出るストレスがたまつてしまうのではないだろうか。
- K. この講義を履修して、ためになつた部分は大きかつたと感じる。
- K. この授業でだいぶ上達した。
- K. この授業の後半部分はかなり難問が多かつた。数値があつても合格にはならないシステムのため、徹底的に理解することができた。しかしヒントが少ない場合もあり立ち止まるが多かつた。
- K. この授業はTAもやさしいし、友達もやり方を教えてくれるので、この授業に対して疑問、批判はないです。
- K. この授業を受けたことにより、エクセルやワードの技術が上がつたと思う。個人的には音楽関連のコンピュータ授業を受けてみたい。
- K. この授業を受けて基本操作ができるようになった。パソコン自体ほとんど触ることもできなかつたのでとても自分にとって有益だった。TAさんがわかりやすく教えてくれたのでいろいろな操作が上達できたと思います。
- K. コンピューターについてほとんど知識がなかつたので、ある程度の知識を取得できたので1年間授業を受けて良かつたです。
- K. コンピューターの基礎を学ぶことができました。
- K. コンピューターを扱ううえでの基礎が身に付いたのでとても役に立つた。
- K. コン基礎のホームページに載っている関数の説明がわかりづらい
- K. たいへんだつた。
- K. ためになつた。
- K. ためになつた。
- K. ためになりました。
- K. テキストなどに載つてない部分の演習ができなかつた。
- K. とくになし

K. とくになし
 K. とても、勉強になりました。
 K. とてもためになりました。将来に生かしたいです。
 K. とてもわかりやすい解説があって、課題がやりやすかった。TAの方たちの説明もわかりやすく、とてもためになった。
 K. とても役に立ったと思う！
 K. とても役に立つ授業でした。さらに高度なコンピュータの技術を身につけたいと思いました。
 K. ないです。
 K. なかなか大変な作業も多かったですが、教員の方の助けもあり無事に単位取得できそうです。ありがとうございました。
 K. なかなか難しかったです。
 K. パソコンの基礎を覚えることができて良かった。
 K. パソコンは持ってはいたが、インターネットを開くぐらいであまり使ってこなかったのが、これからはこの授業で学んだことを活かして、つかいこなせるようにしたい。
 K. パソコンは社会に出たとき絶対使うと思うのでこの授業で少し学べてよかった。
 K. パソコンは全くできなかったが、ある程度できるようになったので、よかった。
 K. パソコンは難しかった。でも楽しかったです。
 K. パソコンを使えるようになって良かったです。
 K. パソコンを使用するうえでとても為になる事が多かったです。
 K. パワーポイントなどのわからないところがある程度分かるようになり、非常に役に立つ授業でした。
 K. ホームページだけでは理解できない関数もあったので、テキストに加えたほうが良いと思った。
 K. もう少しハイレベルなことがやりたかった。
 K. もっと真面目にやっていたらよかった。
 K. よかった
 K. よくできたと思う
 K. ワードやエクセルなどパソコンを使用する上で必要なスキルを向上させることができて良かった。
 K. ワードやエクセルの応用とグラフの作成が大してできなかった。
 K. ワードやエクセルの使い方まで自分が知らないこともこの授業で分かったので、良かったです。
 K. ワードやエクセルの知識が学べてよかった。
 K. ワードを2007でやりたかった
 K. わからないところがあったても丁寧に教えてくれた。
 K. わからないところは TA の先生が教えてくれたのであまり苦労しなかった。
 K. わかりやすかった
 K. わかりやすく、早く進められた
 K. 一年間ありがとうございました。TAの先生、苦手です。
 K. 一年間を通して役にたった。
 K. 一部難しかったところもあったけど、全部期限内にできてよかった。
 K. 家でできるし出席免除もあるのでとてもやる気がでる講義でした。
 K. 家にパソコンがないので勝手がわからず大変苦労しました。再提出の受理がなかったらどうなっていたかわかりません。ありがとうございました。
 K. 課題が簡単すぎた。他の人を見ていると、自分の課題を他の人にやってもらっているの、やり方ををもっと考えなおすべきだと思います。
 K. 課題が終われば出席免除になるところが大変良かったと思います。
 K. 課題の最後のほうのやつが難しいです。
 K. 課題の進め方説明が少しわかりづらかった。
 K. 課題の注意点を提出期限日に言う場合が多いので、1週間前には言っておきたいです。
 K. 課題は結構大変だったけど面白かったし、技術もかなり上がったと思う。だからこの授業は受けてよかったものだと思う。
 K. 課題を週ごとに配布していく方式ではなく、最初にある程度の授業としての進め方を説明したら課題をすべて解放してしまってもいいと思う。課題が解放されていないのに授業に来てしまったりしたら、無駄な時間を使ってしまうことになるし。
 K. 楽しかった
 K. 楽しかった。
 K. 楽しかったです
 K. 簡単などころもあり難しいところもあった
 K. 関数が難しかった。
 K. 基礎的なことだが、ワード・エクセル・PowerPointなど、この授業

でまた一から学べて良かったです。またどの会社でも使うことなので、もっと極めて資格を取得して、がんばっていきたいと思います。
 K. 基礎勉強ができてよかったです。
 K. 基本的な操作はもちろん少しレベルの高い内容をやって前よりは身に付いたと思います。
 K. 教室が暑い
 K. 苦手な授業だったけど、ある程度パソコンを使えるようになった。
 K. 結構楽しかった
 K. 結構色々学べたと思います。
 K. 後期のエクセルに入ってから前期に比べて課題の提出期限が遅れることがたくさんありました。テキストを読んででもわからないことが多くとても苦戦しました。コンピュータはこれから先も使っていくので、できるだけ多くの操作などを学んでいきたいです。
 K. 後半のほうになると提出期限が厳しい。
 K. 高校ではやらなかったことも学習できたのでよかったです
 K. 高校の頃のパソコンの授業よりもわかりやすかったです。
 K. 高校の時よりも役にたった。
 K. 高校の授業の復習が出来てよかったです。TAの方が課題の進捗を聞いて回るのは、少し圧力がかかり、やりずらかったです。
 K. 今の時代はパソコンを使えなければいけないと思うのでとても役に立つ授業だと思いました。
 K. 今まであまりパソコンを使えなかったので今回の講義のおかげである程度出来るようになったのでよかったです。
 K. 今までワード、エクセルともに全くできませんでした。コン基礎の授業を通して、文作成や関数を使った表計算など色々できるようになれよかったです。
 K. 再提出を認めているのは大変ありがたいと思いました。TAのわかりやすい対応は良かったです
 K. 最後のほうのエクセルが難しかった
 K. 最後のほうの課題は難しかったが、勉強になりました。
 K. 参考になった。とても自分にプラスになった。
 K. 私はパソコンが好きなので、とても楽しく講義を受けることができました。TAの先生は分からなかったところを優しく丁寧に教えていただきました。とても感謝します。
 K. 私は中学と高校でほとんどパソコンを使った授業を受けていなかったのですが、この授業を終え、キーボードを打つスピードやエクセルの基本などを習得することができたので、とても充実しました。
 K. 自分だけでは覚えにくいことを勉強したのでとても役に立った。これから必要になることなので勉強してよかったと思う。
 K. 自分には少しレベルが高かった。
 K. 自分はパソコンがあまり得意ではなく大学に来て初めてエクセルなどをやって課題が進むにつれて難しくなっていたのでもう少し詳しい説明などを書いてほしいです
 K. 質問11のようなソフトやアプリを使用する講義を受けたい
 K. 授業のスピードについていけなかった。
 K. 授業内容で解らない所があってもTAの先生が教えてくれたのでよかったです。TAの先生の数をあと1~2人増やしていただけたらより聞きやすいと思いました。
 K. 全然パソコンが使えなかったので苦労したが、ある程度使えるようになってうれしい
 K. 大きなスクリーンでの解説は大変わかりやすかったと思います。
 K. 大変だったが楽しかった。
 K. 大変でした。
 K. 大変参考になった。
 K. 段階を踏みながら学ぶことができてよかった。エクセルはあまりなかったことがなかったのもとてもためになりました。
 K. 段階的にパソコンの技術を向上させていく課題だったので初心者でもそれなりの技術を身につけたと思います。ありがとうございました。
 K. 知らなかったことを知れて良かったし、エクセルが少し好きになった。
 K. 提出課題の提示を一気にやってしまったほうが良いのでは思ってた
 K. 特にありません
 K. 難しかった
 K. 難しかったが、社会に出ても必要になってくるので、受けてよかった。
 K. 難しかったが将来のためになりそうです。
 K. 難しかったけど、TAの先生の教え方が良かった。
 K. 難しかったけど、ためになることはほとんどできるようになった。
 K. 難しかったです。
 K. 勉強になった。

- K. 勉強になりました。おかげでタイピングが少し早くなりました。
- K. 毎回の講義で社会に出た時に必要になりそうな技術ばかりを学ぶことが出来たのでとても勉強になりました。
- K. 役に立った

■■■■■■■■■■ 木曜日 1 時限目 ■■■■■■■■■■

- H. この授業を通して、パソコンの使い方がより深く理解できました。また日常的に使うきっかけになりました。この経験をこれから生かしていきたいと考えています。
- H. ワードやエクセルの基礎について学ぶことができて、良い勉強になりました。これからもパソコンを使いこなせるよう、勉強していきたいと思います。
- H. 1 講は辛い
- H. 1 講義目に入れなくてほしい
- H. Excel をほとんど使ったことがなかったのに、関数の使い方などがとても難しかった。でも、おぼえた Excel や Word の使い方は、これから本当に役に立つことばかりだったと思う。
- H. TA がとても親切だった
- H. TA がもう一人くらいいてくれると助かった。
- H. TA によって説明の仕方が違うので、すぐに理解できた TA とはいまいち理解できなかった TA が居ました。エクセルは必要ですが、最後の方の課題は難しすぎると思いました。
- H. あまり得意ではなかったが、実際にやってみて面白いなと思ったし、もっと上達したいなと思った。これからは役に立てていきたい。
- H. エクセル 2007 になってから、どこに何があるかわからなかったの、為になりました。あと、チェッカーの基準なんですが、コンピュータでチェックするので、しょうがないのかもしれませんが、式の内容まで、指定しなくてもよいと思います。VLOOKUP の範囲指定は、見出しを入れても入れなくてもできるので、どちらでも OK にした方がよいのではないかと思います。「答えが合っていれば、どちらのやり方でも良い」というように学んできたので、この授業を受け始めた時に「答えは合ってますが式が・・・」と言われた時、何が間違っているかわかりませんでした。
- H. エクセルがすごく難しかった。どうしていいかわからないときがあって苦労したが、今は悩んだ分、パソコンに関してだいぶ力がついたと思う。
- H. エクセルが課題が進んでいくごとに難しく感じた。特に課題の 46 が難しかったです。
- H. エクセルが苦手だったので、後期は大変でした。
- H. エクセルが苦手、後期は点数が下がってしまい、残念だった。しっかりとエクセルを出来るようになったかった。
- H. エクセルが難しかった。講義時間外になると TA に訊くことができなかつたのがつらかった。
- H. エクセルが難しかったです
- H. エクセルが難しかったです。なかなか思い通りにいかなくて大変だったけど、レポートを書く時などに役立ちました。
- H. エクセルが難しかったんですが、なんとかできてよかったです。
- H. エクセルが難しく、一人では出来ないところが多くなった。わからないこともあったが、少しずつ理解できるようになったので良かった。
- H. エクセルなどは大学に入り初めてやったので難しかった。朝の 1 講は辛い。
- H. エクセルに関して高校までに習った以上の知識 (複雑な関数など) を得ることができたので、この授業があって助かった。これから社会で生かすことのできる要素なので、この講義の重要性は高い。
- H. エクセルの課題がなかなか進まず、とても苦労した。
- H. エクセルの式に関してはたまによくわからないけれど、SA さんがとても施設に教えてくれていいと思います。
- H. エクセルの式計算が特に難しかった。TA があまり親切でなかった。
- H. エクセルの総合がとても難しかった。けど、今後役に立つと思った。
- H. エクセルの普段使わない関数を知ることができたことが、とても勉強になった。
- H. エクセルは難しいところがたくさんありましたが、大変役に立ちました。
- H. オフィスソフトの基本操作を学ぶことができた。
- H. キーボードを早く打てるようになった。
- H. このコンピュータ基礎を受けたことで、少しずつではありましたが、技術を習得することができました。ありがとうございました。
- H. この授業で多くの事を学びました。先輩から今後役に立つことだからしっかり覚えてほしいと言われていたので頑張りました。エクセルの難しい関数などもあり、合格するまでに苦戦することも多くありましたが、本当にためになりました。ありがとうございました。
- H. これからのためにとても役に立つ授業でした。

- H. これからのレポート作成や発表などにコン基礎を通して使えたことが多かったのでよかったと思う。
- H. コンピュータ基礎のおかげでパソコンを使用する楽しさを知った。
- H. すごい難しかった。
- H. すごくためになる授業でした
- H. ただ課題をこなすだけでつまらなかったけど、とても役に立ったと思います。あと、授業時間外に各自でやっておくことより、授業時間内の内容が濃いほうが良いと思いました。
- H. チェッカーのエラーが多かったので、改善してほしい。
- H. チェッカーの罫線の合否判定が分かりづらい。
- H. テキストが課題と連動して記載されていない点、ホームページで記載しているのにテキストにのっていない部分があり、課題をする時点で非常にやりにくかったです。テキストを生徒使えるように、コンピュータ基礎の全部の内容を記載するなどして、多少厚くてもいいので、もう少し検索の欄や、各項目のページの内容を充実してほしいです。
- H. テキストの説明文が分かりにくい部分が多かった。
- H. とても技術が身に着いたと思います。
- H. とても難しかった。教員の説明に沿って進めば合格できるが、それに気付くまでが遅かった。課題の量が多い回や複数提出のときは大変だった。Word 課題ではあまり文量を打ち込まないでほしい。Excel も似た問題が多く、面倒に感じた (量で覚えるということでしょうか)。Word と Excel の力がついたら、必修科目であり苦労した。TA の方、サポートセンターの方にはとてもお世話になった。
- H. パソコンは将来使うことになるものなので授業をうけてためになりました。
- H. パソコンを使う授業はどの授業よりも面白いです。
- H. パソコンを使用するにあたって、必要なことを学べたと思います。今後必ず役に立つと思います。
- H. もともとパソコンはあまり使わないほうだったのですが、TA さんなどが丁寧に教えてくださったので、関心が深まりました。まだ難しくわからないことが多いので、更に技術を上げていきたいと思っています。
- H. ワード、エクセルの基礎を学べて良かった。中学・高校では初心者にあまり優しい授業が展開されていたので、なかなか基礎が身に付かなかった。
- H. ワードやエクセルは社会に出てからも使えると思うので基礎から学べてよかった。今後活かしていきたい。
- H. わかりやすい説明でよく理解できた。
- H. 課題が多かった。
- H. 課題が非常に難しく感じる時もあった。だが、以前よりも扱いに慣れたと思う。
- H. 課題を自由に進められるのでよかった。課題が難しかった。
- H. 基礎的な操作、知識を得ることが出来て良かった。
- H. 後期は課題も難しく、提出期限も早かったので大変でしたが、まったくパソコンができなかった私が人並みにできるようになったのはこの授業のおかげです。ありがとうございました。
- H. 後半ちょっと難しい
- H. 高校でもエクセルを習ったが、もっとつかえるようになった。
- H. 高校で習っていないエクセルの関数を、知ることができて良かったです。
- H. 高校の時にならった関数でエクセルの問題を解いても、チェッカーでひっかかってしまい、提出までに時間がかかった。チェッカーの内容が少し細かすぎると感じました。
- H. 高校の時にやっていた授業の繰り返しのようなものだったので、少し忘れていたことを思い出せました。
- H. 高校まではタイピングに時間がかかりましたが、当講義で学習したことで以前より早く打つことが出来るようになりました。また、エクセルの知識も増えました。
- H. 高校以来のエクセルは楽しかったです。
- H. 合格点 100 は厳しい (後期)
- H. 今まで、あまり使ったことがない機能がある程度使えるようになって大変助かった。ただ、エクセル自体、ほとんど使ったことがないに等しかったので、もう少しわかりやすい説明をしてほしいです。
- H. 今まで以上のコンピュータ技術を獲得できてよかった。
- H. 今回、コン基礎で受けた内容は半分が高校の復習みたいな内容だった。また、将来のための訓練みたいな講義でとても勉強になった。
- H. 思っていたよりもパソコンの扱いは難しかった。けどこれから先、絶対に役に立つと思うので、頑張ってください。
- H. 自分のペースで進められて、全部の課題が終わったら出席免除になることがとても良かった。TA の人たちに質問したら、とても丁寧に教えてくれたので、わかりやすかった。
- H. 授業を受けて、受ける前に比べてタイピング能力の向上やエクセル

での難しい数式などが使えるようになったので良かったと思う。

- H. 出席免除あるのがいい
- H. 初めはパソコンが全然できなかったけど、できるようになってきたのでよかったです。
- H. 商業高校出身だから、エクセルはやってきたつもりだったけど、今まで使ったことのない関数を勉強できて、また知識が広がったと思った。
- H. 将来役に立ちそうです。
- H. 少し後期は難しかった。
- H. 少し難しいと感じた。
- H. 説明がゆっくりだったし、パソコン操作がよくわからない人でもわかりやすかったと思う。
- H. 説明はとてもわかりやすかった。コン基礎のHPに書いてある教科書のページ数と実際のページ数がかみ合っていなかったの、そこを直してほしかった。
- H. 前期に比べて難しかったです。もっと提出期間を延ばしてほしい。
- H. 前期のワードに関してある程度ついていけていました。後期のエクセルは高校での授業で扱ったことないような高度なものが多かったの難しかったです。
- H. 大学に入って初めて操作することばかりで、とまどいもありましたが、アドバイスなどですべての課題をクリアできました。この技能は、今後の生活にも生かしていきたいです。後半の課題は、テキストに書いていないものばかりで、自分で調べながらやりました。テキストはもっと充実してほしいです。
- H. 大学に入る前まではほとんどパソコンの操作ができない状態でしたが、この授業のおかげでかなり上達することができました。これからもっと技能を向上できるように頑張りたいです。
- H. 大学入学前までは携帯電話ばかりを使っていてパソコンを普段全く使わなかったのですが、この授業を受け始めてから、たびたび授業の復習をするようになってWordやExcelの基本または応用の力を身につけることができたと思います。
- H. 朝早くからパソコンと向き合うのはつらい。
- H. 冬季の1講目なので、正直なところ朝がきつかった。中学校や高校で習った以上のPCやエクセル操作を習得できたことは、今後の学習で活かしていきたいと思う。
- H. 特になし
- H. 難しい内容も多かったですが、その分、今自分の知識が増え、エクセルやワード操作について自信が持てるようになりました。とてもよい授業だったと思います。
- H. 難しい問題もあったがTAの方などが詳しく教えてくれて助かった。前よりもパソコンを使えるようになりました。
- H. 難しかったけど、覚えることができてよかった
- H. 難しかったけど、出来たときはうれしかったです。
- H. 難しかったです。
- H. 難しすぎてついていけない
- H. 評価方法は今のままでいいと思います。自分のペースで課題作成ができるので、とてもいいと思います。
- H. 普段個人的にはやらないことばかりなので苦労したが、楽しくできた。
- H. 普段生活していたら、習得できなかったであろう技術を習得でき、非常に満足している。
- H. 複雑なエクセルの授業を受けられて大変よかった。
- H. 分からないところはTAが分かりやすく丁寧に教えてくれたので、とても授業が受けやすかったです。
- H. 勉強になりました。

■■■■■■■■■■ 木曜日 2時限目 ■■■■■■■■■■

- A. Excelは関数をもっとしっかり使うべきだと思います。
- A. TAがよく対応してくれた
- A. TAが丁寧に教えてくれたおかげでスムーズに進んだ。キーボードが打ちにくい。
- A. TAが優しいかった
- A. TAの教え方がわかりやすかったです。
- A. TAの説明がとてもわかりやすくてよかったです
- A. TAの方々がわからない箇所を親切に教えてくれてとても助かりました。
- A. エクセルでの関数など日常では知り得ないことを学ぶことができてとてもためになりました。
- A. すごいタメになった。
- A. テキスト外のことが多かった。ので、進めにくいことが何度あった。
- A. とても面白くてためになる授業だと思った

A. パソコンの基本操作が出来るようになってよかったです。

- A. よかった
- A. 課題1つ1つをクリアするのは、大変は時間かかりましたが、課題を1つ1つクリアすることによって、パソコンの使い方がどんどんわかっていくし、パソコンを打つのもどんどん早くなっていくし、課題を復習することにより、さらに課題1つ1つのやり方がどんどんわかっていくので、コンピュータ基礎の講義を受けて良かったです。
- A. 課題が多い
- A. 課題の締め切り日について疑問があります。この講義は火曜、水曜、木曜と週に3回ありますが、なぜ木曜の課題締め切り日はもっとも短いのでしょうか。
- A. 楽しかった
- A. 高校でやったことを復習できたりと、充実していたと思います。この現代の社会ではパソコンを使えるというのは必須項目なので、この場で、少しでも学べて良かったと思います。
- A. 自分のペースで進められるのでやりやすくていいと思う。
- A. 自分の意欲や能力しだいで早く終わらすことができるのでよい
- A. 出席点を増やしてほしい
- A. 少しでもパソコンに慣れたのでよかった。
- A. 情報処理検定と少し仕様が違って、戸惑いました
- A. 石川先生の説明が丁寧でとてもわかりやすかったと思います。
- A. 説明が早く足りない。
- A. 大変めになる授業で講義を受講してよかったです。
- B. 大学に入ってコンピューター基礎の授業を受けるようになってから日に日にパソコンのことを知っていき、今では大学に入る以前よりも確実に力がついたら実感できます。もっともっとパソコンのことを知り、パソコンでは他にも、どんなことができるのかを覚えて欲しいと思いました。
- B. 90分間パソコンを使っていくのはさすがに疲れた。
- B. Excelの関数の部分において、チェッカーで合格させるのに苦労した。もう少し、グラフの詳しい説明を提示していただけると助かると感じた。
- B. TAがいらないとどうしても期限内に終わらない課題などが結構あって、大変でした。
- B. TAがとてもわかりやすく教えてくれた。ワード・エクセルの技術が身に付きよかったです。
- B. TAがわかりやすく教えてくれた。出席点が低い。
- B. TAが一部の人がかたよって質問しづらかった。
- B. TAの先生がわかりやすく教えてくれた
- B. TAの先生が足りない
- B. TAの方も優しく接してくれたので、理解するまでに時間があまりいらなかった。
- B. tukaresamadesiTA
- B. あまりパソコンは得意ではなかったが授業を受けているうちにできるよくなれたのでよかったです。
- B. いい経験になったと思います。
- B. エクセル・ワードの技能が身に付いたのでよかった。
- B. エクセルが上達してよかった。
- B. エクセルが難しかった。
- B. エクセルが難しすぎてついていけなかったです
- B. エクセルでは、高校で習った範囲以上のものも出てきて、さすが大学だなと思った。
- B. エクセルの関数が難しかった。もっとわかりやすい説明を作ってほしい。
- B. エクセルの使い方が学べてよかったです。
- B. かなりパソコンに慣れることができた。
- B. この講義で学んだことは毎日の生活の中で、ものすごく活かされているので、これからも様々な操作方法を学びたいと思っています。
- B. この授業はこれからの時代必要になると思う。だからこれからも受講していきたい。
- B. この授業はコンピュータを使う上で最低限使えたら便利だな、と思うことをしていた。内容は結構簡単だと思いました。
- B. この授業は基礎から応用へと移るので、知らないことも覚えやすかったです。ですが、テキストだけだとわからないところも多々ありました。TAも2名しかいないのですぐに質問することができず、わからないで課題期限が過ぎるものもありました。この授業を受講している学生は少なくありませんし教員の方々も大変だと思いますが、もう少し1つ1つの課題へのアドバイスやヒントがあると助かります。
- B. この授業を受講してパソコンの技術を向上させることができた。TAのサポートが少なく感じた。
- B. これから使っていくパソコンの使い方を教えてもらい、大変役に立

- った。
- B. これから役に立つと思います。
 - B. コンピュータが詳しくなれてよかった。
 - B. コンピュータについて詳しくなったのでよかった。
 - B. コンピュータに関する知識が身に付きこの先役に立つと思うので、受講してよかったと思っています。
 - B. コンピュータの主な基礎がよくわかったのでこれから生かしていきたい。
 - B. コンピュータを学べたのでよかった
 - B. すごく楽しかった。役に立つ勉強ができてよかった。
 - B. たとえばエクセルでのサム関数の範囲指定のちょっとした違い（答えはあってるのに違う）のは、おかしいと思う。自分で答えを出してできたのだから正解にすべき。なんでもかんでも大学のやり方ではないといけないということ自体が違うとおもいます。
 - B. ためになった
 - B. とくになし
 - B. とてもためになりました。
 - B. とてもわかりやすくなるための授業でした。
 - B. とてもわかりやすくてよかったと思う。
 - B. とても課題が多くて大変だったけど、パソコンの技術が身に着いたのでよかったです。
 - B. とても難しいのもっと簡単にしてほしい出席点が低いのもっと高くしてほしい
 - B. とても役に立ちました。
 - B. とても役に立ちました。教え方も親切で面白かったです。
 - B. とても役に立った。
 - B. パソコンが以前よりも使えるようになった。
 - B. パソコンスキルの上昇に繋がるものとなった。この身に付いた技術を生かして、レポート等の課題に取り組んでいきたい。
 - B. パソコンについての基礎を学ぶことができました。もっとパソコンについて詳しく学びたいと思いました。
 - B. パソコンの基礎力が身に付き大変役に立った
 - B. パソコンの技術が上がった。
 - B. パソコンの技術を向上させることができたので満足しています。TAの先生もわかりやすく教えてくれるし、とてもいい授業だと思います。
 - B. パソコンの技能が身に付くので、とても良い授業です。来年度も是非受講したいと考えています。
 - B. もう少し各学部ごとに専門的なワードの書き方、使い方などを授業にしてみてもどうでしょうか？
 - B. もっとできるようになりたい
 - B. もともと持っていた技術をさらにレベルアップできたと思う
 - B. よかったです。
 - B. レベルがたかくて出来なかった。
 - B. ワードは簡単にできたが、エクセルは何度も繰り返し、やらなくてはできなかった。そのおかげでエクセルのことを忘れずにいられると思う。来年もできれば、コンピュータ基礎の授業を受けたい。
 - B. ワードやエクセルをやり、知識が身につけてよかった。
 - B. わかりやすいアドバイスでした。
 - B. わかりやすかった
 - B. わかりやすかった
 - B. わかりやすくてよかった。
 - B. 一つのことには時間をかけたほしい。
 - B. 課題 40~46 はもっと時間がほしかった。
 - B. 課題とかは正直厄介でしたが、パソコンを操作することは別に嫌いではないので、この講義を受講できてよかったです。
 - B. 楽しかった
 - B. 楽しくできた。
 - B. 楽しく授業を受けています。難しいところもありますが何とか頑張っています。
 - B. 楽だった
 - B. 基本のことからおさらいできるからとてもためになりました。
 - B. 基本的操作を学んだ
 - B. 教科書を見ながらだとなんとなく出来る気がする。TAの先生には大変お世話になりました。
 - B. 元々パソコンが苦手だったから苦痛だった。
 - B. 後期はとても難しかったです。
 - B. 後半の問題が難しかった。
 - B. 高校でもエクセルなどの授業はありましたが、この講義で更なる技術を身につけることができ、本当に良かったです。また、この講義は自分のペースで課題をクリアしていくことが出来るので、楽しめながら出来ました。

- B. 高校でやったことの応用や復習だったのでやりやすかったが、パソコンのソフトが習ったときより新しいものになっていたので多少困難なときもあった。
- B. 高校でやった時の復習みたいな感じだった。けどあまりできなかったのが残念。
- B. 高校のときの復習ができたのでよかったかなと思う。
- B. 今のままの授業で良いと思う。
- B. 今まであまりパソコンを使う機会がなかったのですがコン基礎を通してパソコンが少し身近なものになりました。
- B. 今後、どこに行ってもPCを使う作業は増えてくると思うのでこの授業はためになったと思います。また、ホームページや先生の説明やTAの説明がわかりやすかったです。
- B. 今後の人生で活用できる講義だったので受講できてよかった。
- B. 今後必要になると思われることを学習できてよかった。
- B. 最初は文章を書くだけでも、時間がかかっていましたが、やっていくうちに早くなり、ある一定のスピードでできるようになり、たいへんうれしいです。
- B. 四月のころより、ワードやエクセルの基本操作が身につけてよかったです。
- B. 自分のパソコンのスキルアップに大変役立ちました。
- B. 自分のペースで進められるので良いと思う。
- B. 自分のワードやエクセルの能力を今までより向上することができたので、こと講義を受けることができて良かったです。
- B. 就職するときにパソコンはある程度できていたほうが良いから、すごく役立ちます。来年もぜひ受講したいです。
- B. 出席点を増やしてほしい。
- B. 初めはキーボードを両手で打てず、Wordで文字を打ち込む程度しかできなかった。だけど、授業を受けてるうちに両手ではやく文字を打てるようになって、エクセルの基本操作や、グラフ作成などできるようになり、とてもためになりました。
- B. 将来に役に立つ授業だった。
- B. 将来役に立つことが学べたと思う。来年度も時間が合えば受講したい。1年間ありがとうございました。
- B. 前期は比較的簡単だったが今回のエクセルは意外と難しかった。
- B. 大変自分のためになった。
- B. 大変勉強になった。
- B. 特になし
- B. 難しい
- B. 難しいのもあったが、楽しくできた。
- B. 難しい課題もあったけど、たくさん学ぶことができました。
- B. 難しかった。
- B. 難しかったがTAの方たちにアドバイスをもらったおかげでなんとかできました。
- B. 難しすぎて、ついていけない
- B. 分かりやすい講義でした。
- B. 勉強になった
- B. 毎週課題提出があるので、それを目標にして頑張ることができる良い授業だと思います。
- B. 様々な技能をたくさん学ぶことができてよかった。前より効率的にPCを使えるようになった。

全体：669件

よかった：96件	ために：40件
良い、よい、いい：44件	多く、多か、多す：22件
楽し：31件	わかりや：49件
面白：7件	わかり（に、ず、づ）：5件
できな：28件	理解できた：2件
難し：140件	理解できな：4件
大変：48件	TA:97件
簡単：12件	親切、丁寧：28件
役に立：43件	先生、教員：39件
身につ：15件	

3. 2008 年度授業評価アンケートの分析

2009年5月14日

札幌学院大学 全学教務委員会

2008年度に行われた授業アンケートの集計と分析を行った結果を報告する。学科別の各設問の回答割合をはじめとする基本的な集計結果を示した。そして各回答項目に一定の数値を付与して科目ごと、学科ごとの総合評価を行った。また多変量解析の手法である対応分析法によって、多重クロス表を分析した結果も示している。この分析法により、各設問の回答項目間や学科間の位置関係を把握することができる。これらの結果は、学生の満足度を測る一つの指標となるであろう。単純集計とクロス表の羅列のみではなく、総合的な評価として対応分析法で分析した結果も示す。

目次

1. アンケートの設問
2. 学科別集計
 2. 1 学科別回答者数集計
 2. 2 履修登録者数と回答者数の割合
3. 設問別回答数・割合
 3. 1 各設問の回答割合
 3. 2 各設問の学科別回答
4. 評価得点
 4. 1 学科別の評価得点
 4. 2 評価項目の分割による集計
5. 対応分析法によるアイテムとカテゴリの関係の探索
 5. 1 概要
 5. 2 図の解説
 5. 3 読み取れること
6. 調査方法に対して
 6. 1 今回の調査について
 6. 2 コメント

2008年度 授業評価アンケートの分析

1. アンケートの設問

設問 設問内容 (アイテム)

- 設問 01 あなたのこの授業への出席率は何パーセントくらいですか
 設問 02 設問1で4, 5, 6を選んだ方、その理由は何ですか
 設問 03 この授業であなたは普段どの辺りの席に座って受講していますか
 設問 04 履修登録時にこの授業を選択した理由で一番大きいのは次のどれですか
 設問 05 あなたは、授業中は集中して教員の話や説明を聞くなどして意欲的に授業に取り組んでいますか
 設問 06 あなたは授業時間以外にも授業に関する学習(予習・復習・文献調査など)を積極的に行なっていますか
 設問 07 あなた自身は授業時のマナー(私語・携帯電話・途中入退室をしない等)に気を配っていますか
 設問 08 この授業内容の難易度はあなたにとって適切ですか
 設問 09 この授業の進度はあなたにとって適切ですか
 設問 10 この授業内容はシラバスの記述内容に沿ったものですか
 設問 11 教員は学生の私語をきちんと注意していますか
 設問 12 授業時間(90分)はきちんと守られていますか
 設問 13 教員の授業への取組・指導は熱心なものに感じられますか
 設問 14 教員の説明はわかりやすいものですか
 設問 15 教員は学生の質問や発言に対応していますか
 設問 16 教室サイズは受講者数に対して適切だと思いますか
 設問 17 教員の用意した補助教材(配布資料や視聴覚教材など)は授業の理解に役立っていますか
 設問 18 この授業を通して重要な知識や技能を獲得できると思いますか
 設問 19 この授業は、一般的な意味で刺激となっていますか
 設問 20 この授業を受けてよかったと思いますか
 設問 21 この授業をより良いものとするため、建設的な提案があれば自由に書いてください。

設問	回答項目 (カテゴリ)
設問 1	1 ほぼ 100% 2 80%以上 3 60%以上 4 40%以上 5 20%以上 6 ほとんど出ていない
設問 2	1 興味関心が薄れた 2 授業がつまらない 3 必要のないことに気が付いた 4 自分自身の問題(他の授業も欠席・遅刻ぎみ) 5 授業に出なくても単位が取れると判断した 6 何となく
設問 3	1 前の方 2 中段あたり 3 後ろの方 4 座席指定されている 5 日によって異なる 6 該当しない質問である
設問 4	1 興味関心があった 2 役に立ちそうだった 3 この単位が必要だから 4 時間割が空いていた 5 友人・知人が勧めたから 6 何となく
設問 5～20	1 強くそう思う 2 そう思う 3 どちらともいえない 4 あまりそうは思わない 5 全くそう思わない 6 この授業には該当しない質問である

2. 学科別集計

2. 1 学科別回答者数集計

表 2.1

学科等	回答者数 (人)	割合	有効回答	有効回答の割合	有効回答数割合(学科別)
商学科	661	16.5%	561	15.3%	84.9%
経済学科	462	11.5%	431	11.8%	93.3%
法律学科	674	16.8%	619	16.9%	91.8%
社会情報学科	342	8.5%	320	8.8%	93.6%
英語英米文学科	281	7.0%	253	6.9%	90.0%
人間科学科	888	22.2%	836	22.9%	94.1%
臨床心理学科	359	9.0%	327	8.9%	91.1%
こども発達学科	337	8.4%	309	8.5%	91.7%
全体	4004		3656		91.3%

※「有効回答」とは、回答項目のほとんどが明らかに意図的に同じ数字が並んでいない回答を指す。

2. 2 履修登録者数と回答者数の割合

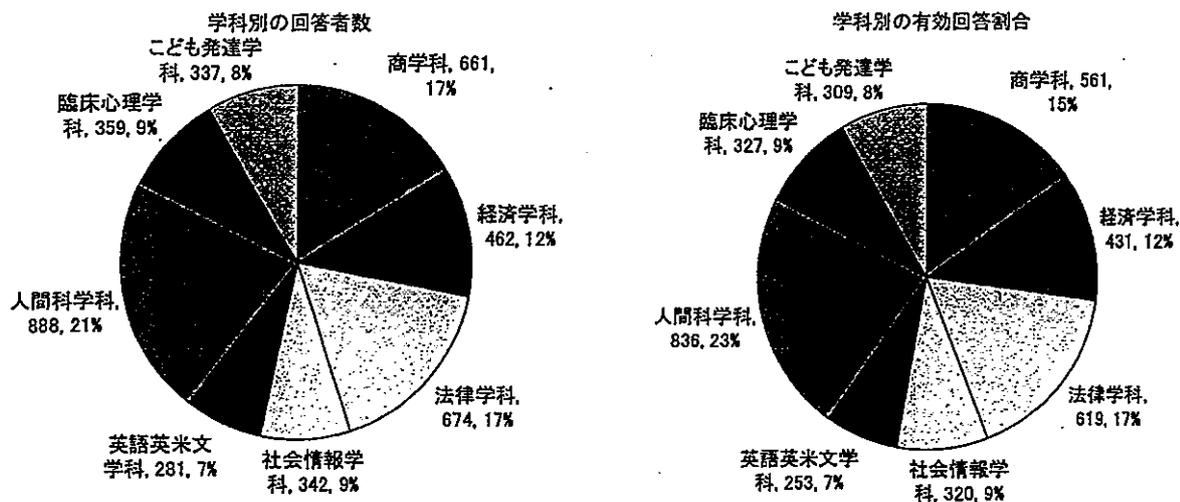


図 2.1

※ 以下の集計や分析では有効回答を対象とした。

3. 設問別回答数・割合

3. 1 各設問の回答割合

図 3.1 に各設問の回答項目の割合を示す。図 3.2 にはカテゴリ 1 と 2 の回答数を足しあわせて、肯定的な回答比率が高い順に設問を並べ替えた図を示しておく。また、3.2 節には学科別の各設問の集計した図を示す。

図 3.1, 図 3.2, および学科別に集計した回答比率のグラフから読み取れることは以下の通りである。

- (1) 設問 1 は回答者（学生）が自分自身の出席状況をかえりみた設問である。この結果から、回答は約 85% の学生が、80% 以上出席していることから、出席に関してまじめな学生が答えているといえる。全数調査を前提とするサンプリング計画のない回答者で占められ、偏りのある調査であるので、本調査結果は出席にまじめな又は強制されている学生の偏りとして認識するのが妥当かと思われる。
- (2) 設問 3 は座席位置であるが、比較的前方に座っている学生が半数を超えており。実際の教室の着席行動を考えると、やはりこのアンケートに回答している学生は前方に座る比較적まじめな学生の回答が多いということであろう。
- (3) 設問 4 は選択の理由であるが、人文学部で単位が必要と答える割合が多いようである（個別の学科のカリキュラムの特性かもしれないが）。
- (4) 設問 6 は時間外学習であるが、社会情報以外はほぼ似ている回答傾向で、自主的な学習をした学生は 4 割程度である。
- (5) 設問 7 は授業の環境作りへの協力で、8 割の学生が協力していることがわかる。
- (6) 設問 8 の授業の難易度では、こども発達学生の 8 割近くが難しいと感じている。
- (7) 設問 14 の教員の説明に関して、社会情報の学生はわかりやいと感じている比率は低いようだ。それに続いて臨書心理、経済と続いている。
- (8) 設問 15, 16, 17 では英語英米の学生の肯定的回答が比較的多い。
- (9) 設問 18, 19, 20 の受講後のの総括的な設問では経済、社会情報、臨床心理が低く、英語英米とこども発達が高い。

各設問の回答率(回答数)

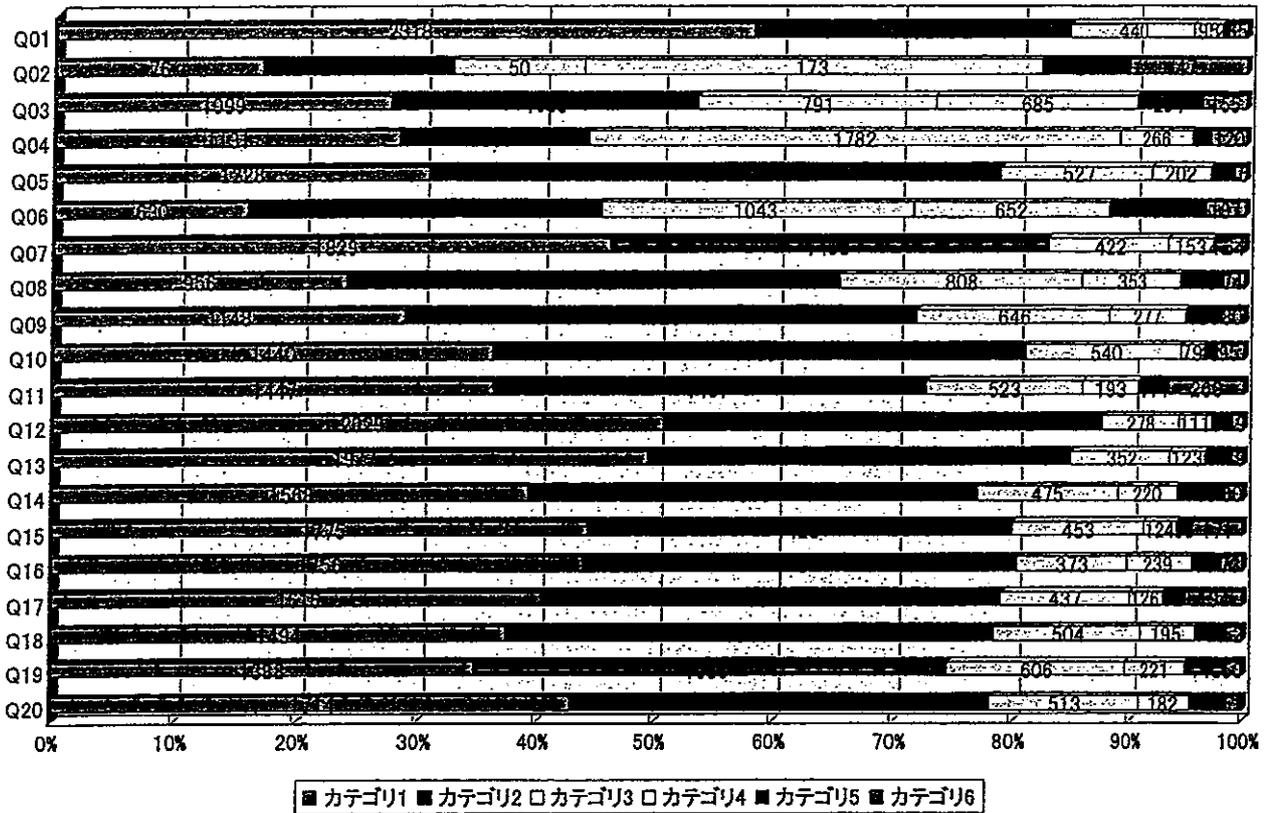


図 3.1

各設問の回答率(回答数:カテゴリ1, 2の回答比率が多い順)

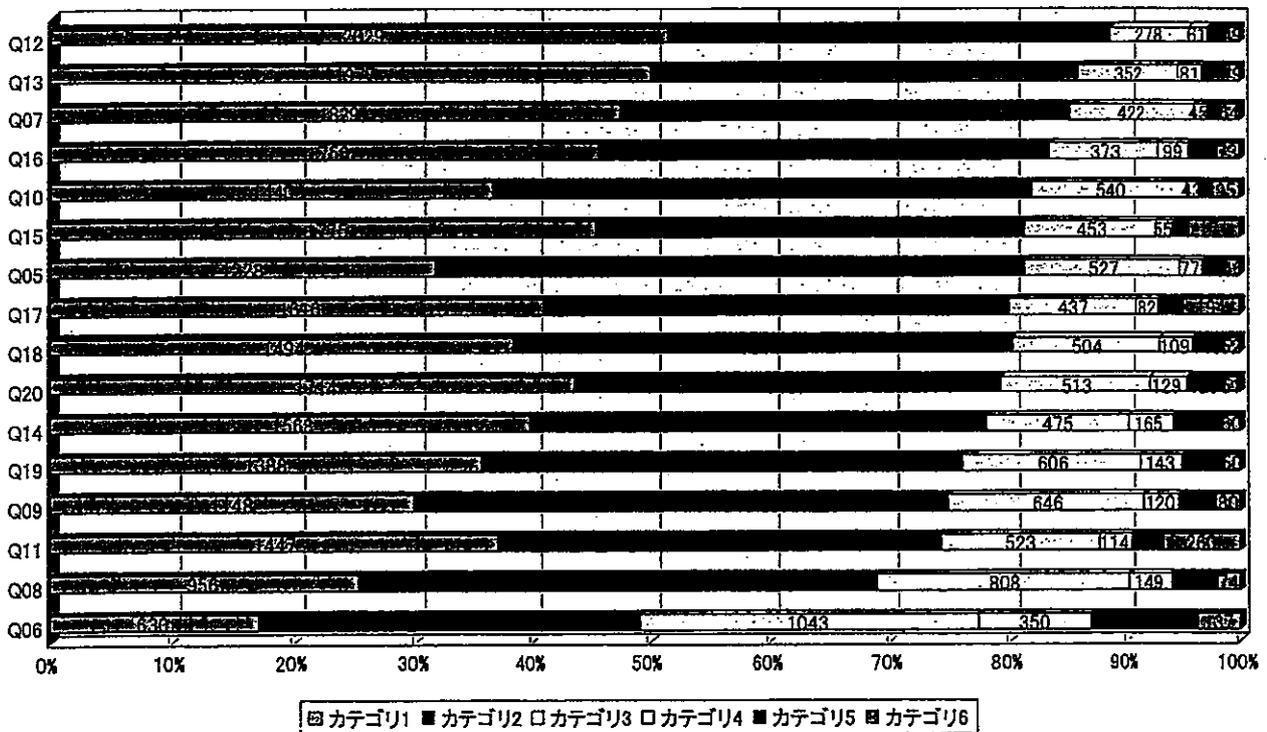


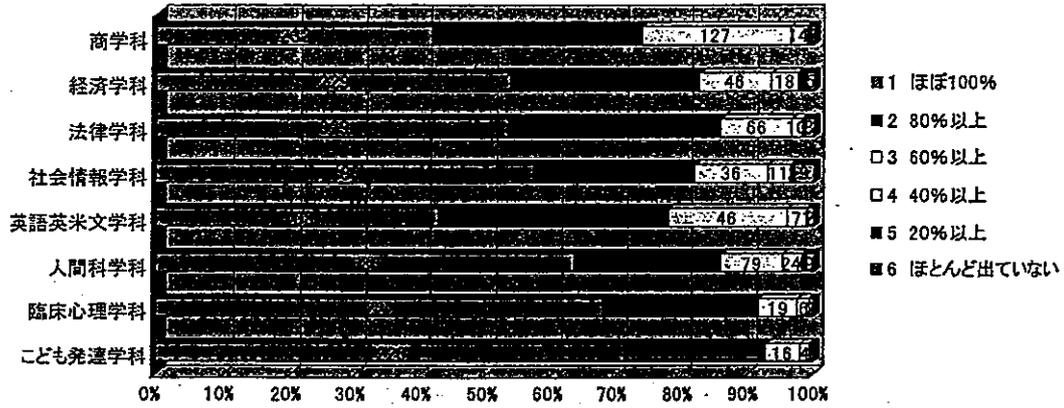
図 3.2

表 3.1

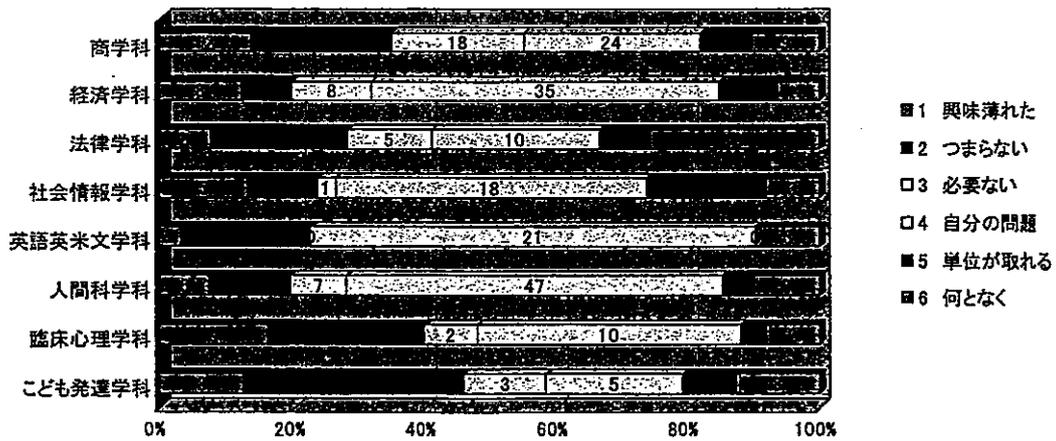
設問 21	自由記述数	空欄数
度数 (割合)	282(7.0%)	3722(93.0%)

3. 2 各設問の学科別回答

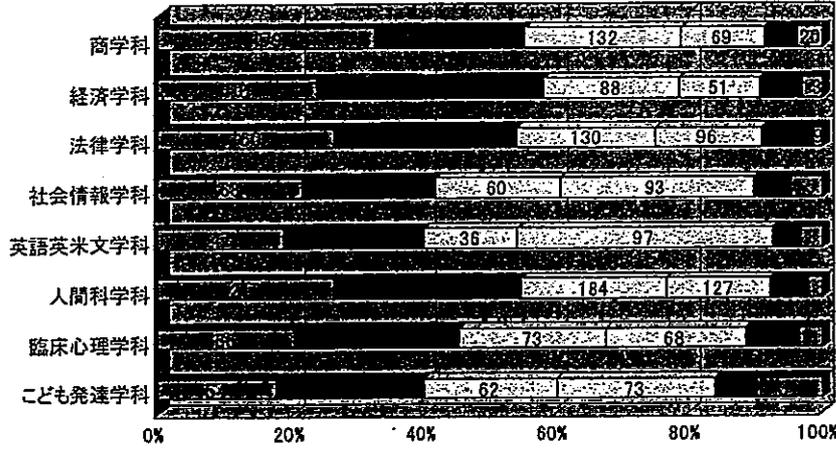
Q1 あなたのこの授業への出席率は



Q2 設問1で4, 5, 6を選んだ理由は

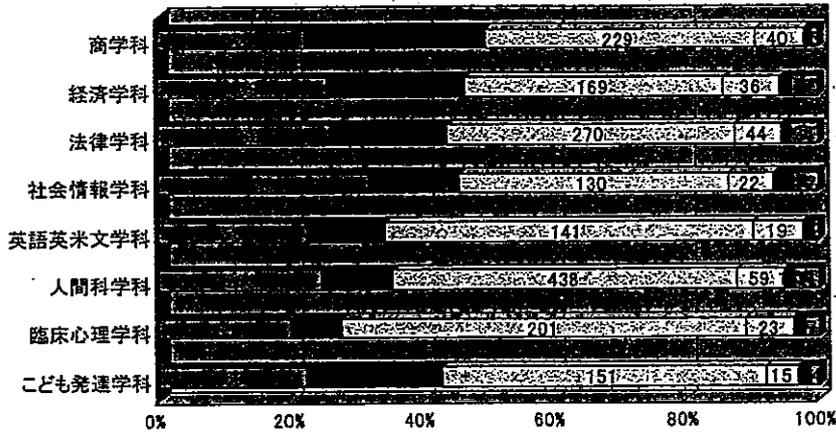


Q3 どの辺りの席に座っていますか



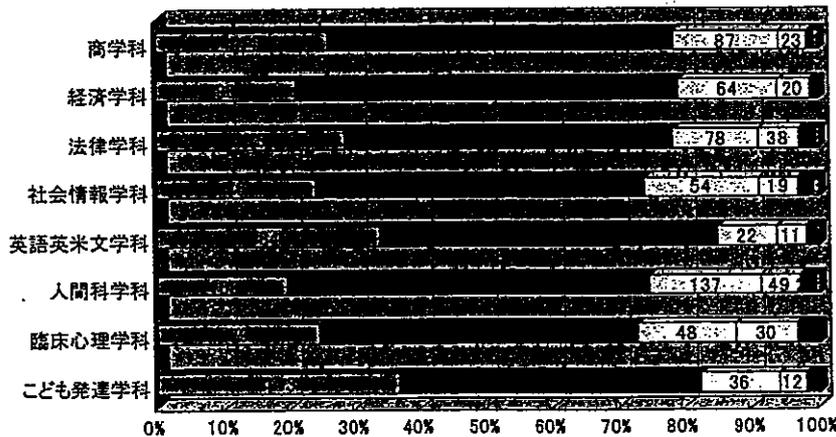
- 1 前の方
- 2 中段
- 3 後ろ
- 4 座席指定
- 5 日により異なる
- 6 該当しない質問

Q4 選択した理由



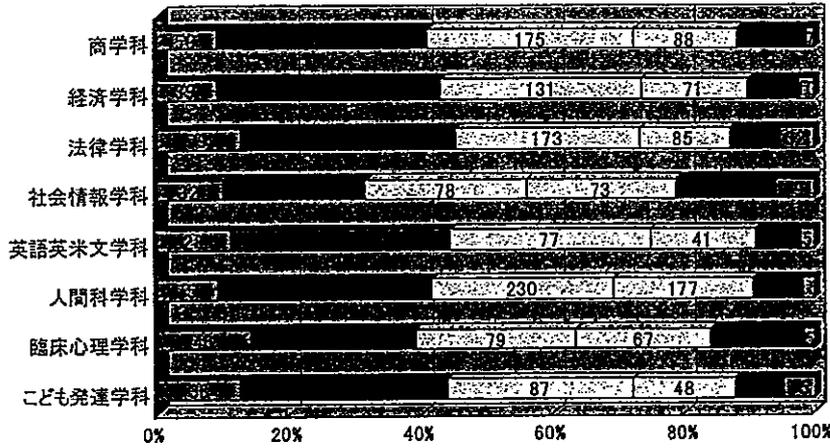
- 1 興味関心
- 2 役に立ちそう
- 3 単位が必要
- 4 時間割が空いていた
- 5 友人知人が勧めた
- 6 何となく

Q5 意欲的に授業に取り組んだか



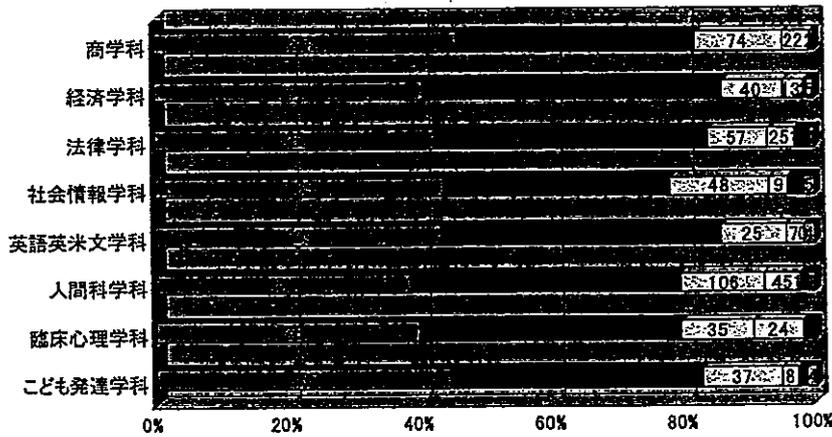
- 1 強く思う
- 2 そう思う
- 3 どちらともいえない
- 4 あまりは思わない
- 5 全く思わない
- 6 該当しない質問

Q6 授業時間以外の学習を積極的に行なったか



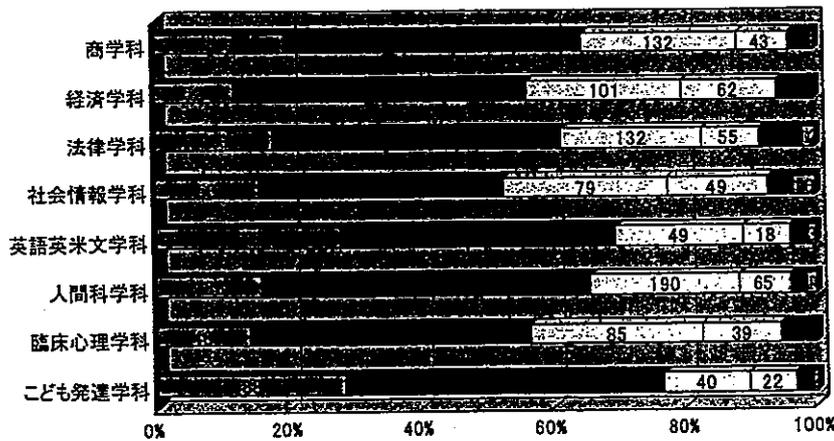
- 1 強く思う
- 2 そう思う
- 3 どちらともいえない
- 4 あまりは思わない
- 5 全く思わない
- 6 該当しない質問だ

Q7 授業時のマナーに気を配ってたか



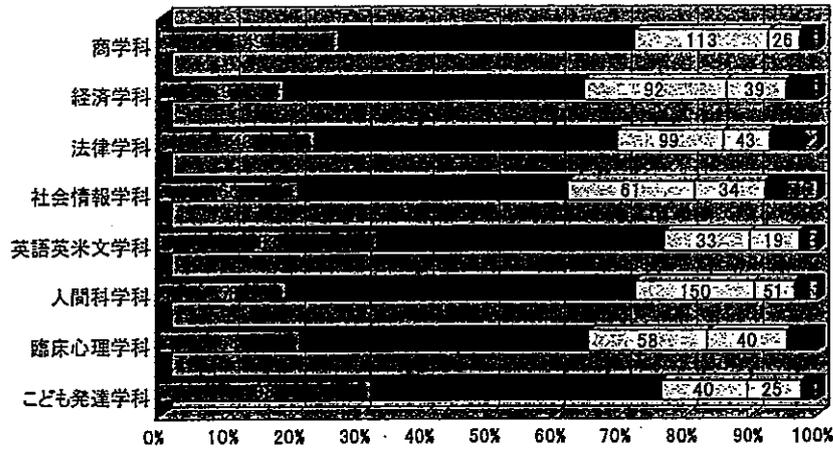
- 1 強く思う
- 2 そう思う
- 3 どちらともいえない
- 4 あまりは思わない
- 5 全く思わない
- 6 該当しない質問だ

Q8 授業内容の難易度は



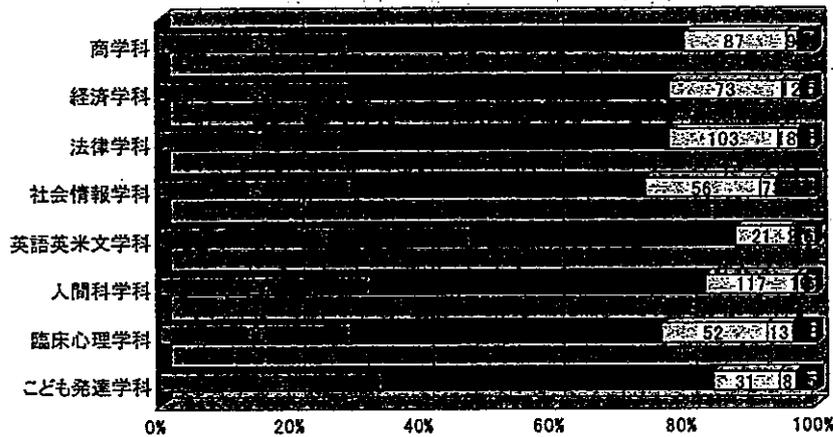
- 1 強く思う
- 2 そう思う
- 3 どちらともいえない
- 4 あまりは思わない
- 5 全く思わない
- 6 該当しない質問だ

Q9 授業の進度は適切ですか



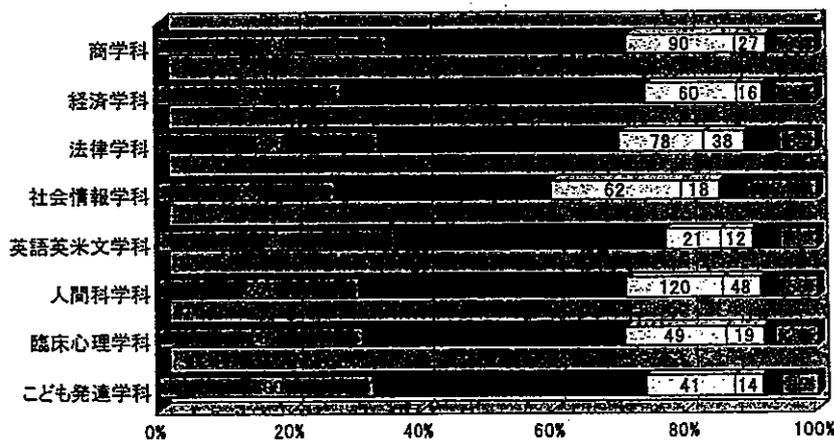
- 1 強く思う
- 2 そう思う
- 3 どちらともいえない
- 4 あまりは思わない
- 5 全く思わない
- 6 該当しない質問だ

Q10 授業内容はシラバスに沿っていたか



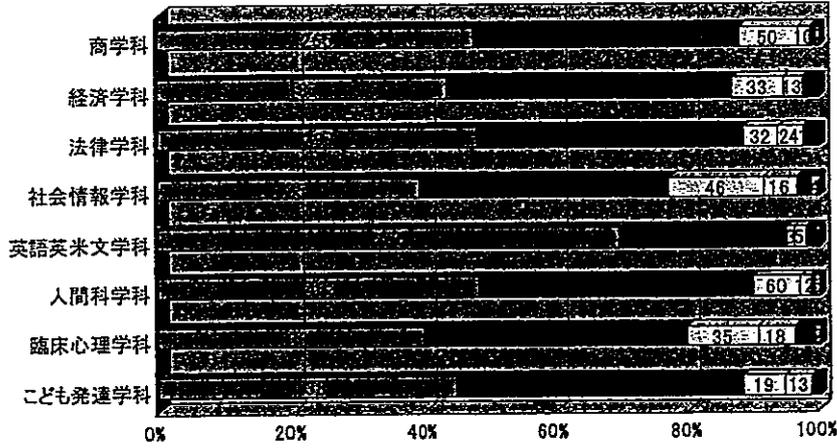
- 1 強く思う
- 2 そう思う
- 3 どちらともいえない
- 4 あまりは思わない
- 5 全く思わない
- 6 該当しない質問だ

Q11 教員は学生の私語を注意したか



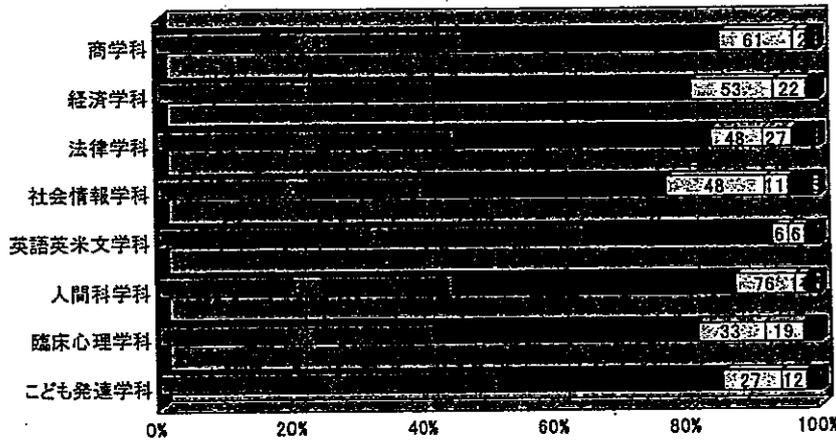
- 1 強く思う
- 2 そう思う
- 3 どちらともいえない
- 4 あまりは思わない
- 5 全く思わない
- 6 該当しない質問だ

Q12 授業時間が守られたか



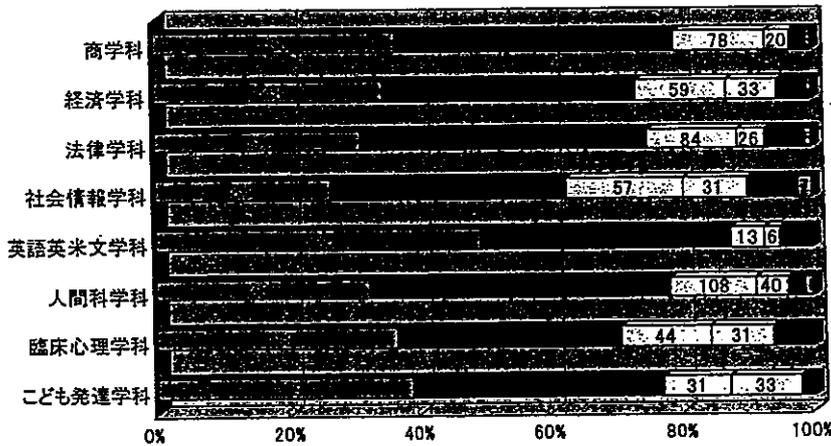
- 1 強く思う
- 2 そう思う
- 3 どちらともいえない
- 4 あまりは思わない
- 5 全く思わない
- 6 該当しない質問だ

Q13 教員は熱心だったか



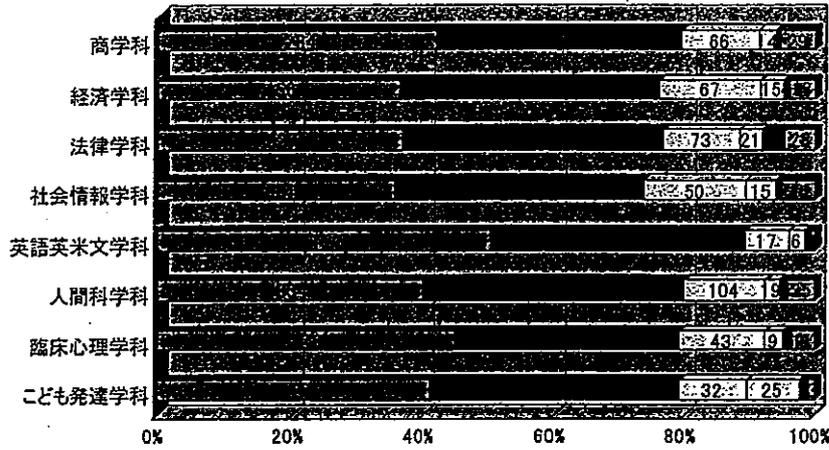
- 1 強く思う
- 2 そう思う
- 3 どちらともいえない
- 4 あまりは思わない
- 5 全く思わない
- 6 該当しない質問だ

Q14 教員の説明はわかりやすいか



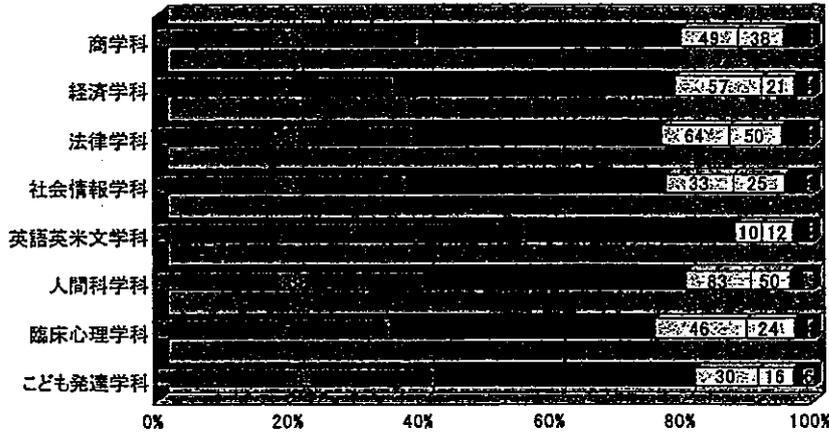
- 1 強く思う
- 2 そう思う
- 3 どちらともいえない
- 4 あまりは思わない
- 5 全く思わない
- 6 該当しない質問だ

Q15 教員は学生の質問に対応したか



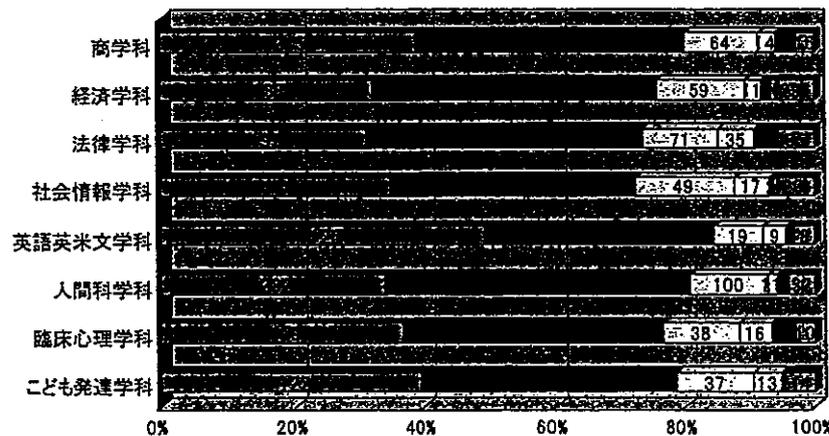
- 1 強く思う
- 2 そう思う
- 3 どちらともいえない
- 4 あまりは思わない
- 5 全く思わない
- 6 該当しない質問だ

Q16 教室サイズは適切か



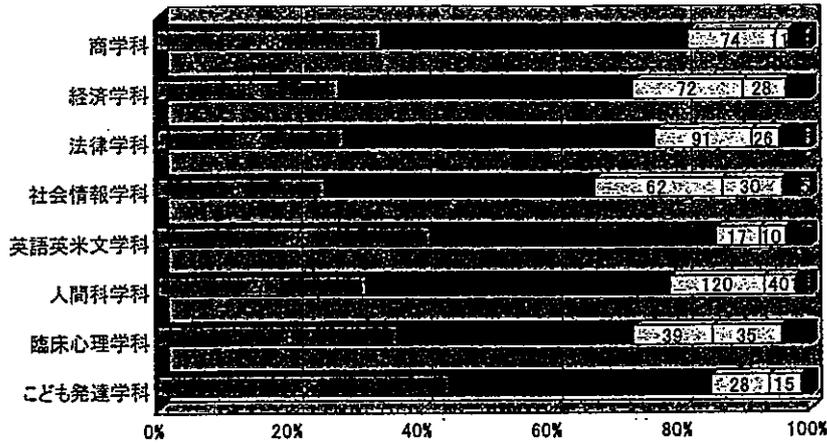
- 1 強く思う
- 2 そう思う
- 3 どちらともいえない
- 4 あまりは思わない
- 5 全く思わない
- 6 該当しない質問だ

Q17 補助教材は理解に役立つか



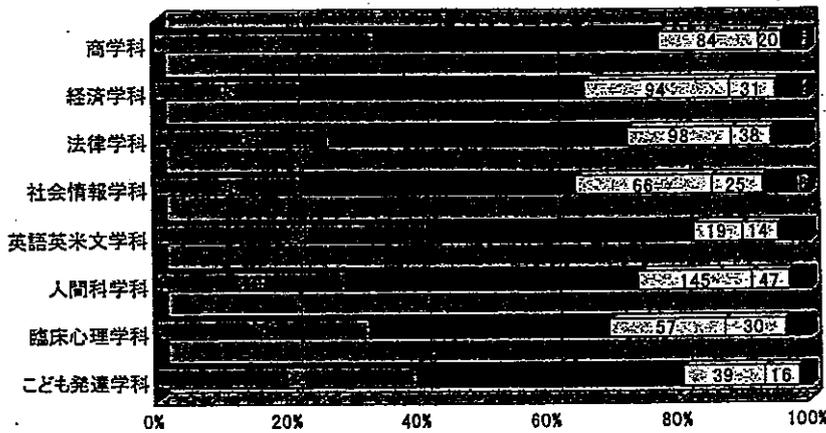
- 1 強く思う
- 2 そう思う
- 3 どちらともいえない
- 4 あまりは思わない
- 5 全く思わない
- 6 該当しない質問だ

Q18 重要な知識や技能を獲得できたか



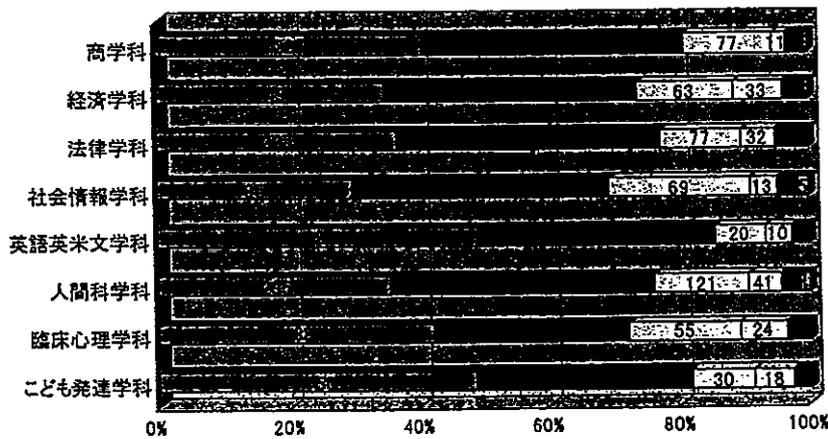
- 1 強く思う
- 2 そう思う
- 3 どちらともいえない
- 4 あまりは思わない
- 5 全く思わない
- 6 該当しない質問だ

Q19 授業は刺激となったか



- 1 強く思う
- 2 そう思う
- 3 どちらともいえない
- 4 あまりは思わない
- 5 全く思わない
- 6 該当しない質問だ

Q20 授業を受けてよかったか



- 1 強く思う
- 2 そう思う
- 3 どちらともいえない
- 4 あまりは思わない
- 5 全く思わない
- 6 該当しない質問だ

4. 評価得点

4. 1 学科別の評価得点

総合的な評価をするために、回答項目で「強くそう思う」を5点、「そう思う」を4点、・・・、「全くそう思わない」を1点、その他を0点として、設問あたりの平均値を算出し、回答者の評価得点を算出した。これにより大雑把ではあるが科目の総合評価の傾向を見ることができる。

<注意>本来このような得点化は統計学の規程事項である。しかし、回答の大雑把な傾向をとらえるためには許容され、後で示す対応分析の結果により得られる得点傾向とそう大きく違わない。以下に示す微妙な数字の際には大きな意味はないが、全体の傾向を読み取ることが肝要。

図 4.1 は全回答者に対する学科別の評価得点である。評価得点は「人高社低」（人文学部が高く、社会科学系学部が低い）という傾向があり、これは前回もそうであった。また社会科学系学部では商が高く、社会情報は評価得点が低いということが見て取れる。

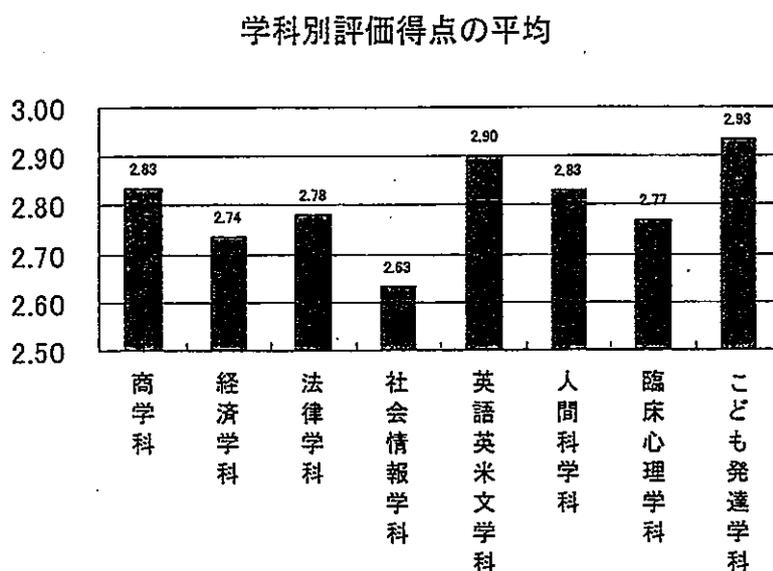


図 4.1

4. 2 評価項目の分割による集計

学生自身の評価と教員に対する評価の関係を見るため、回答項目を、

[設問 A 群] 学生が自分の評価した設問：設問 1, 5～7

[設問 B 群] 学生が教員の評価した設問：設問 8～15, 17～20

のように 2 群に分けて、回答者ごとに各群の評価得点の平均点を算出した。そして、設問 A 群と B 群の得点を比較し、「A 群の得点 > B 群の得点」と「A 群の得点 < B 群の得点」の割合を比較し、それを学科別に集計した。

以下のことが読み取れる。商学を除く社会科学系学部の学生は教員への評価が高い割合と自分への評価も高い割合は同程度である。商学と人文学部は自分への評価のほうが高いことが伺える。これは前回の傾向と全く逆である。

学生自身の評価と教員への評価

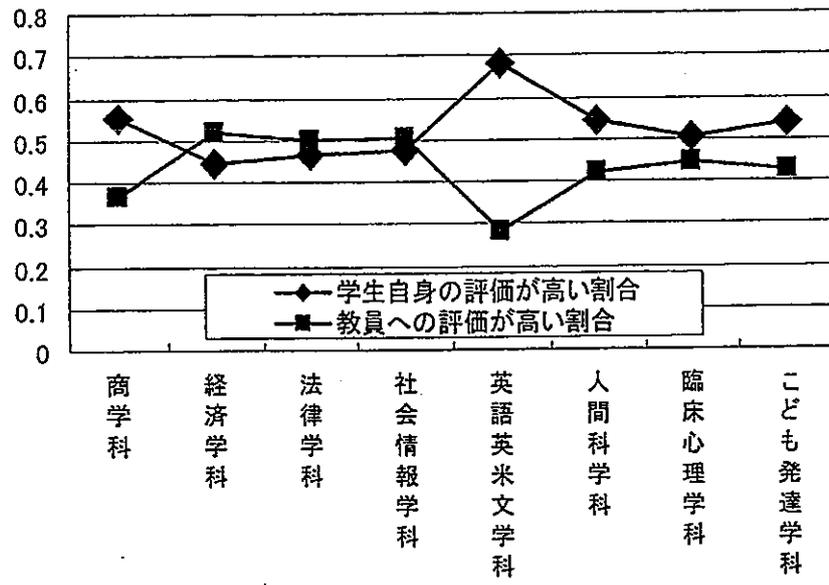


図 4.2

5. 対応分析法によるアイテムとカテゴリの関係の探索 (対応分析法=数量化 III 類と同等手法)

5. 1 概要

本調査のようなアンケート調査では、対応分析法等により設問の回答項目間の関係を探ることが行われる。この分析法は質的データに対する主成分分析法で、多重クロス表を直接分析する多変量解析の手法である。ここでは、カテゴリは質問項目の回答項目を指す。

以下に示す図 6.1 は対応分析法の結果で、設問 1～20 の回答項目や各学科の関係を示すものである。図 6.1 内の楕円部分に各学科が布置されていて、それを拡大したものが図 6.2 である。また、図 6.3 には昨年度の学科の布置図である。

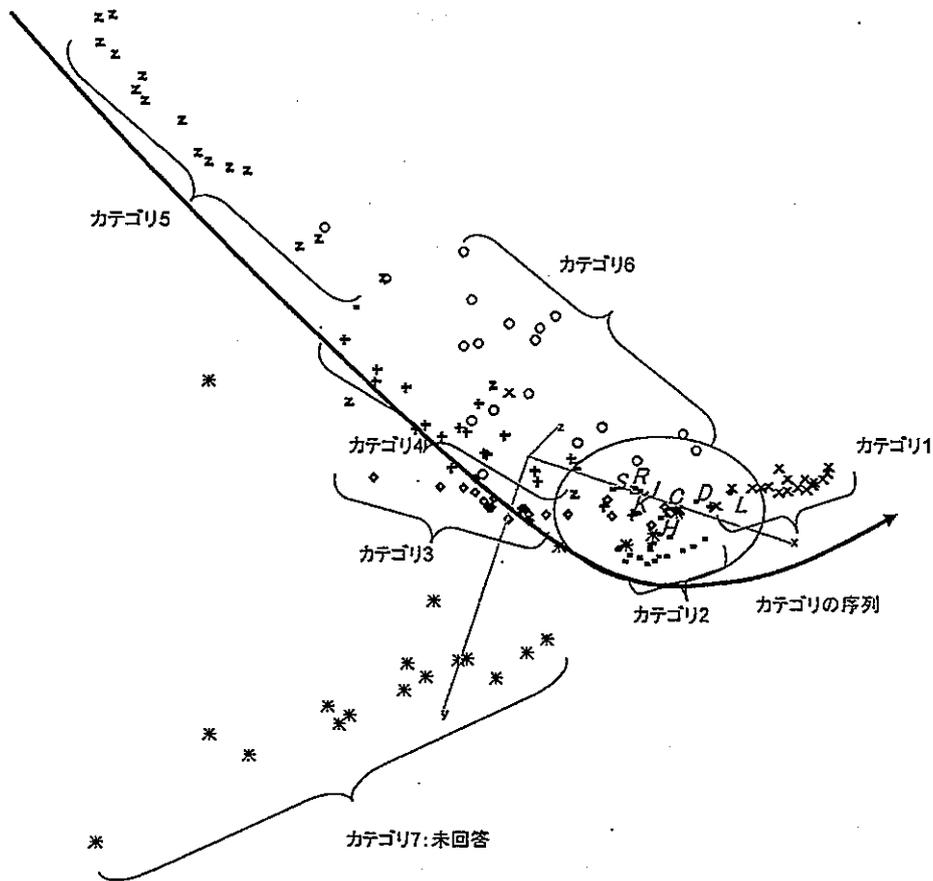


図 5.1

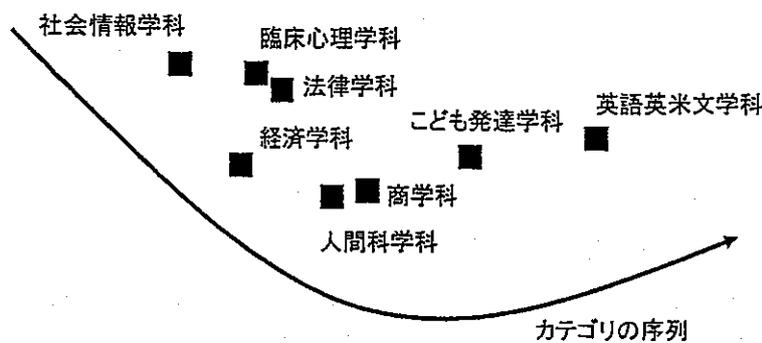


図 5.2 (2008 年度 : 図 5.1 の楕円内の拡大)

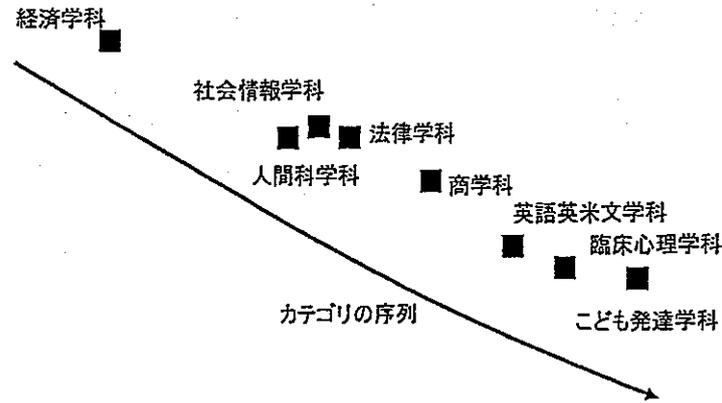


図 5.3 (2007 年度)

5. 2 図の解説

- (1) このデータは、21 のアイテム（設問項目と学科）に対して多重クロス集計表を作成し、これに対して対応分析法を適用して、各カテゴリに数量を付与したことになる。この図はその高次元のデータのより情報量の多い 3 次元空間へ射影したものである。これは全体の情報量の約 15% を表現している。図 5.1 内の x , y , z は射影 3 次元空間の軸名である。
- (2) 図 5.1 の中の点は各カテゴリを表し、図中の近い 2 つの点は、同時にそれらのカテゴリを選ぶ傾向があることを示す。
- (3) カテゴリ 1, カテゴリ 2, ... で示すものは、各設問の回答番号である。カテゴリ番号ごとに直線的な並びでグループが形成されている。
- (4) 太線の矢印は各アイテムのカテゴリの序列の方向を示す。カテゴリ番号が若いほど各設問で評価が高いことを示すことから、このような矢印を描くことができる。

5. 3 読み取れること

- (1) 各設問の回答項目（カテゴリ）の間には何らかの序列がつけられる。
- (2) 学科の並びは、5 節で示した図 5.1 の学科別の評価得点の大きさの順とほぼ合致している。しかし、その並びは前年度とはかなり異なっているようだ。回答数の違いや情報の圧縮の程度が前年度とは異なることが大きな要因と考えられる。2007 年度は全体の情報量の 30% 程度であったが 2008 年度はその半分の 15% 程度である。
- (3) カテゴリの序列の方向に沿って各学科も並んでいるが、これは各学科の設問に対する回答傾向（評価得点の傾向）も同時に示している。例えば、こども発達学科と英語英米文学科はカテゴリ 1 に近く位置している。これはこれらの学科がカテゴリ 1 を多く回答しているという傾向を示すものである。

※注意事項

- (1) 本調査のように設問（アイテム）の回答（カテゴリ）に何らかの序列関係があるアンケート調査では、図で示すように一定の直線的・曲線的な序列関係が出る。
- (2) 評価得点を計算したときに、便宜的な数値でカテゴリに 5, 4, 3, 2, 1 のような数値を付与して得点化した。その根拠はこのようにカテゴリ間に序列関係が出てくることによる。しかし 5, 4... の数値はあくまでも便宜的なものだということも、この分析法からわかる。
- (3) 個別の科目に対しては、カテゴリ化して分析していないため、各学科の評価であることに注意。

6. 調査方法に対して

6.1 今回の調査について

今回のアンケートのデータは非有効回答数が少し多くなっていることや、回答者の偏りもあるようである。これを踏まえると、調査方法自体を再考すべき時がきているように思われる。以下に今回の調査データから気がついたことを述べておく。

- (1) ウェブによる授業評価アンケートが何回か続き、回答する学生層に偏りが生じているように思われる。
- (2) 回収率が低く回答者も偏っていれば調査結果の信頼性も疑わしくなる。疑わしい調査は教員にとっても学生にとっても意味のないものとなる。
- (3) 図 6.1 には、最初の 1 つか 2 つの設問を答えてその後の設問はすべて 1 を答える、またはすべて 1 と回答、また 6 と回答した回答者の学科別の割合を示す。このような回答が全体で 8% を超えていることは、調査方法自体を再考すべきと思われる。とくに商学は他の学科に比べて有意に高いことは、その背後の問題が何かを考えるべきかと思われる。

ほとんどの設問で1または6と回答した割合

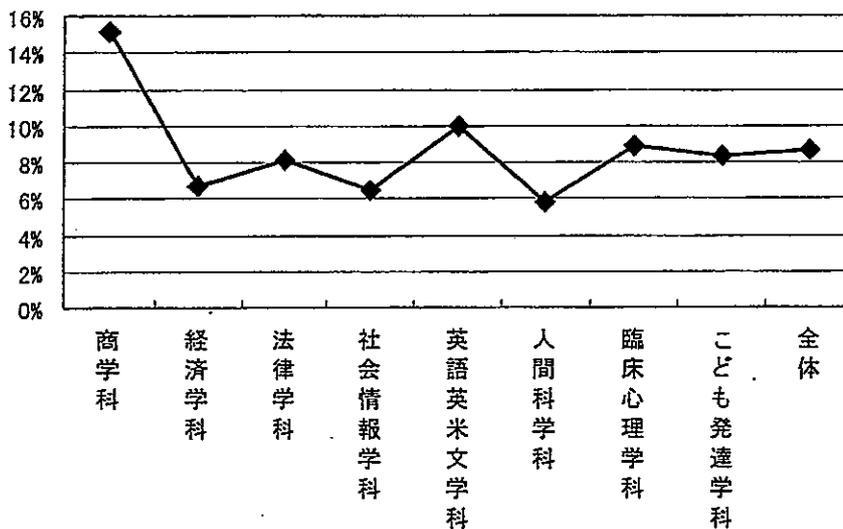


図 6.1

6.2 コメント

紙によるアンケートはコストが高いことからウェブでの調査を行うことはある意味で正攻法かと思われるが、何らかの形で統計的に保証された方法による調査に代えるべきであろう。もし現在の方法で継続するならば、半強制的に回答させるなどの仕組みが必要であろう。教育機関としての授業評価アンケートの重要性（効果、調査の意味など）や、継続することの意味を認識した上で、実効性のある方法をとるべきであろう。

4. FDに関する研究会・研修会参加報告

1) 大学教育学会第31回大会

(2009年6月6日、7日)

第 31 回大学教育学会大会参加報告

内田 司

第 31 回大学教育学会大会は、6 月 6 日（土）・7 日（日）の両日、首都大学東京南大沢キャンパスで、開催された。メイン・テーマは、「教育者としての大学教員」であった。

第 1 日目は、基調のシンポジウムに参加した。ここでは、全国各地の大学で実施されている FD と教員の「教育パフォーマンス」を如何に評価したらよいかについて報告討議された。ここでは、とくに多くの国立大学で、教員の教育力をつけるための FD が展開され、教員の処遇のあり方に反映される「教育活動の評価」が導入されている現状が紹介されていた。教員の「教育パフォーマンス」評価法としては、大体の大学で、学生による教育評価と講義の持ち時間数、そして受講学生の数などの指標を点数化した方式が採用されているようであった。その討論で興味深かったのは、そうした教育改革や FD がどれだけの教育効果の改善につながったのかという点に関しては、どのような基準で、どのように測定し、評価するのかについては全くハッキリしないということであった。改革した結果、明らかに後退していると思われる現象（例えば、学生の就職支援をするためにキャリア課つくったら、就職率が下がったなど）が起きていると思われるのに、あまりそれらのことについては学内で議論にならない現状を指摘する議論があった。

2 日目は、自由研究報告に参加した。私は、「学士課程教育」の分科会に参加した。その際の、問題意識は、現在行われている大学教育改革や FD が、その成果としてどのような教育効果をあげているのか、またそうした教育効果をあげることに成功している事例があれば参考にしたいというものであった。報告では、日本だけでなく、アメリカやヨーロッパの大学で行われている教育改革の諸事例が報告された。ここでも興味深かったのは、それらの改革がどのような教育効果をあげているのかについては、全くわからないという点で一致していたことである。そもそも、「学士力」とは何か、どのような基準と測定法で「学士力」が向上したとか、低下したとか評価使用としているのか、現在実施されている改革は、「学士力」向上という目標との関係でどのような効果をあげているのかなどについては、全くわからない。それらは、各大学独自に自由に決めてよいのではないかという議論となっていたことである。ある司会者の、「外部的圧力か、経営上の必要から改革しているのであって、それらを考慮にいれている余裕はない」という発言が印象に残った。

ただ、ベネッセ教育開発センターの樋口健さんの「大学生活への適応に関する課題～入学半年後の状況に着目して～」という発表が、本学の全学共通教育の改革との関係で、参考となると思われた。

2 日目のシンポジウムは、「大学教員の養成の課題」であった。ここでは、大学教員養成に、教職課程を導入する是非について報告と議論が行われていた。論点は、大学院教育は、まず、研究者養成であり、すべての卒業生が大学教員になるわけではない中で、教職課程をどのように位置づけるべきかというものであった。

4. FD に関する研究会・研修会参加報告

2) 第 59 回東北・北海道地区大会

一般教育研究会参加報告

(2009 年 9 月 3 日、4 日)

2009年9月3日、4日に岩手大学（岩手県盛岡市）にて第59回東北・北海道地区大学一般教育研究会が開催された。以下、内容を報告する。

1日目午前には全体会Ⅰとして基調講演が、午後には分科会がおこなわれた。午後の分科会には第1分科会「授業の質を高める努力」、第2分科会「授業改善を目指す組織的取組」、第3分科会「初年次教育における授業の工夫」という三つの分科会がおこなわれ、報告者は第3分科会に出席した。

全体会Ⅰ平沢安政（大阪大学）『「キー・コンピテンシー」(OECD)が『学士力』に示唆するもの』

2008年9月に中教審から「大学卒業までに学生が最低限身につけなければならない能力」として4分野13項目からなる「学士力」の考え方が提示された。しかし中教審においてはその学士力の各項目をどのように関連付け、カリキュラムを組み教育すべきかという具体的内容には触れられていない。一方、OECDが1997年以降取り組んできた「コンピテンシーの定義と選択」の最終報告書で出された「キー・コンピテンシー」（21世紀型市民が生きるために必要な主要能力）では、①ツールを相互作用的に用いる力、②自律的に行動する力、③社会的に異質な集団で交流する力という三つの柱をもとに主要能力（キー・コンピテンシー）を整理しなおしている。

この「キー・コンピテンシー」と中教審の提示する「学士力」とは多くの部分が一致している。これを踏まえ発表者は、上記三つの関係性を把握したうえで学士力を位置づけなおすべきだと述べた。「学士力」教育においては①人権・民主主義・多文化主義の価値観を基軸に、②知識・態度・スキル・行動の柱立てに基づいたカリキュラムと多様な教育方法の開発をおこない、③個人のニーズ（人生の成功）と社会的ニーズ（正常に機能する社会）のマッチングをはかるというプロセスが必要であるという。

午後・第3分科会「初年次教育における授業の工夫」

話題提供1：大和田秀一（酪農学園大学）『「初年次教育を考える会」の取組み』

酪農学園大学では2004年から2005年にかけて教職員有志によって「初年次教育を考える会」がおこなわれていた。多様化する学生への対応、新しい教養教育への期待、教員個別の初年次教育に対する取り組みの成果・課題の共有化をはかることを目的に、月例会で初年次教育がどうあるべきかを議論したという。この取り組みは、その背景・内容とともに現在本学総合教育センターが実施している懇談会に非常によく似ている。酪農学園大学ではその月例会の内容を記録集として発刊し、現状認識を共有した点で成果があったとのことである。ただし行動計画・提言の策定には至らないまま解散したとのことであった。本学の懇談会についても、同様の事態に陥らぬよう注意すべきであろう。なお、この酪農学園大学の取組みの記録集を添付資料として付す。

話題提供2：竹内謙（東京理科大学基礎工学部）「理数系少人数教育のためのe-Learningシステムの開発：ポータブルゲーム機を用いた実験実習支援システム」

東京理科大学基礎工学部長万部キャンパスでの実験実習の教育方法についての報告であった。ポータブルゲーム機PSPを用いて実験実習の方法、基本的な器具の扱い方などの映像を配信し、予習・復習に活用しているという話題であった。また、全寮制という長万部キャンパスの特性を生かし、実習科目の学生間の相互教育がおこなわれている点が補足情報として報告された。

話題提供 3：中島理（岩手医科大学）「初年次での自然科学系強化におけるリメディアル教育カリキュラムの編成と実践」

話題提供 5：松政正俊（岩手医科大学）「医療系総合大学における初年次教育：3つの教育機能の効率的調和をめざして」

話題提供 3 と 5 は、ともに岩手医科大学における初年次教育の取組みについての報告であった。入試の多様化に伴い、理科の物理・生物・化学のいずれか、もしくは複数科目が未履修の状態で入学する学生が増えてきたため、リメディアル教育を1年次前期におこなうこととした。これまで3学部それぞれ独自のカリキュラムを組んでいたが、このリメディアル科目を取り入れるために再編成をおこない、3学部共通（同一時間割、同一クラス）のリメディアルプログラムをカリキュラムに取り入れた。また同時に問題基盤型学習という、複数教員同時参加による演習科目を取り入れた。

これらの取組みは一定の効果をあげている。しかし医学部教育（単位制ではなく学年制であること、学生の選択科目がほとんどないこと）の特性あってこそその取組みであり、他学部の教養教育に取り入れることは現実的には難しいと思われる。

話題提供 4：立松潔（山形大学）「スタートアップセミナーと基幹科目を軸にした初年次教育の改革」

山形大学が来年度より実施する予定の初年次教育についての報告であった。教養部の廃止に伴い、これまで山形大学では全学出勤体制で教養教育を担ってきたが、多様な科目を提供しえた反面、コアとなる科目・特色の欠如が問題となってきた。それに対応するためにコアとなる科目として、①山形大学の理念「人間」「共生」をキーワードとした全員必修の基幹科目「人間を考える」「共生を考える」科目を複数展開する、②スタートアップセミナー（大学での基礎的学習技法を習得し、課題探求能力を養い、大学4年間の学習イメージを確立するための少人数ゼミ）を新設し、共通テキストを作成する、という二つの改革をおこなうという。学部学科教員が担当するスタートアップセミナーは、本学の基礎ゼミに類似している。ただし共通テキストを用いる点、また全学共通科目として提供される点が異なる。今後「特色」「魅力」をどのように確立するかが課題となるという。

上記4大学の取組みについて報告があったが、東京理科大の報告を除いてはいずれも試行錯誤の段階という印象が強かった。理系大学・学部の報告が中心であり、本学の初年次教育に活用しうる内容とはいえないものであったが、いずれも多様化する学生への対応に迫られての改革という点が本学が置かれている状況と一致する。こうした他大学の取組みを追いつつ、本学の初年次教育のあり方を検討する必要があるだろう。

2日目は「大学間連携の時代とESD：北欧の取組にも触れて」と題し、岩手大学の玉真之介氏とフィンランド・オーボアカデミー大学のポーラ・リンドローズ氏より、バルト海沿岸14カ国の大学間連携についての紹介がなされた。その後、各分科会の報告および意見交換が行われ、散会となった。

今回は三つの分科会がいずれも本学総合教育センター改革に関連するテーマであったが、参加者が報告者のみであったため、他の分科会がどのような内容であったのかを詳細に把握することができなかった。たとえば北翔大学のように3名を派遣し、各分科会に分散参加する大学もある。複数名が派遣可能となるようなかたちをとることも必要と考える。

4. FD に関する研究会・研修会参加報告

3) 大学教育学会

2009 年度課題研究集会

(2009 年 11 月 28 日、29 日)

大学教育学会 2009 年度課題研究集会参加報告

11 月 28-29 日 (大阪市立大学)

白石 英才

キーワード：学士課程教育、評価、大学教育の質保証 (quality assurance)・質向上 (quality enhancement)、教育のパフォーマンス/アウトカム統制への圧力

特別講演：教育への問いかけ 鷺田清一 (大阪大学総長)

大学が涵養すべき学生の能力として「わからないことを捨てない、わからないことにつき合う (耐える) タフな知性」であることが具体例を交えながら論じられた。高等学校までの教育とはすでにわかっていることを知識として教わること。大学ではそうした姿勢から脱却し、わからないことにはいかに取り組むかという姿勢を身につけなければならない。教員はそのためのサポートをすべきである。

1 日目 シンポジウム I：学士課程における教養教育のあり方

3 名の報告 (別添資料参照) の後、とりわけ大学教育の学習成果 (learning outcome) 評価のあり方について激しい議論が行われた。アメリカでは卒業論文とは別に、大学で学んだ成果を卒業時に測定するための共通テスト (例：CLA Collegiate Learning Assessment) を導入する動きがある (いわゆる出口評価)。これは大学教育の質保証の問題を考えたときにある程度有効な手段であるとする意見が出される一方、日本学術会議/日本の展望委員会/知の創造分科会委員長である藤田英典氏からはそうした評価の有効性については理論的にも経験的・実証的にも根拠が示されていないと導入に否定的に見解が示された。白石はこの問題について、大学間のランキングが確立しており、それによる学歴差別が歴然と存在する日本においてこのような評価方法を導入することは大学間あるいは地方と都市のさらなる格差の拡大につながるのではないかと懸念を持った。

2 日目 シンポジウム II：「学士課程教育」はどうあるべきなのか

3 名の報告 (別添資料参照) とそれに対する指定討論者による問題提起・反論がなされ、前日に引き続き大学の出口評価のあり方をめぐって激しい議論が行われた。報告者の一人 (関西国際大学の濱名篤氏) は日本の大学における評価のあり方全体 (出口評価のみならず) の問題点として学外有識者による評価を受け入れることに消極的であることや、テスト理論が未整備であるため卒業時に課す共通試験が導入されにくいことをあげた。この点については前日のシンポジウムの流れから、アメリカにおいても卒業時の共通テストが学習成果測定のための有効な手段と見なされているわけでは必ずしもなく、大学によっては少数の卒業生を対象にインタビュー形式による学習成果測定の試みもあることが紹介された (絹川正吉前 ICU 学長より)。この問題については、大学教育の質保証のためにアメリカ

のように積極的に評価を導入するべきであるとする若手教員と、評価はそもそも市場主義的であるという理由から教育の場に持ち込むことには慎重な年配教員との間の意見の違いが目立った。

全体を通しての白石の評価

学士課程教育のあり方がテーマとされたが、その内容はこれまでの一般教養教育のあり方についての議論の延長線上にあり、前述の「評価のあり方」にかんする部分以外には目新しさを感じなかった。また、企画委員会のメンバーが公立大学もしくは都市部の私立ブランド校の教員で占められていたためか、定員割れをおこし経営の危機にさらされている大学からの参加者との視点のズレを随所で感じた。例えばシンポジウムの冒頭で企画委員長が「市場（企業）におもねない教養教育を学士課程の中で目指すべき」とブチあげたが、就職率が過去最低水準にとどまろうとしている全国の私立大学の教員、経営者にその言葉はどれほどの説得力をもって響いたか。地域に貢献する人材育成を第一に掲げるのであれば、地域のニーズにこたえる教養教育のあり方も模索されるべきではなかったか。

また蛇足かもしれないが文部科学省（あるいは中教審）の学士教育にかんする方針が紹介される一方でそれに対して疑問をなげかけたり、あるいは批判する発言が一切なかったことも奇異に感じられた（学会の体質？）。学士課程教育のあり方を論じるときに、日本全国の大学を十把一絡げに扱ってよいものだろうか。その意味でシンポジウム II で様々な学力の高校生が大学に大量に入学している現状にどう対処するか改めて問題提起されたこと（東北大学の羽田貴史氏）は意義深かったと感じる。

5. 関係資料

- 1) FD推進センターの設置について
(全学運営会議提案文書)

FD 推進センターの設置について（修正案）

学長 布施晶子

1. 提案

本学の FD を推進するための中核組織として札幌学院大学 FD 推進センターを 2009 年度中に設置することを提案する。あわせて、その組織の要となる FD 専門員の人事を行う。

2. 理由

- (1) 平成 20 年度より大学設置基準の中で FD が義務化されたこと（大学院は平成 19 年度より義務化）（別紙 1 の①, ②参照）。
- (2) 平成 21 年度文部科学省の特別補助の選定方法が変更され、補助金の算定基準において、FD のための組織の有無、取組の可否が前提条件となり、これらの条件を満たさない限り補助金が支給されないこと（別紙 1 の③参照）。
- (3) 2007 年度に実施した外部評価において、本学の FD の取組の不十分さが指摘されており、2010 年度中に改善報告書を提出する必要があること。
- (4) 2007 年度から得ている補助金の一部において、本学は 2008 年度中に FD を行うための組織が設置されていることになっているが、それが未完であること。
- (5) 本学の現状では FD の取組はほとんどが学部任に任されており、その取り組み状況にばらつきがあること。
- (6) FD の取組がなされている学部においても、それらが学内外に周知されていないため、全学への波及や情報の共有化が不十分なこと。
- (7) FD を主体的に行う体制や人的資源がなく、また、運営や FD のプログラムを企画するノウハウもないこと。

3. FD 推進センターの構成と位置付け

(1) 構成

- | | |
|------------|---|
| 1) センター長 | 副学長が担う。センターを代表し統括する。 |
| 2) 教務部長 | センター長の補佐、教務委員会との調整等を行う。 |
| 3) FD 専門員 | FDer: Faculty Developer（別紙 1 の④）と呼ばれる専門員であり、特別任用教員（教授～講師）1 名を充てる。 |
| 4) FD 推進委員 | 原則として各学科長（総合教育センターは教務委員長）が担当する。ただし、学科長が充当できない場合は学科毎に 1 名の教員を充てる。大学院は 3 研究科から運営委員 1 名を充てる。 |

※所管

教務課

(2) これまでの経緯と組織の位置づけ

総合教育センターの中に位置付けるという構想が 2008 年度議論され、その中で FD は全学に関わる事業であるので、その外に設置するという意見が出された経緯がある。それを踏まえ FD 推進センターは各部局とは独立し、図 1 のように大学院研究科、各学部学科、総合教育センター、全学教務委員会と連携して活動する。

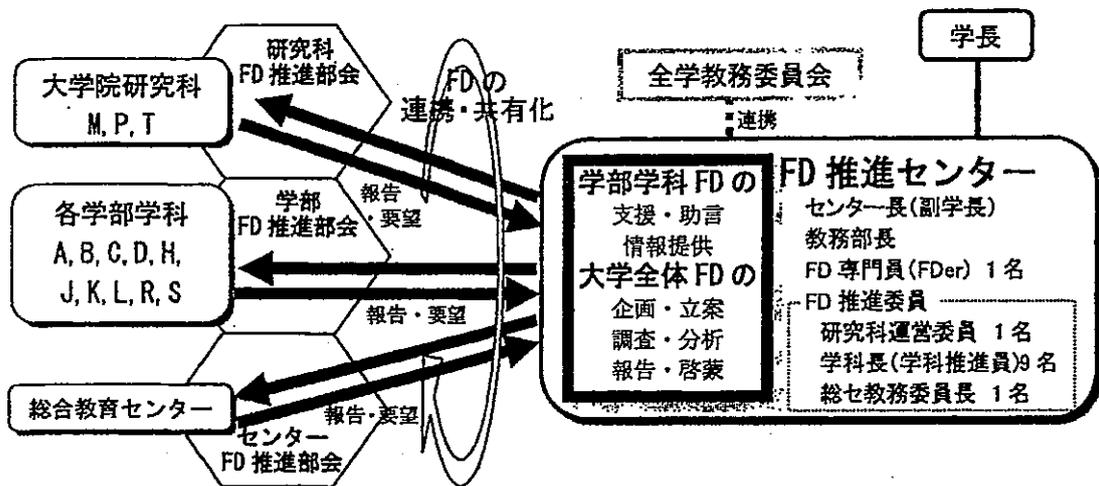


図1 FD推進センターとFD推進部会

4. FD推進センターの役割と業務

- (1) 学生による授業評価, 授業経験交流会等の学部学科のFDの取組みの現状把握及びそれに対する支援・助言・情報提供
- (2) 教職員研修, 新任教員オリエンテーション, 講演会等の大学全体のFDの取組みの実施
- (3) 教育の質的向上に資する諸施策(プロジェクト)の企画・立案及びそれに関連する情報の収集
- (4) FDについての啓発活動及び情報公開(ニュース, 活動報告書等の編集・発行等)
- (5) カリキュラム改善や教育改善に対する提言
- (6) 他大学とのFDに関する連携
- (7) FDの推進のための予算に関する事項
- (8) その他, センターの目的達成のために必要な事項

5. FD推進委員会とプロジェクトチーム

FD推進センターの業務の円滑な推進のために年3回程度のFD推進委員会を開催する。また, 適宜, プロジェクトチームを形成し, プロジェクトチームはプロジェクトの企画・立案・実施の主体となる。

6. FDの定義(参考案:センター設置後に再定義する)~FD推進センターの目標~

本学の理念を踏まえ, 各学部学科・大学院各研究科が掲げる教育目標を実現するために, カリキュラムや個々の授業についての配置・内容・方法・教材・評価等の適切性に関して, 教員が職員と協働し, さらに学生の参画を得て, 組織的な研究及び研修を推進するとともに, それらの取組みの妥当性及び有効性について不断の検証を行い, さらなる改善に活かしていく活動を言う。

7. その他:FD推進部会の設置

学部, 研究科, 総合教育センターはFD推進部会を設置する。FD推進部会は学部(研究科)運営会議その他をもって充てることができる。FD推進部会は, FD推進センターの事業の推進に協力するとともに, 各セクションにおいて独自のFD事業を推進するものとする。

①大学設置基準等の一部を改正する省令等の施行について（通知） （抜粋）
平成19年7月31日

7 教育内容等の改善のための組織的な研修等に関する事項

大学設置基準第25条の3の規定によるいわゆるファカルティ・ディベロップメント（FD）については、これまで努力義務であったものを義務化するものであるが、これは大学の各教員に対し義務付けるものではなく、各大学が組織的に実施することを義務付けるものであること。これを踏まえ、各大学においては、授業の内容及び方法の改善につながるような内容の伴った取組を行うことが望まれること。

②大学院設置基準改正

平成19年4月1日

（教育内容等の改善のための組織的な研修等）

第十四条の三 大学院は、当該大学院の授業及び研究指導の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。

③平成21年度特別補助の申請様式（FDを要件とする記述）

平成21年度 大学教育の質向上への一体的な取組支援
(教育力向上のための組織的研修等)

登録番号	件数	件目
学部等コード	昼夜等コード	学部等名

FD実施のための組織名(委員会名)・開催状況

組織名 (委員会等名)	開催状況 (年3回以上)	有
----------------	-----------------	---

1 FD実施の概要

その取組の実施状況で非常勤を含むか否か

2 FD実施についての取組

番号	項目	取組状況
1	専任教員以外のFDへの参加	○
2	教員に対する表彰・業績評価制度	○

表彰制度があるか否か

これらの一連の証拠があるか否か

保管資料チェック欄

各取組項目の確認資料が保管されていることを確認して、○印を付す

FDのための組織の有無と開催状況の有無(年3回以上)

上の条件(絶対条件)が満たされれば、次の算定基準の補助金が支給される。
専任教員等数 × 単価 (@1~1.5千円) × 取組数

④FDer (Faculty Developer)

日本私立大学協会 HP http://www.shidaikyo.or.jp/newspaper/online/2314/3_4.html

～愛媛大学 佐藤浩章准教授・教育企画室副室長の談話より～

教員が、自らの教育力を高めようと思ったとき、個人で取り組めるのであればよいのですが、他者の支援を得ることで、さらに効果的な場合があります。

このように教員や組織の教育力を高める支援をする専門職が、F D e r です。カナダのある先生は、「大学全体が学習に焦点化していくための仕事をする」のが F D e r だと言っています。

F D e r は、教育・学習に関するあらゆる課題解決が仕事です。教員一人ひとりの能力開発、例えば、プレゼンテーションの仕方やシラバスの作り方、パワーポイントの使い方といった授業改善に関わる研修やコンサルテーションから、大学の理念に合わせたカリキュラムの開発、大学全体の組織改革に至るまでが仕事の範囲となります。高校生向けのパンフレットで教育内容がうまく表現されていないと感じれば、広報室と連携して改善を行います。もちろん教員だけでなく職員とも連携します。

教員の能力開発の場合、今挙げた研修以外にも、多種多様なメニューを開発しています。何故なら、教員の課題が様々だからです。出来合いの研修をただ行うのではなく、個々の教員のニーズに対応できるように絶えず努力しています。

しかしながら大前提は、教員本人に授業改善の意欲があることです。それがなければ、いくら良質なプログラムやコンサルタントを用意しても意味がありません。

5. 関係資料

2) 札幌学院大学FDセンター規程

札幌学院大学FDセンター規程

平成21年12月24日
制 定

(趣旨)

第1条 この規程は、札幌学院大学組織規程第31条に基づき、札幌学院大学FDセンター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

(センターの目的)

第2条 センターは、札幌学院大学の理念及び各学部学科・大学院各研究科の教育目標を踏まえ、教育の質的向上に資する教育支援施策を立案し、各学部学科・各研究科のFD活動を支援し全学的なFDを実施することを目的とする。

(センターの業務)

第3条 センターは、前条の目的を達成するため、次の各号に掲げる業務を行う。

- (1) 学生による授業評価、授業経験交流会等の各学部学科・各研究科のFDの取組みの現状把握及びそれに対する支援・助言・情報提供
- (2) 教職員研修、新任教員オリエンテーション、講演会等の大学全体のFDの取組みの実施
- (3) 教育の質的向上に資する諸施策（プロジェクト）の企画・立案及びそれに関連する情報の収集
- (4) FDについての啓発活動及び情報公開（ニュース、活動報告書等の編集・発行）
- (5) カリキュラム改善や教育改善に対する提言
- (6) 他大学とのFDに関する連携
- (7) FDのための予算に関する事項
- (8) その他、センターの目的達成のために必要な事項

(センター長)

第4条 センターに、FDセンター長（以下「センター長」という。）を置く。

- 2 センター長は、センターの業務を統括し、センターを代表する。
- 3 センター長は、副学長をもって充てる。
- 4 センター長に事故あるときは、教務部長がその職務を代行する。

(FD専門員)

第5条 センターに、FD専門員を置く。

- 2 FD専門員は、センターの業務の企画・開発・立案を中心となって行う。
- 3 FD専門員は、原則として、FDに関する高度な専門知識を有する専任教員をもって充てる。

(FD委員会)

第6条 センターの業務に関する重要事項を審議し、大学として組織的にFDを実施するため、センターにFD委員会（以下「委員会」という。）を置く。

- 2 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって構成する。
 - (1) センター長
 - (2) 教務部長
 - (3) FD専門員
 - (4) FD委員（原則として各学科長、総合教育センター1名、大学院1名）
 - (5) その他必要と認められた者
- 3 委員会は、センター長が招集し、その議長となる。
- 4 委員会は、委員の過半数の出席をもって成立する。
- 5 委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
- 6 議長が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、説明又は意見を求めることができる。

(プロジェクト・チーム)

第7条 センター長は、特定のプロジェクトを企画・立案・実施するため、プロジェクト・チームを組織することができる。

(議事録)

第8条 委員会の議事については、議事録を作成し、議長が記名、押印した後保管する。

(所管部署)

第9条 委員会の運営に必要な事務は、教務部教務課が所管する。

(規程の改廃)

第10条 この規程の改廃は、大学協議会の議を経て、理事会が行う。

附 則

この規程は、平成21年12月24日から施行する。

平成21年12月7日	資料3
北海道地区FD・SD推進協議会幹事会	

「北海道地区FD・SD推進協議会」規約

平成21年10月8日
北海道地区FD・SD推進協議会総会決定

(名称)

第1条 この協議会は、北海道地区FD・SD推進協議会（以下「協議会」という。）と称する。

(目的)

第2条 協議会は、北海道地区の大学、短期大学及び高等専門学校（以下「大学等」という。）並びに北海道地区に校地を備える当該地区以外の大学等が、大学等の教育改善、教職員の能力開発等の推進を図るため連携し、もって、大学等の教育の質を向上させ、各大学等が掲げる教育目標の実現に資することを目的とする。

(活動)

第3条 協議会は、前条の目的を達成するため、次に掲げる活動を行う。

- (1) FD、SD及びTADの推進に係る情報の交換及び共有に関すること。
- (2) FD、SD、TADプログラム等の共同開発及び共同実施に関すること。
- (3) FD、SD及びTADを担当できる人材の育成に関すること。
- (4) その他FD、SD及びTADに関し必要な活動に関すること。

(加盟校)

第4条 北海道地区の大学等及び北海道地区に校地を備える当該地区以外の大学等であつて、協議会の目的に賛同する大学等は、協議会の加盟校となることができる。

- 2 協議会へ入会し、又は協議会から退会しようとするときは、協議会に届け出なければならない。
- 3 協議会は、前項に定める入会の届出があつたときは、第7条に規定する幹事会において加盟校として承認し、総会で報告する。

(総会)

第5条 協議会に、総会を置く。

- 2 総会は、加盟校をもって構成する。
- 3 総会は、原則として毎年1回開催する。
- 4 各加盟校は、当該加盟校を代表して総会に出席する者1名をあらかじめ登録しなければならない。ただし、加盟校に所属する他の者が、あらかじめ登録した者を代理し、又は総会に陪席することができる。
- 5 総会は、次に掲げる事項を審議する。
 - (1) 年度ごとの活動方針及び活動報告に関すること。
 - (2) 幹事校の選出に関すること。
 - (3) 規約の改正に関すること。
 - (4) その他協議会に関する重要な事項
- 6 前項に定めるもののほか、総会の議事の運営に関し必要な事項は、総会で定める。
- 7 総会は、加盟校の過半数の出席がなければ、開会することができない。ただし、加盟校は、総会に出席できない場合であつて、審議事項があらかじめ決定しているときは、事前に意見書を提出して、出席に代えることができる。
- 8 総会の議事は、出席加盟校の過半数をもって決するものとする。

(代表幹事校及び幹事校)

第6条 協議会に代表幹事校及び幹事校を置く。

- 2 幹事校は、加盟校のうちから、総会において選出する。
- 3 代表幹事校は、幹事校のうちから、幹事校の互選により選出する。
- 4 代表幹事校は総会及び幹事会を招集し、議長校となる。
- 5 幹事校の任期は2年とし、再任を妨げない。

(幹事会)

第7条 協議会に幹事会を置き、代表幹事校及び幹事校をもって構成する。

- 2 幹事会は、次に掲げる事項を審議する。
 - (1) 代表幹事校の選出に関する事。
 - (2) 協議会の活動に係る企画立案及び実施に関する事。
 - (3) 協議会への入会及び退会に関する事。
 - (4) 総会の議案に関する事。
 - (5) 協議会の運営に関する事。
 - (6) その他協議会に関する重要な事項であつて、緊急に決定を要する事。
- 3 幹事会は、前項第6号の規定による決定をした場合には、加盟校に速やかに報告しなければならない。
- 4 幹事会が必要と認めるときは、幹事会に幹事校以外の大学等の出席を求め、意見等を聴くことができる。
- 5 この規約に定めるもののほか、幹事会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

(ワーキンググループ)

第8条 幹事会に、協議会の活動を行うため、必要に応じてワーキンググループを置くことができる。

- 2 ワーキンググループの組織及び運営については、幹事会で別に定める。

(連携協力)

第9条 協議会は、協議会の活動に賛同する団体、コンソーシアム等と連携協力を図るものとする。

(事務局)

第10条 協議会の事務局は、代表幹事校に置く。

- 2 代表幹事校は、事務局の運営にあたる。

附 則

- 1 この規約は、平成21年10月8日から施行する。
- 2 この規約の施行後、最初に選出される幹事校の任期は、第6条第5項の規定にかかわらず、平成23年3月31日までとする。

札幌学院大学

第4回 FACULTY DEVELOPMENT 報告書

発行日 2010年6月30日

編集 札幌学院大学 FDセンター

〒069-8555 北海道江別市文京台 11 番地